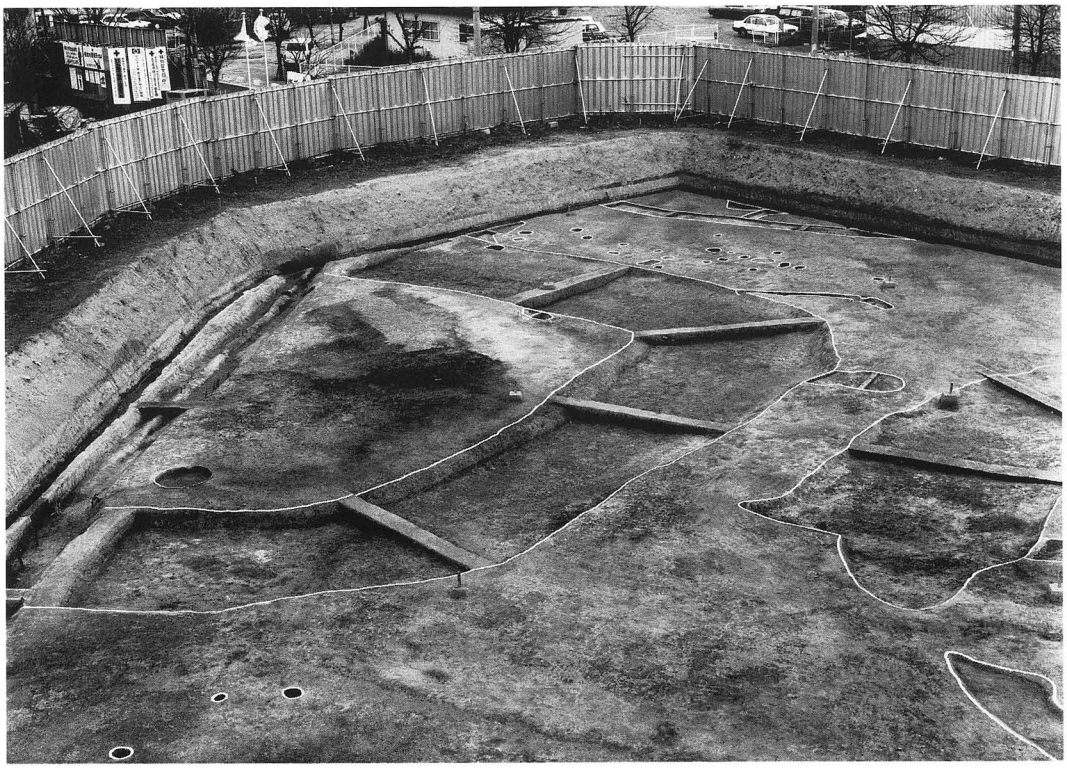
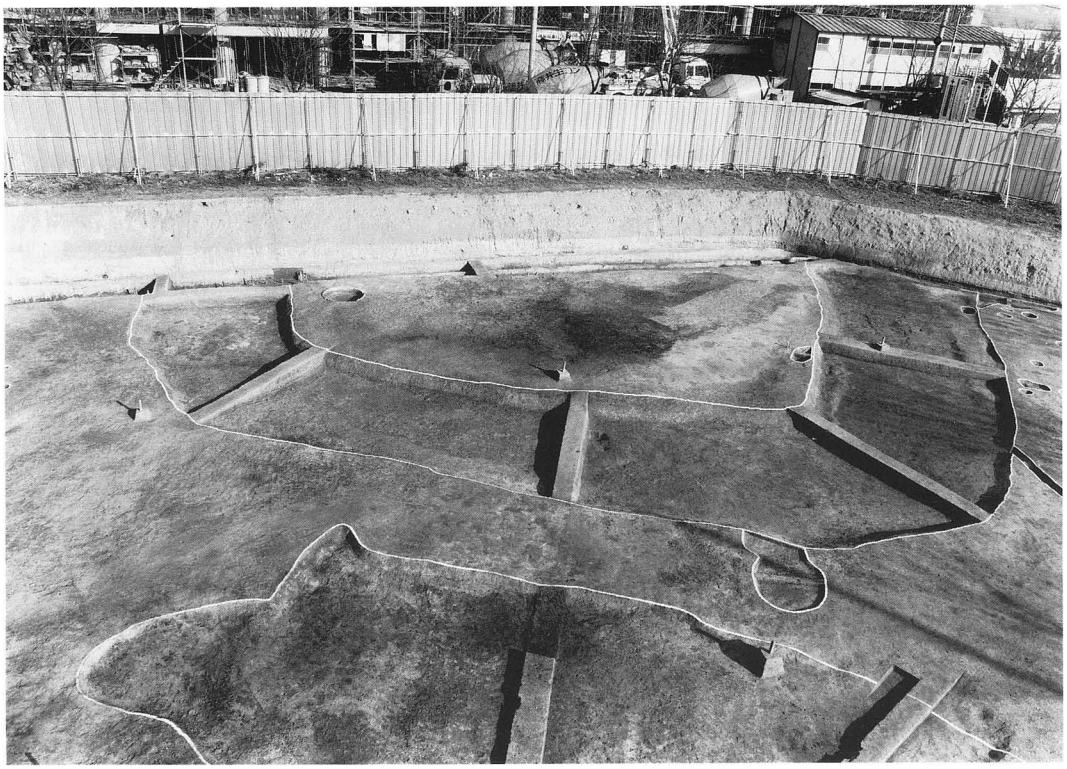
西区１号墳土器集積検出状況（西から）

同上１段目（西から）

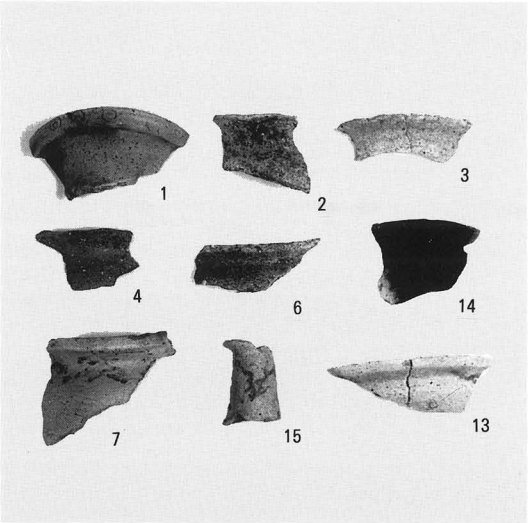
同上１段目下部（西から）

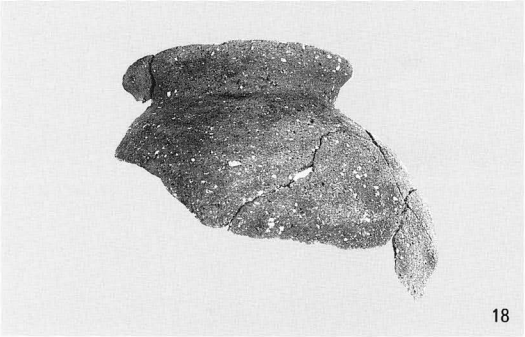


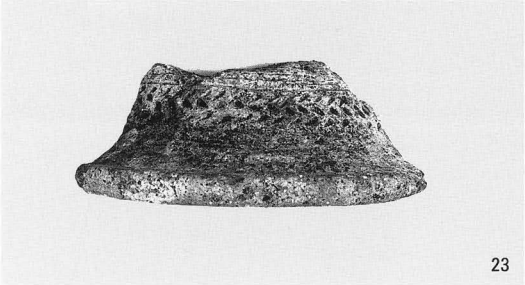
西区３号墳検出状況（西から）



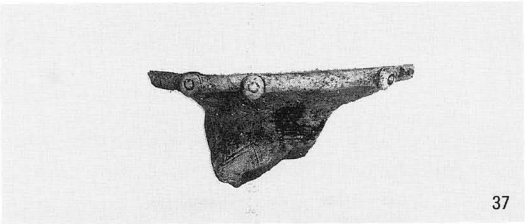
同上（南から）

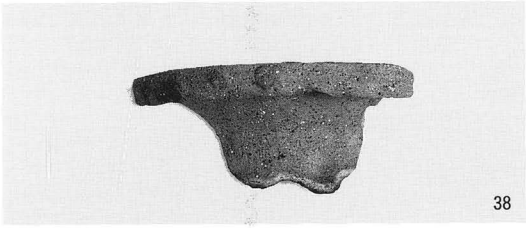






東区ＳＥ－１（１～15）、ＳＫ－１（17・18・21）・ＳＫ－８（22）、ＳＤ－３（23）・ＳＤ－５（29）・ＳＤ－13（33）出土遺物


37

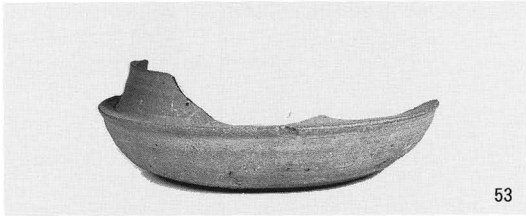

38

43

44

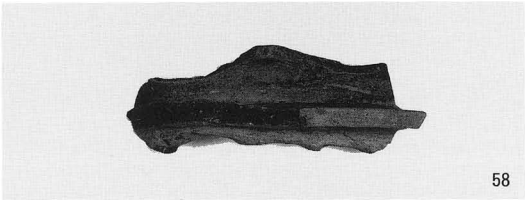
59

51


53

54

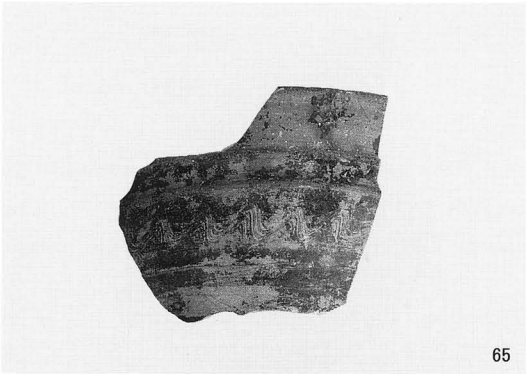
56


58

60

東区第４層出土遺物

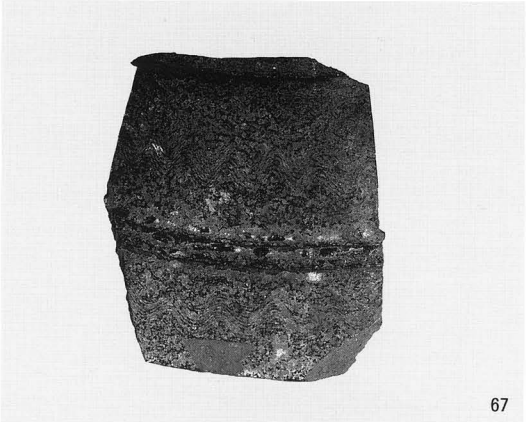
61


65

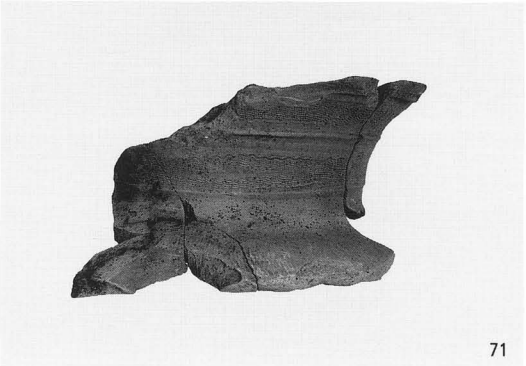
63

66

62


67

70

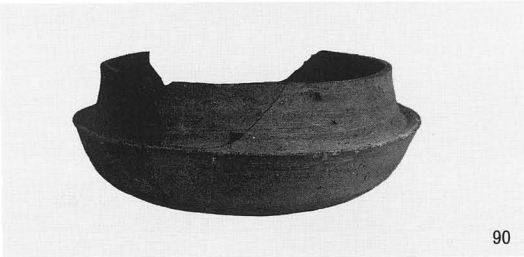

71

西区ＳＥ－２(61・62・63・65・66・67)・ＳＥ－４(70・71) 出土遺物

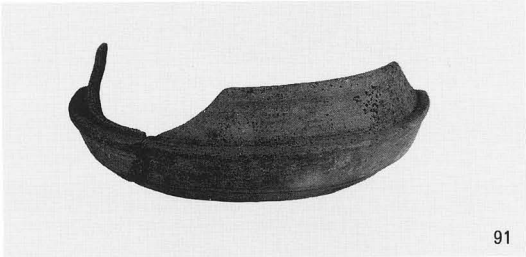
72

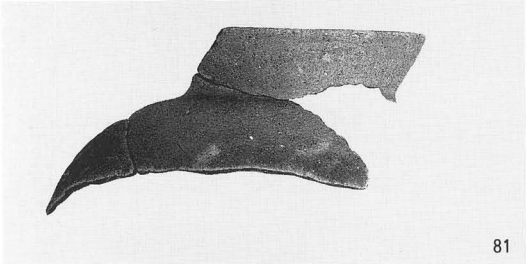
73

75


90

79


91


81

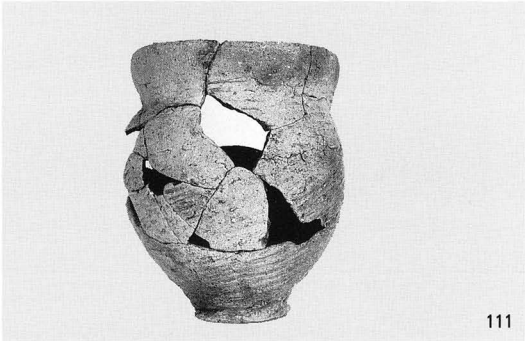
93

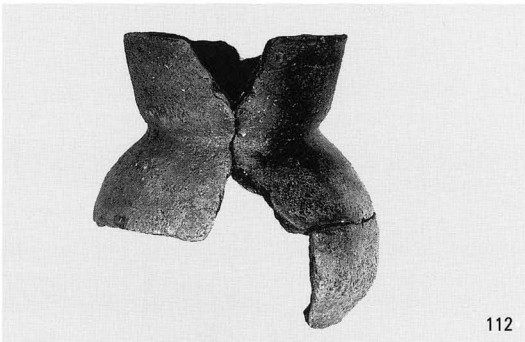
80

95

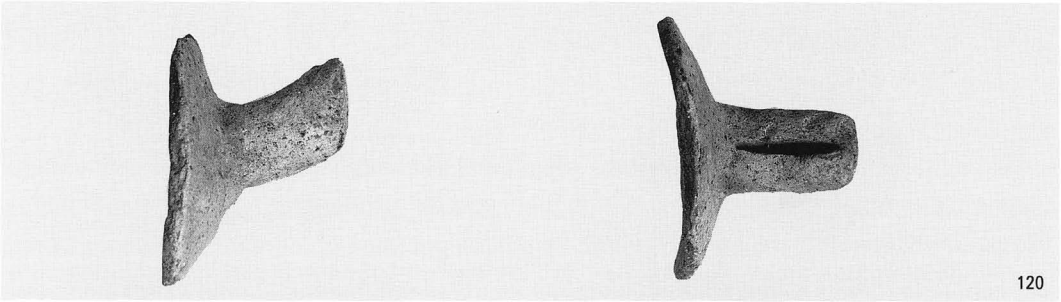
西区ＳＥ－４(72・73・75)、ＳＫ－12（79）・ＳＫ－13（80・81）・ＳＫ－14（90・91・93・95）出土遺物

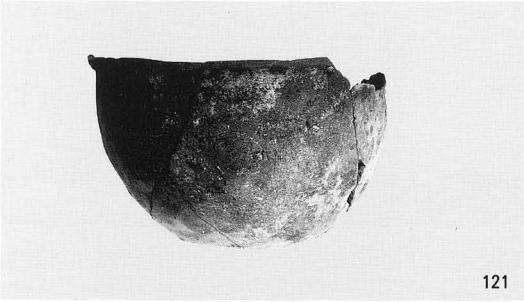
西区ＳＥ－４出土鞍（76）上（表面）、下（裏面）

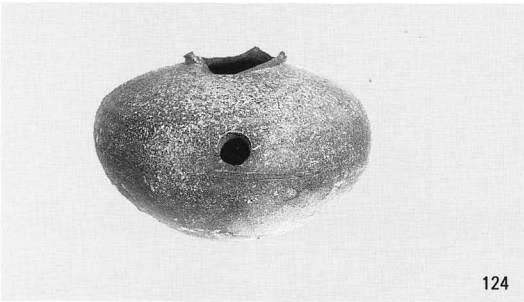




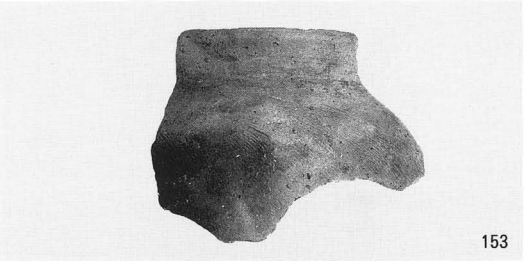
西区ＳＫ－15（100・103・104・106・108）・ＳＫ－16（111）・ＳＫ－18（112・116・118）出土遺物

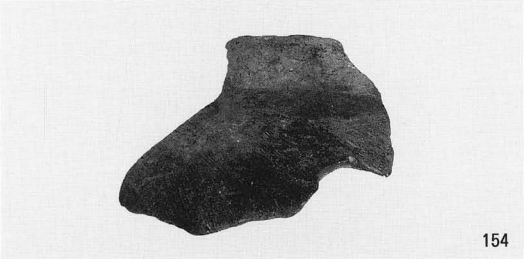




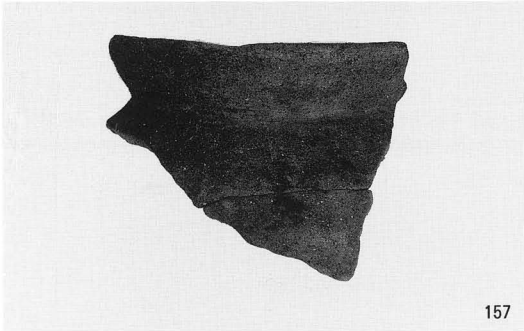


西区ＳＫ－18（120・121・124・125）・ＳＫ－19（127・128）・ＳＫ－35（137）、ＳＤ－24（151）出土遺物

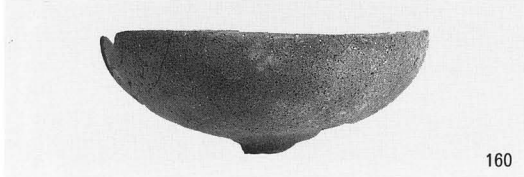

153

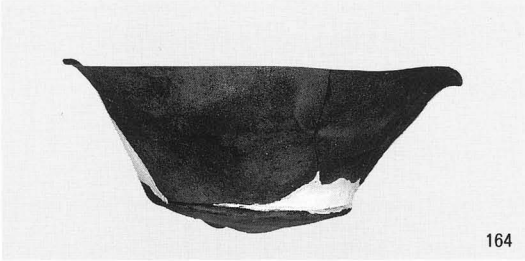

154

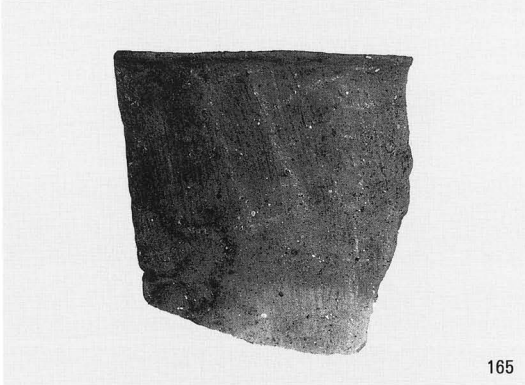
156

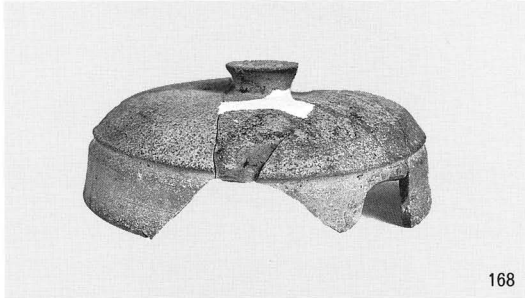

157

159


160


164

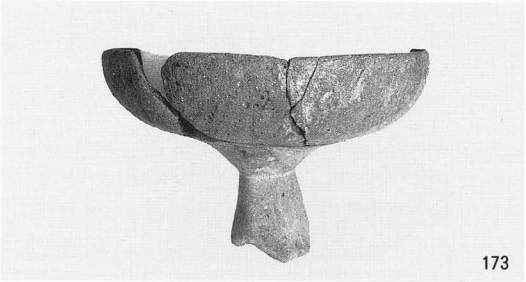

165

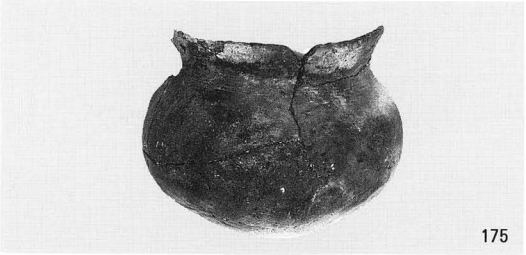

168

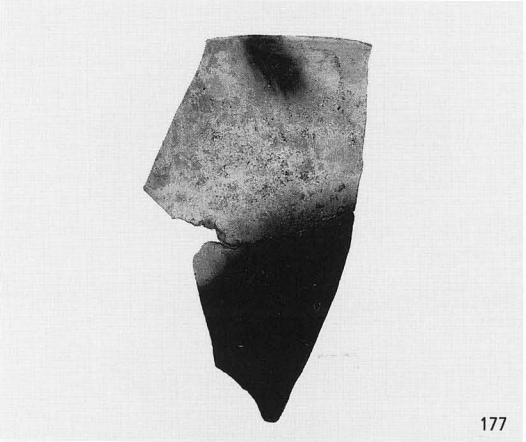
169

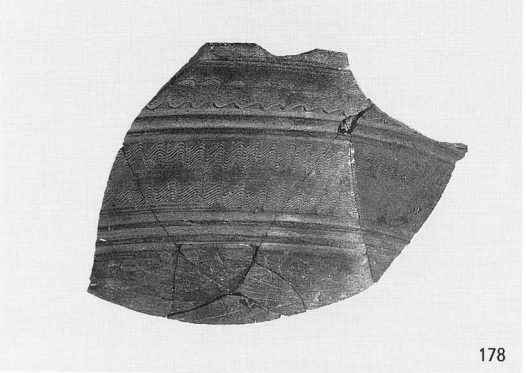
172

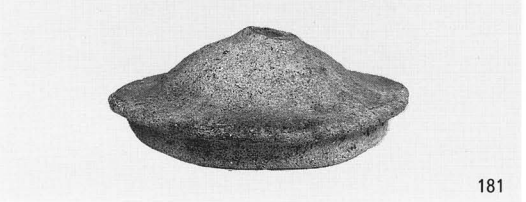
西区ＳＤ－27出土遺物


173

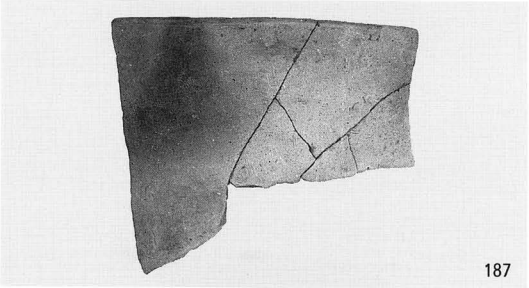

175


177

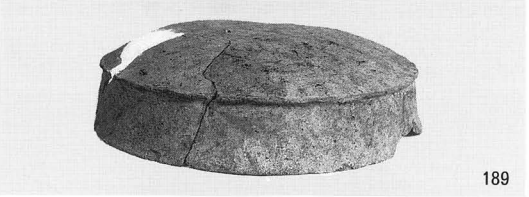

178


181

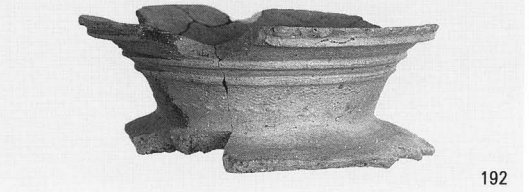
182


187

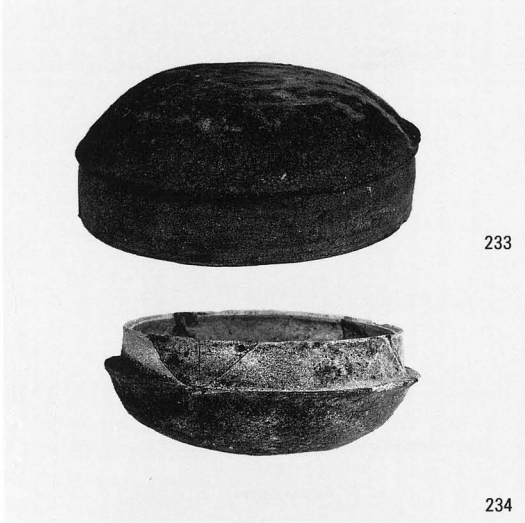
188


189

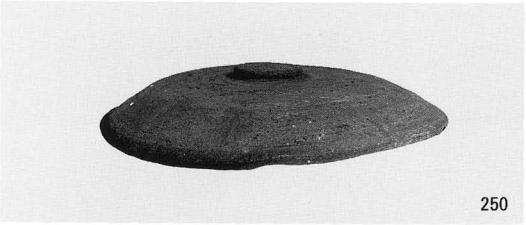
191

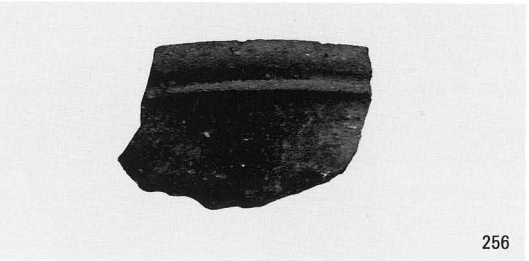

192

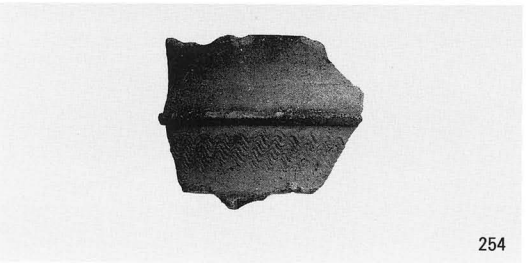
西区ＳＤ－28（173・175・177・178）・ＳＤ－31（181・182・187～189・191・192）出土遺物



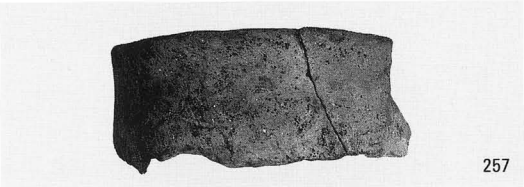
西区１号墳土器集積出土遺物

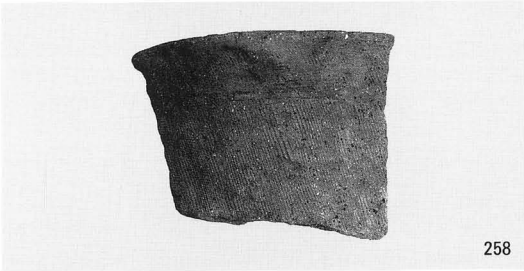


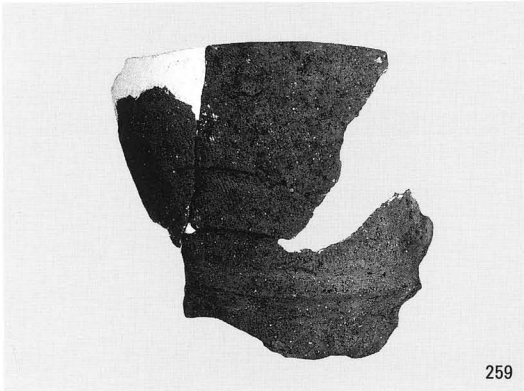


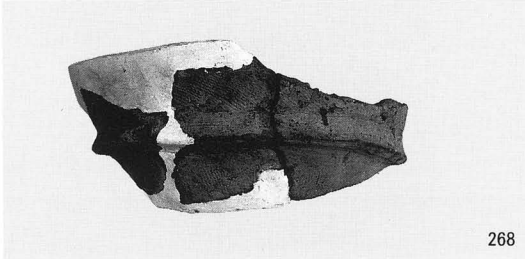


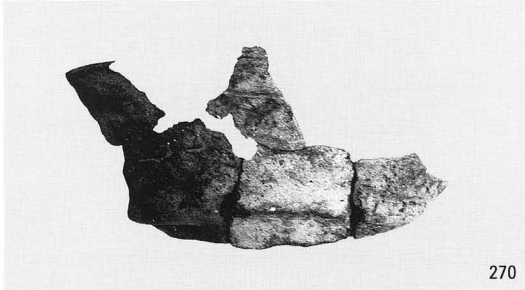
西区１号墳出土遺物（243～248）・２号墳出土遺物（250～256）

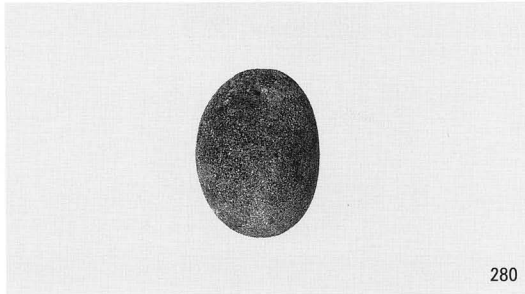


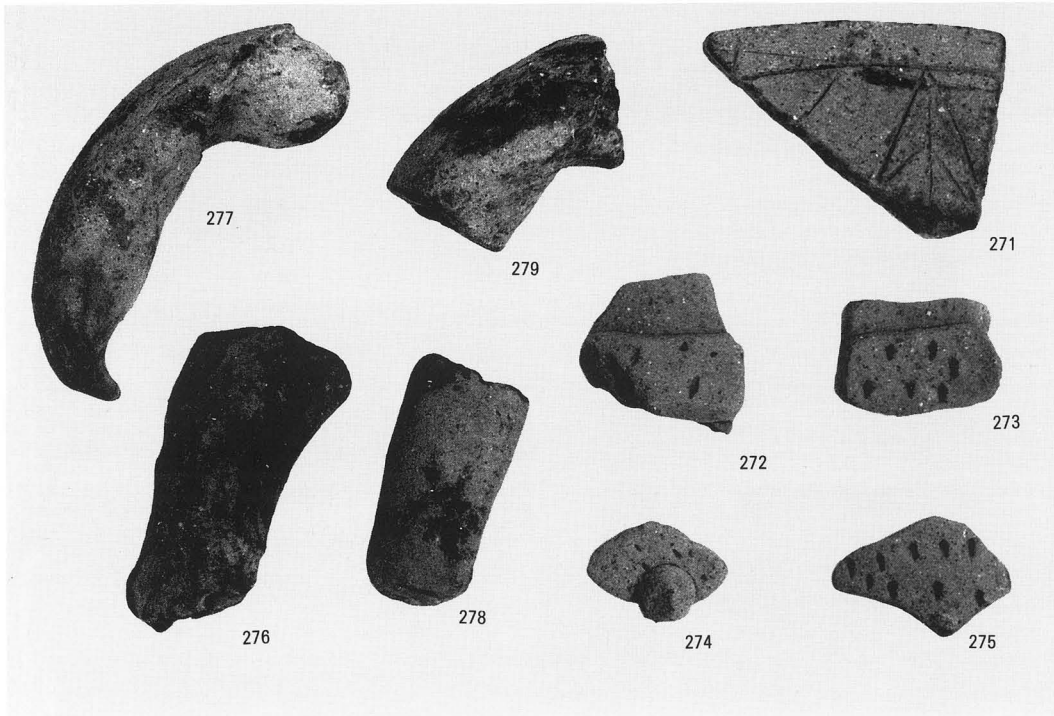




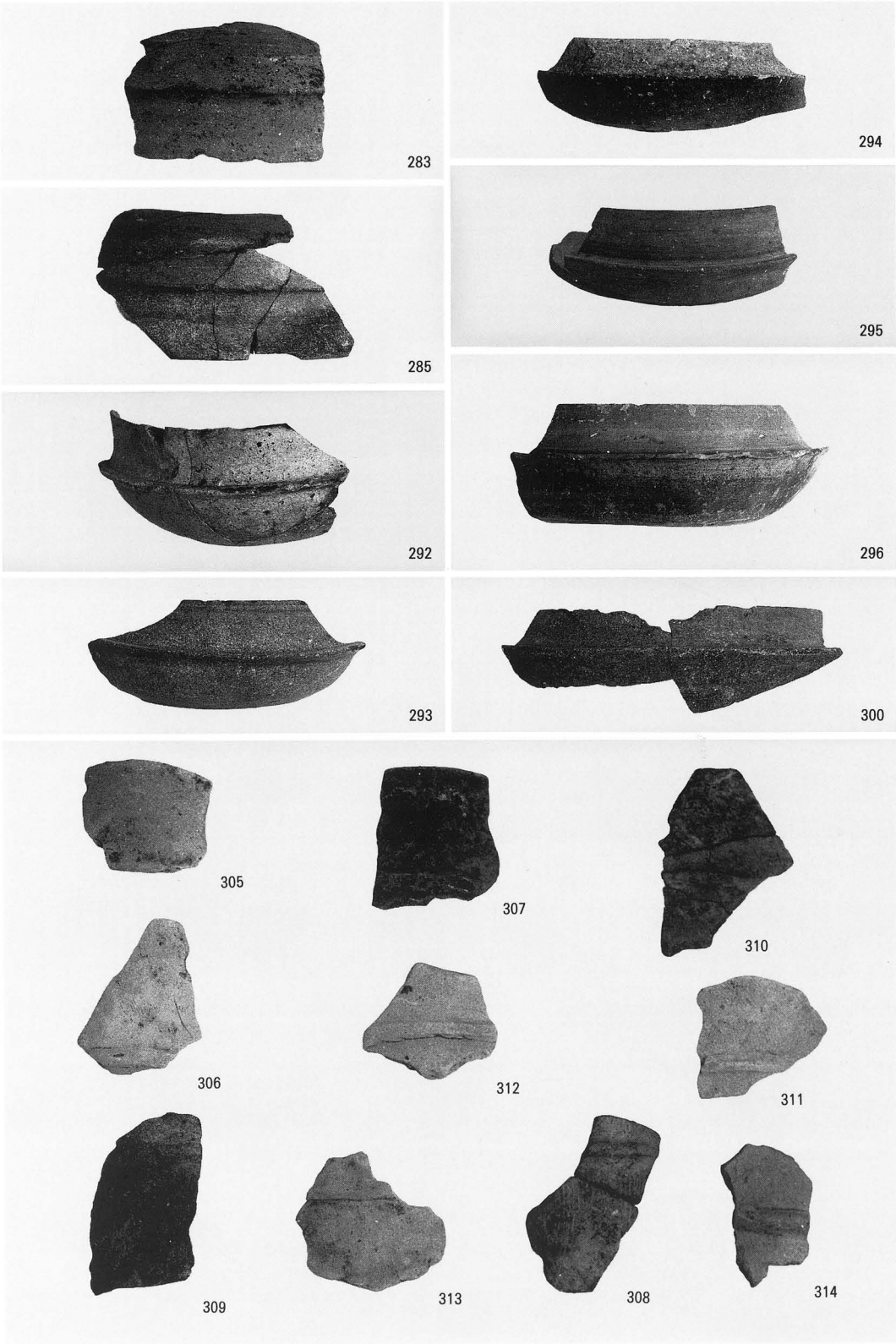




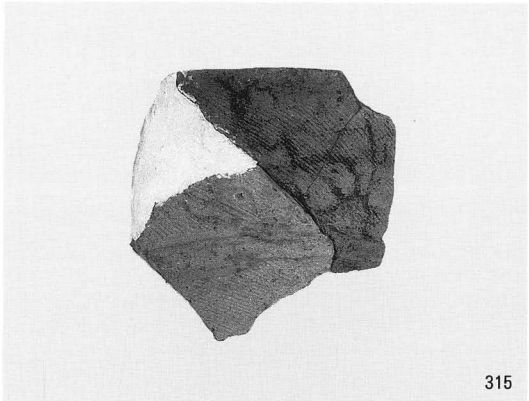


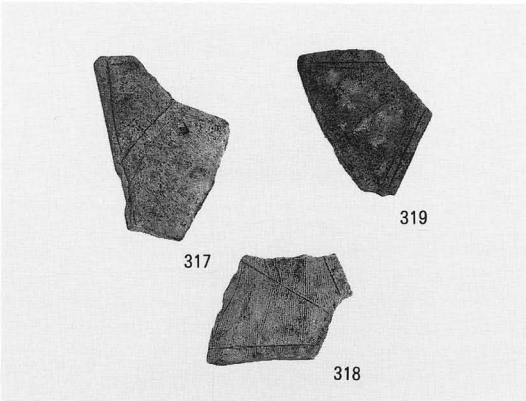


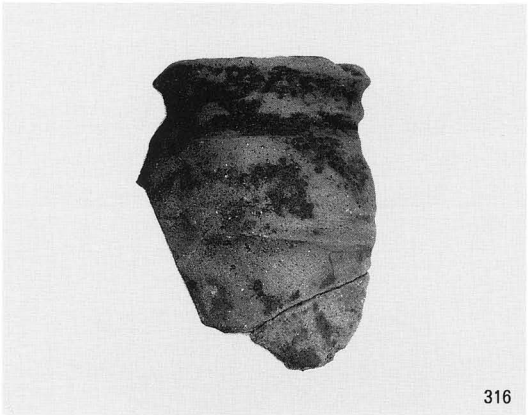
西区２号墳出土遺物

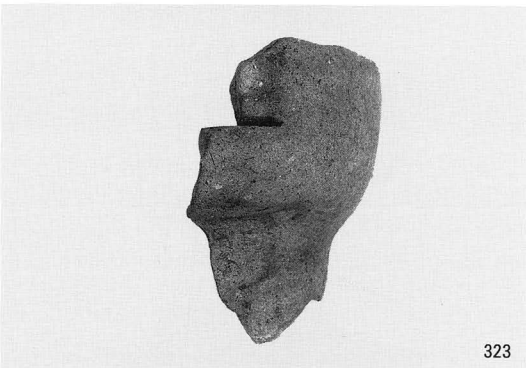

283
294
285
295
292
296
293
300
305
307
310
306
312
311
309
313
308
314

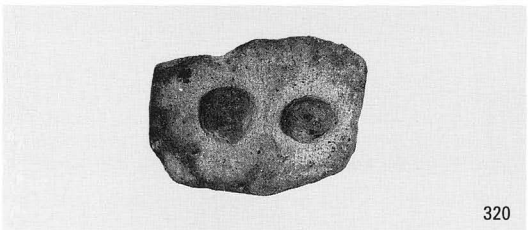
西区３号墳出土遺物

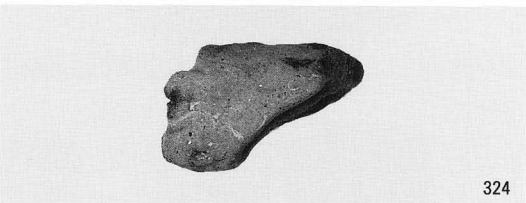


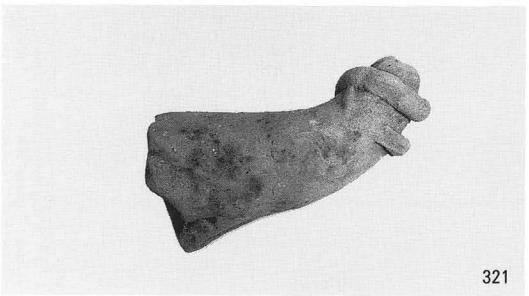


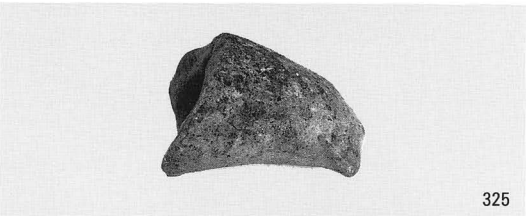


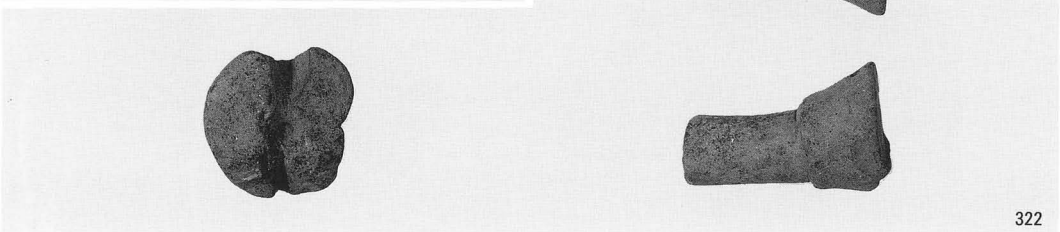




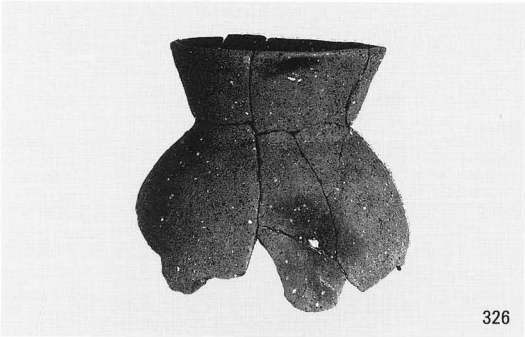


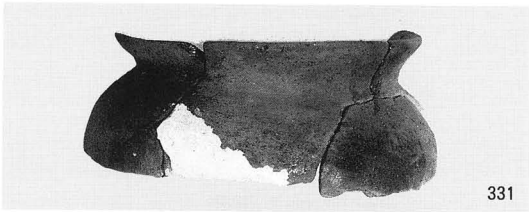


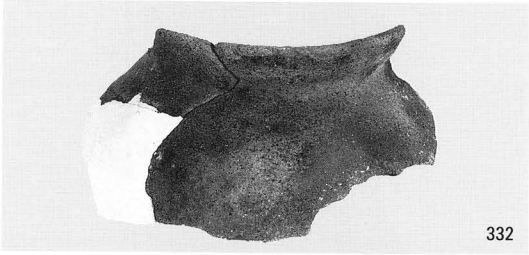


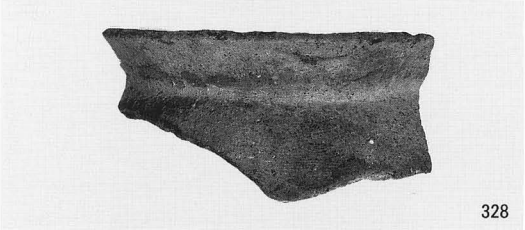


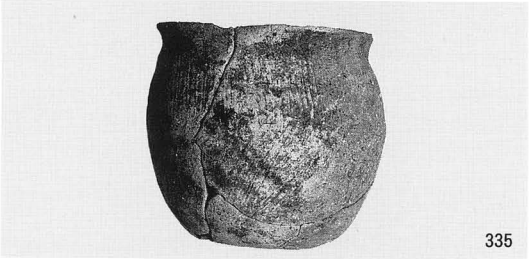
西区３号墳出土遺物

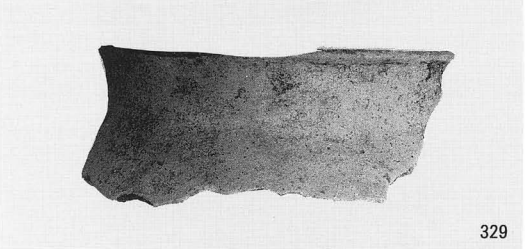

326

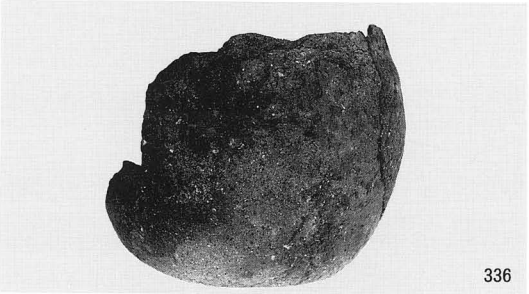

331


332

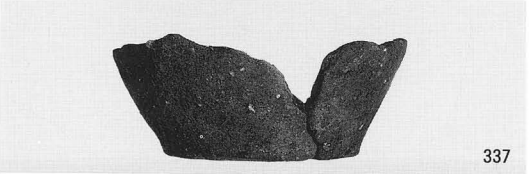

328

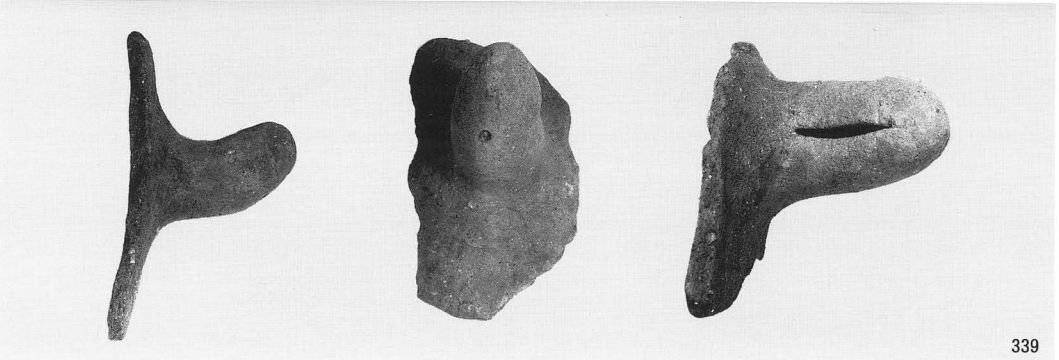

335


329

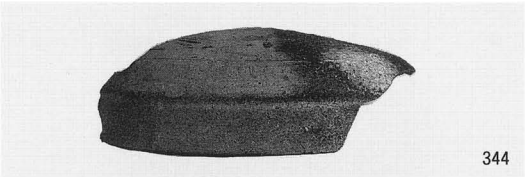

336

341

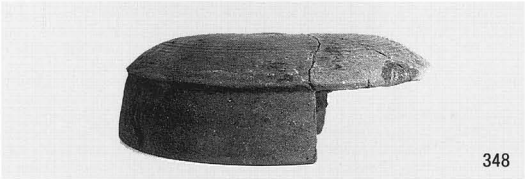

337

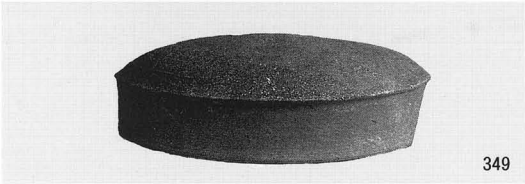

339

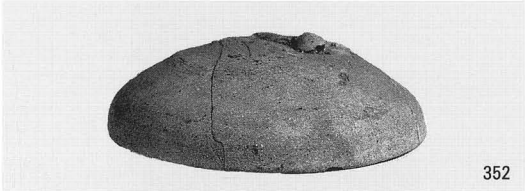
西区第４層出土遺物


344

347

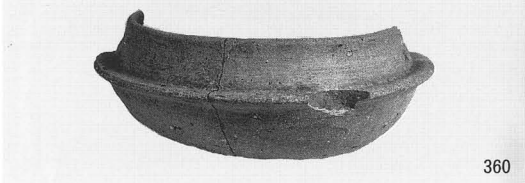

348

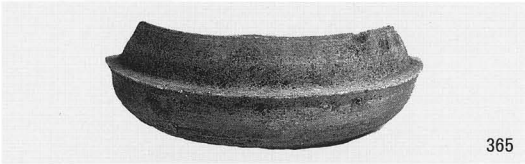

349


352

353

355


360


365

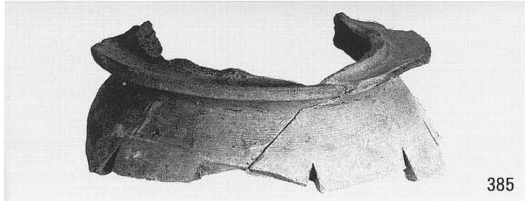
367

370

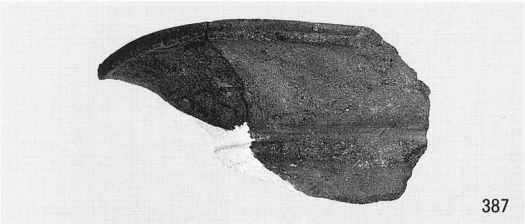
375

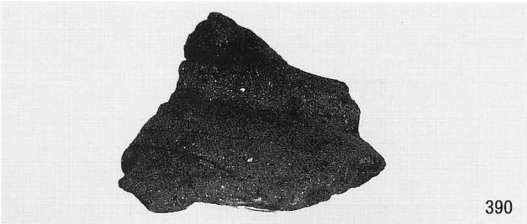
380

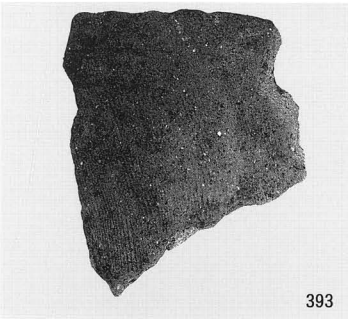
382

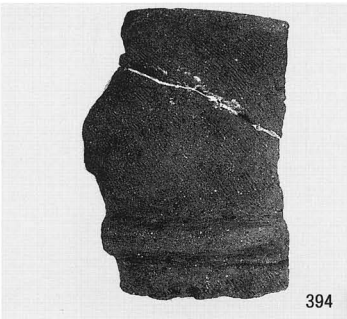

385

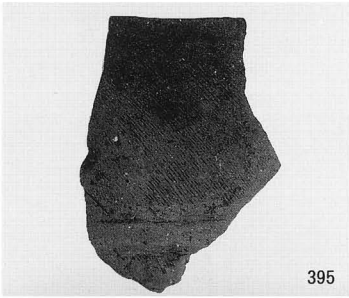
西区第４層出土遺物


387

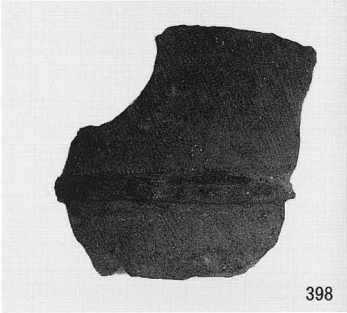

390


393

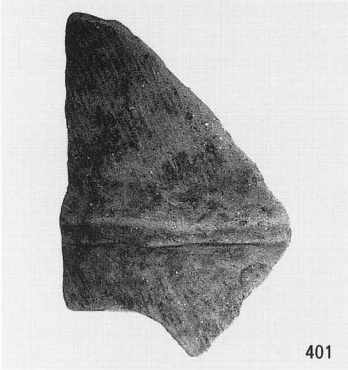

394

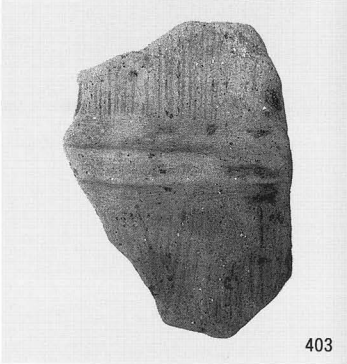

395

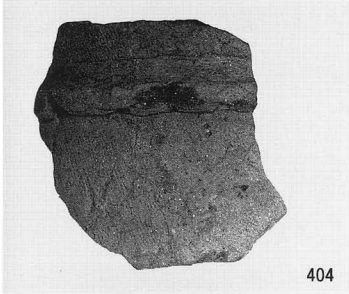
397

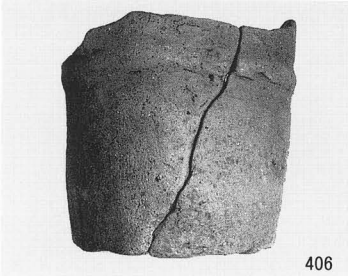

398

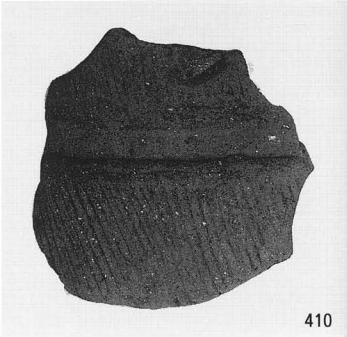
400

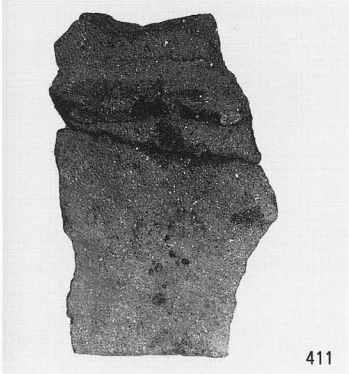

401


403

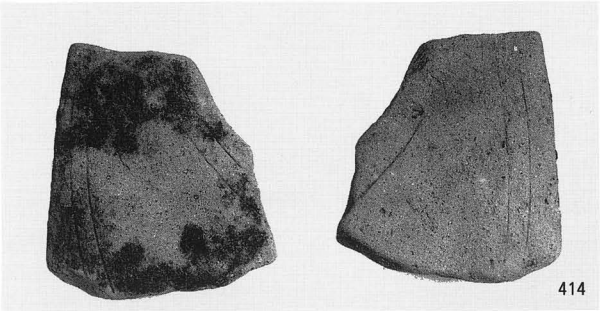

404

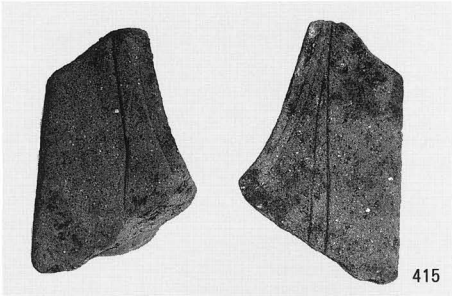

406

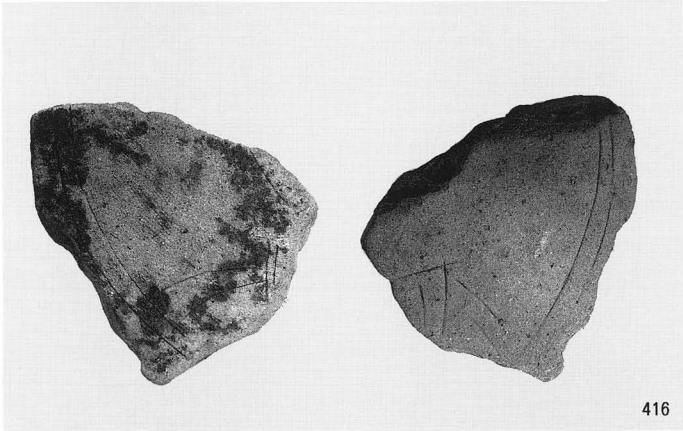

410

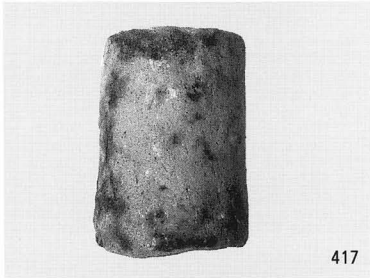

411

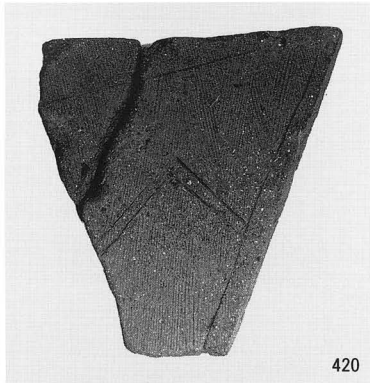
西区第４層出土遺物

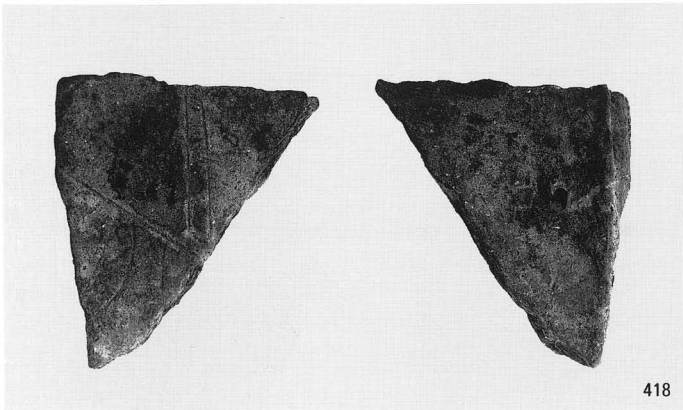


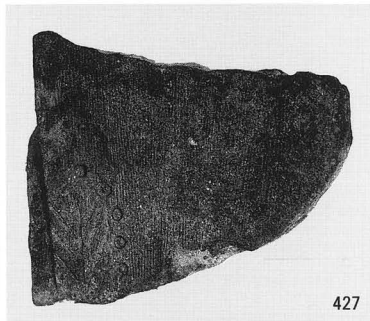


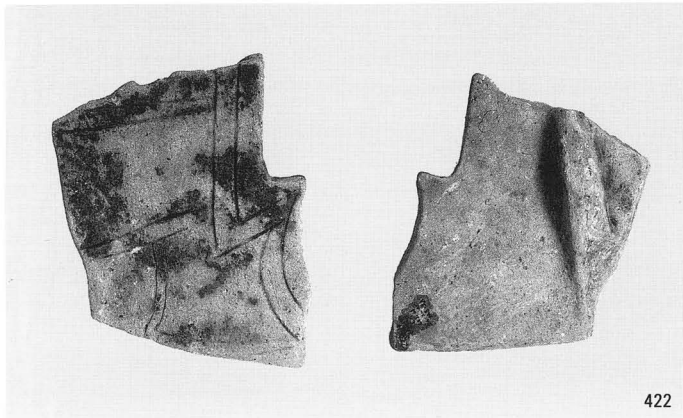


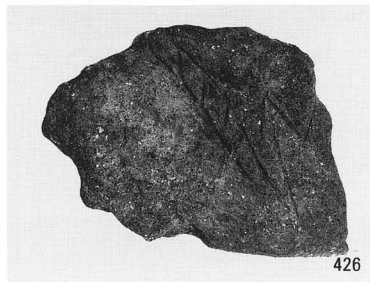




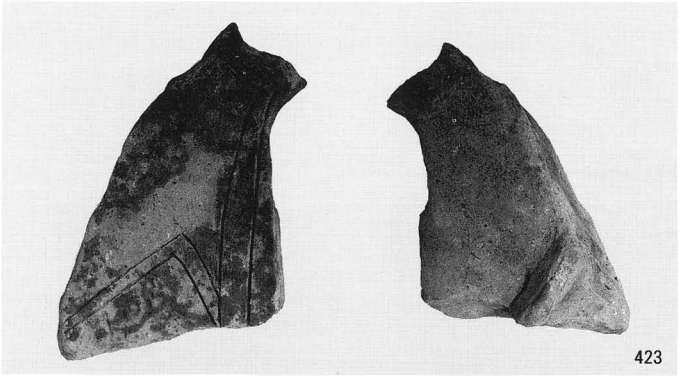


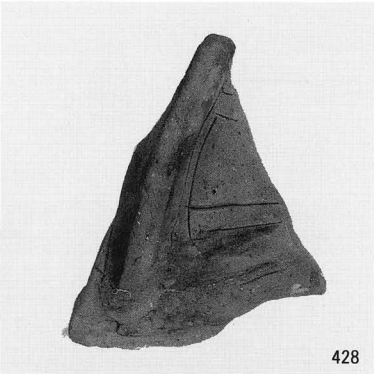


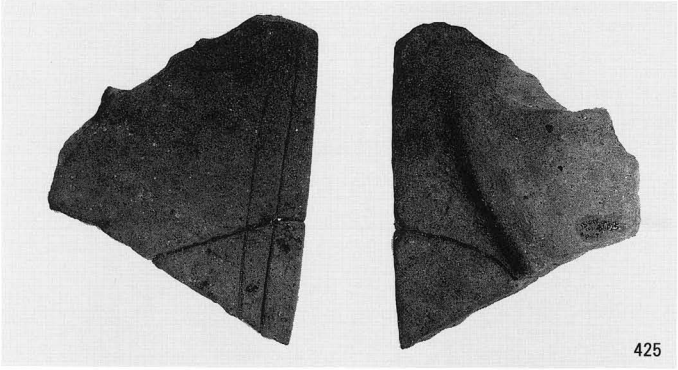


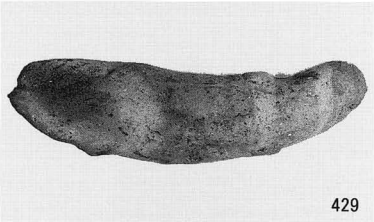


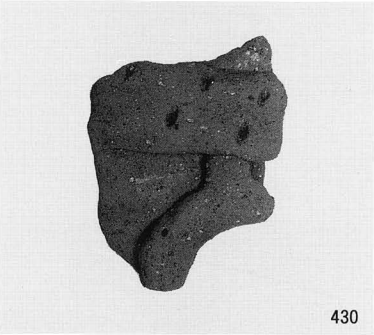
西区第４層出土遺物

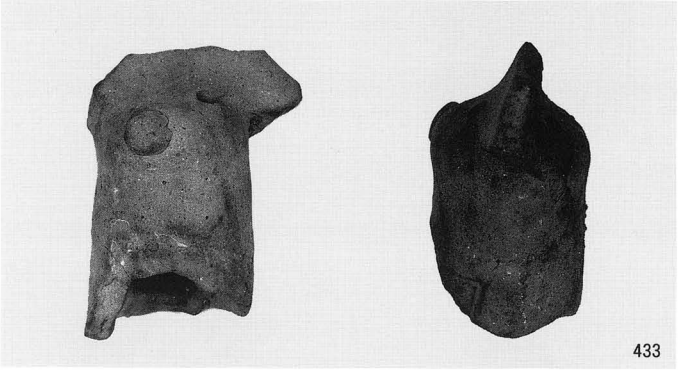

423

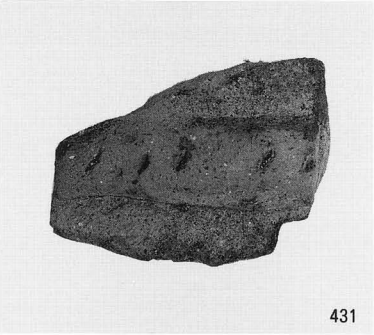

428

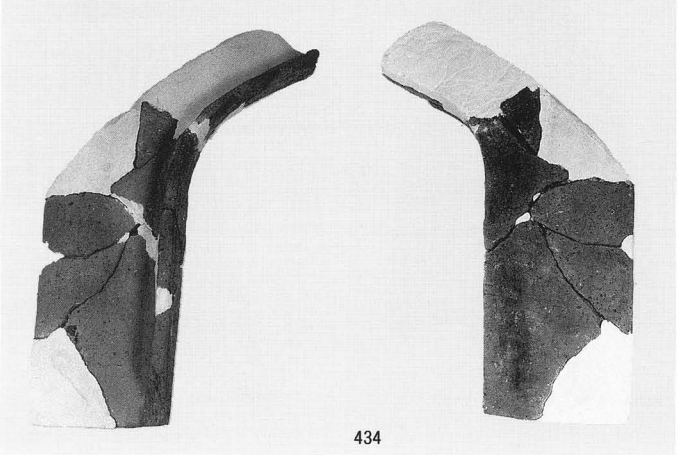

425

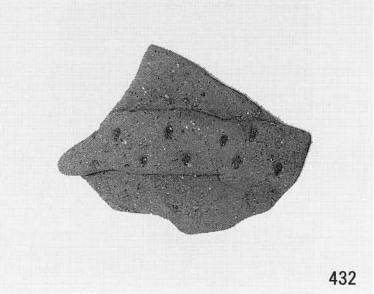

429


430

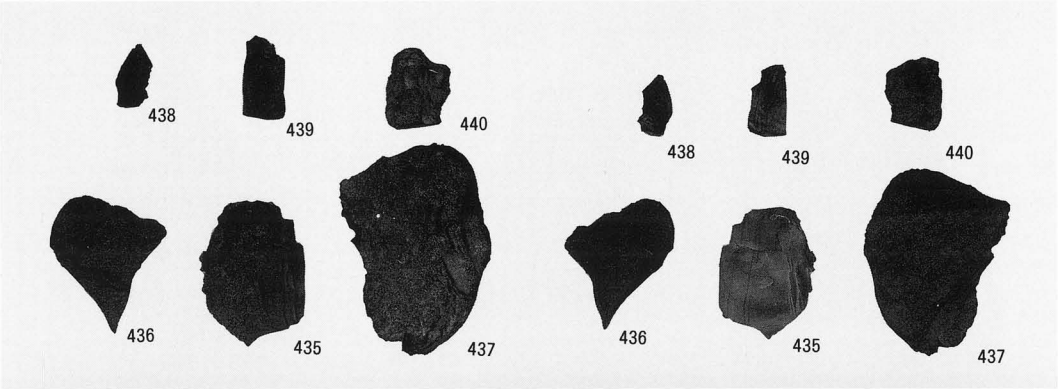

433

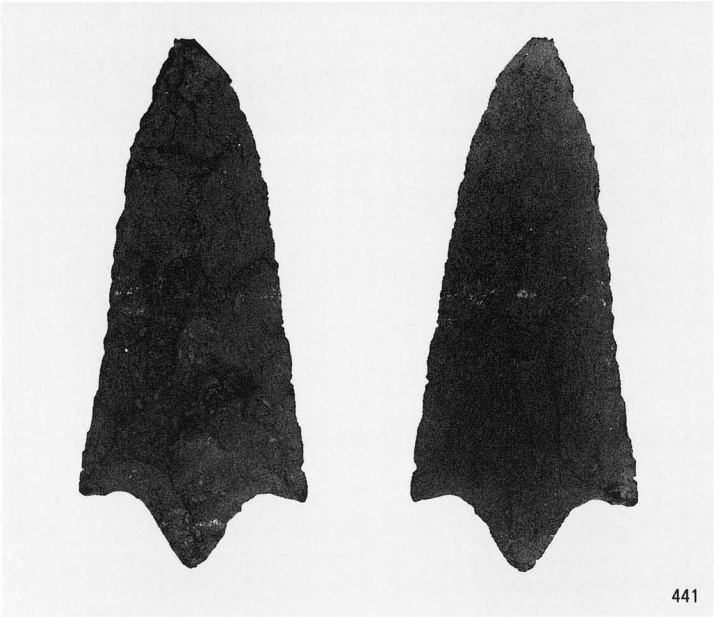

431

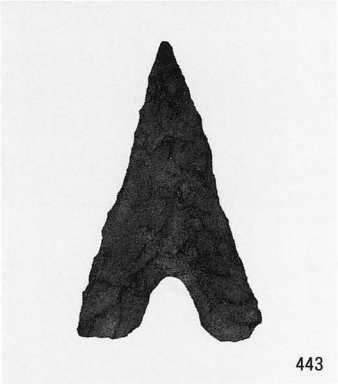

434


432

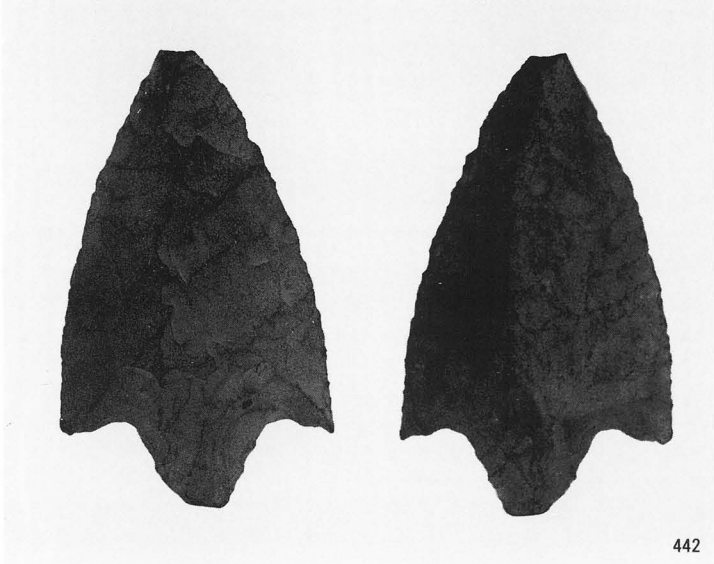
西区第４層出土遺物


438
439
440
438
439
440
436
435
437
436
435
437


441


443

444


442

446

下層確認調査出土遺物

Ⅱ　八尾南遺跡第12次調査（YS88－12）発掘調査報告

例　　言

1．本書は、八尾市若林町２丁目147番地で実施した工場建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する八尾南遺跡第12次調査（ＹＳ88－12）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第42号　昭和63年６月15日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が株式会社小倉屋山本食品から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は昭和63年８月29日から昭和63年10月21日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積860㎡を測る。調査においては中切孝彦・八元聡志が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成７年１月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は遺物実測－中西隆子、図面レイアウト－原田、図面トレース－北原清子、遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過 ……131

第２章　調査概要 ……131

　第１節　調査の方法と経過 ……131

　第２節　基本層序 ……132

　第３節　検出遺構・出土遺物 ……133

第３章　まとめ ……143

挿　図　目　次

第１図　基本層序模式図 ……132
第２図　調査区設定図および地区割図 ……133
第３図　検出遺構平面図 ……134
第４図　２号墳（１）、４号墳（２）出土遺物実測図……135
第５図　１号墳～３号墳平面図および周溝断面図 ……136
第６図　ＳＷ－１平断面図 ……137
第７図　ＳＷ－１出土遺物実測図 ……138
第８図　４号墳平面図および周溝断面図 ……139
第９図　ＳＰ－３（13）、ＳＰ－10（14）出土遺物実測図……139
第10図　包含層出土遺物実測図 ……141

写　真　目　次

写真１　北区北壁（Ｙ10付近） ……132

図　版　目　次

図版一　南区全景
図版二　北区全景
図版三　南区１号墳～３号墳検出状況
　　南区１号墳・２号墳検出状況
図版四　南区２号墳東周溝内遺物出土状況
　　南区ＳＷ－１検出状況
図版五　北区３号墳・４号墳検出状況
　　北区４号墳検出状況
図版六　２号墳、ＳＷ－１出土遺物

第１章　調査に至る経過

八尾南遺跡は、河内台地の東縁から河内低地に位置する旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市南西部の若林町１～３丁目・西木の本１～４丁目の東西0.5km、南北1.4kmがその範囲とされている。

昭和53年以降、八尾南遺跡調査会・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・㈶八尾市文化財調査研究会により、発掘調査が継続して実施されており旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって検出されている。これらの調査結果を総合すれば、遺跡範囲の中央部以南では旧石器時代以降の遺構・遺物が検出されているの対して、北部では弥生時代後期以降に開発が顕在化する等の違いが認められている。このような違いの背景としては、遺跡範囲の中央部付近（地下鉄谷町線八尾南駅付近）が、河内台地の北端から河内低地に移行する変化点にあたり、この地点を境に南部と北部で地形的条件が異なっていたことによるものと推定されている。

今回の発掘調査は、遺跡範囲の南部にあたる八尾市若林町２丁目147番地で、八尾市教育委員会が昭和63年６月９日に実施した工場建設に伴う遺構確認調査で、弥生時代～平安時代の遺物が検出されことから発掘調査を実施するに至ったものである。現地での発掘期間は、昭和63年８月29日から昭和63年10月21日で、調査面積は860㎡を測る。報告書作成にかかわる業務は、現地発掘調査終了後、平成７年１月31日まで随時実施した。

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

調査では当初、建物の構築予定地の南側と北側に２箇所の調査区（南区５×55ｍ・北区５×41.5ｍ）を設定し南区から調査を開始した。重機により、現地表下1.4ｍ前後（標高11.30ｍ前後）に存在する第３層淡灰茶色細粒砂～中粒砂層上面までの掘削を行った結果、方墳の周溝と推定される溝状遺構を検出した。このため、これらの調査経過を市教育委員会に報告し、協議を重ねた結果、南区と北区の間を含めた全域を調査対象とすることが決定された。従って調査途中で調査面積が483.5㎡から860㎡に変更された為、調査期間も当初の昭和63年８月29日～10月８日から10月21日に延長した。なお、調査面積の増大に伴い、掘削排土が内部で処理出来ない等の問題から、調査地を南区と北区に二分する方法を取った。掘削に際しては、重機により

地表下1.2mまで掘削した後、以下0.2mについては層理に従って人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、現地表下1.4m前後（標高11.30m）付近に存在する第3層淡灰茶色細粒砂～中粒砂層上面で、古墳時代中期末～後期前半に比定される方墳4基（**1号墳～4号墳**）・土坑1基（ＳＫ－１）・土器集積1箇所（ＳＷ－１）・溝1条（ＳＤ－１）と時期不明の小穴19個（ＳＰ－１～ＳＰ－19）・溝1条（ＳＤ－２）を検出した。なお、上記の調査終了後、北区の北壁に沿って、東西方向にトレンチ（1×34m）を設定し、後期旧石器時代相当までの調査（下層調査）を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。遺物は、遺構内および第2ｂ層・第3層から、弥生時代前期～中世に至る土器類・石器類がコンテナ箱に2箱程度出土したが、ＳＷ－１の出土遺物を除けば小片化したものが大半を占めた。

第2節　基本層序

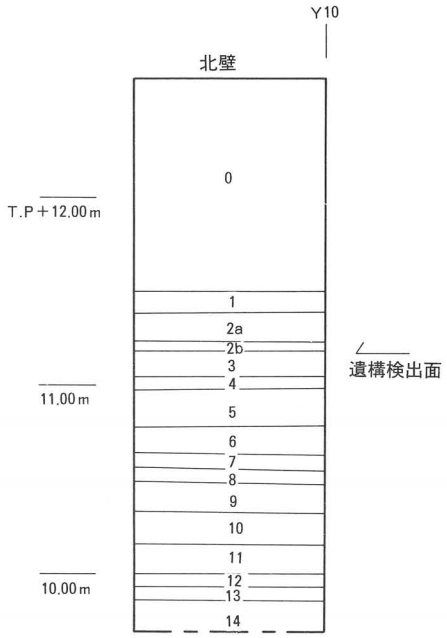
第0層　客土。層厚1.1m前後。地表面の標高はT.P.＋12.65m前後。

第1層　旧耕土。暗灰色砂質土。層厚0.1～0.25m。

第2ａ層　床土。灰茶色砂質土。層厚0.15m前後。酸化鉄・マンガンが斑点状に沈着している。古墳時代中期以降の遺物が少量含まれている。

第2ｂ層　茶灰色砂質土。層厚0.05～0.1m。第2ａ層よりやや濃い色調であるが、層相等は同様である。古墳時代中期以降の遺物が極少量出土している。

第3層　淡灰茶色細粒砂～中粒砂。層厚0.1～0.3m。弥生時代前期から中期の遺物が極少量出土している。上面が遺構検出面。



第1図　基本層序模式図

写真1　北区北壁（Ｙ10付近）

第４層　橙茶色～暗灰色シルト～粘質土。層厚0.1ｍ。

第５層　暗灰褐色細粒砂～粘質土。層厚0.1～0.2ｍ。

第６層　淡灰橙色～灰褐色の色調で上部が細粒砂、下部がシルト～粘質土。層厚0.1～0.2ｍ。

第７層　淡灰青色粘質シルト。層厚0.1～0.2ｍ。

第８層　淡灰黒色粘土。層厚0.1ｍ前後。

第９層　淡青灰色粘土。粘性の弱い粘土である。層厚0.1～0.2ｍ。

第10層　青灰色粘土。層厚0.15ｍ前後。

第11層　淡青色シルト～粘質土。層厚0.15ｍ前後。

第12層　黒灰色粘土。粘性が強い。層厚0.1ｍ前後。

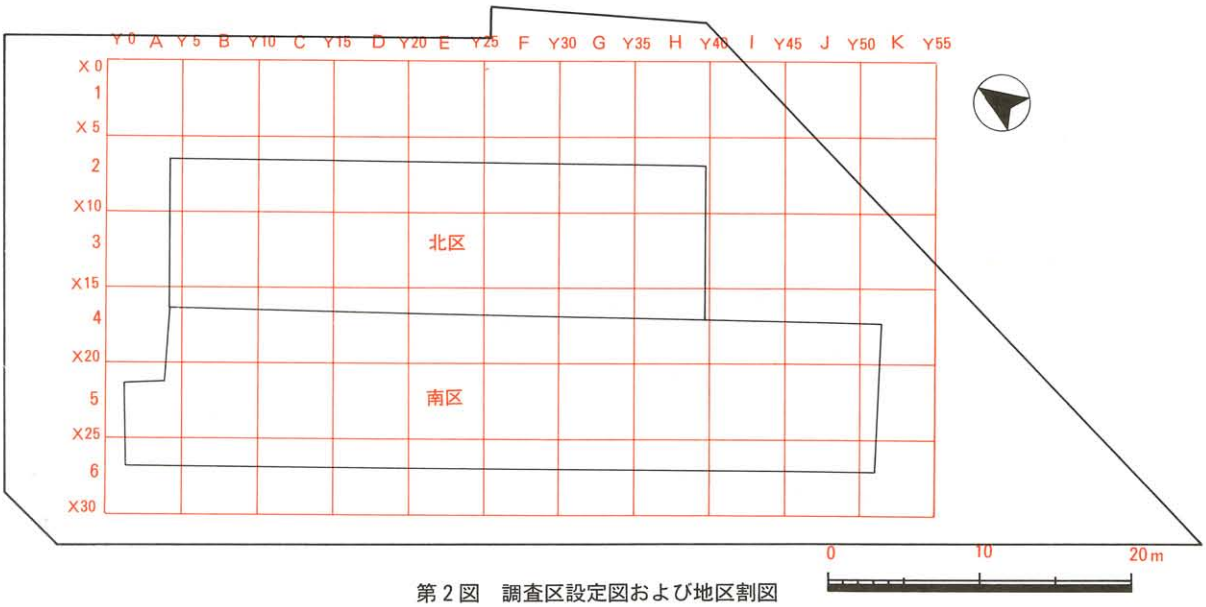
第13層　灰黒色粘土。層厚0.05ｍ前後。

第14層　灰黒色シルト～粘質土。層厚0.15ｍ以上。

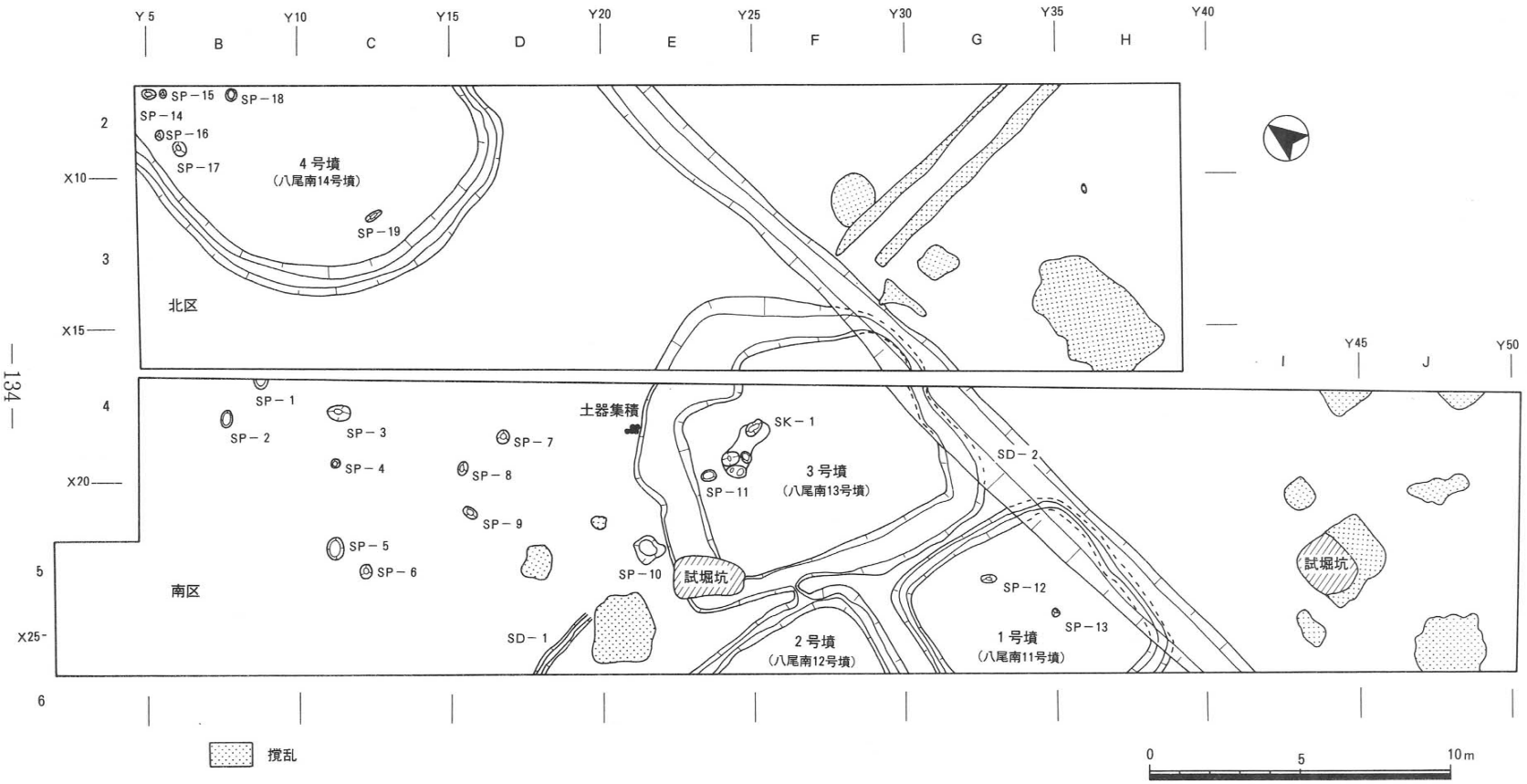
第３節　検出遺構・出土遺物

方墳

方墳は４基（**１号墳～４号墳**）を検出した。そのうち、**１号墳～３号墳**は南区の中央部に集中しており、主軸方向もほぼ一致している。北区の西部で検出した**４号墳**は、**３号墳**の北西約８ｍに位置しており、主軸方向や周溝規模が**１号墳・２号墳**と共通している。４基共に墳丘の大半が後世に削平を受けており、埋葬主体は検出されていない。



第２図　調査区設定図および地区割図


Y5
Y10
Y15
Y20
Y25
Y30
Y35
Y40
Y45
Y50
B
C
D
E
F
G
H
I
J
2
3
4
5
6
X10
X15
X20
X25
SP－15
SP－18
SP－14
SP－16
SP－17
4号墳
(八尾南14号墳)
SP－19
北区
SP－1
SP－2
SP－3
SP－4
SP－7
SP－8
SP－9
SP－5
SP－6
土器集積
SK－1
SP－11
3号墳
(八尾南13号墳)
SD－2
SP－10
試堀坑
SD－1
2号墳
(八尾南12号墳)
SP－12
SP－13
1号墳
(八尾南11号墳)
試堀坑
南区
撹乱
0
5
10m

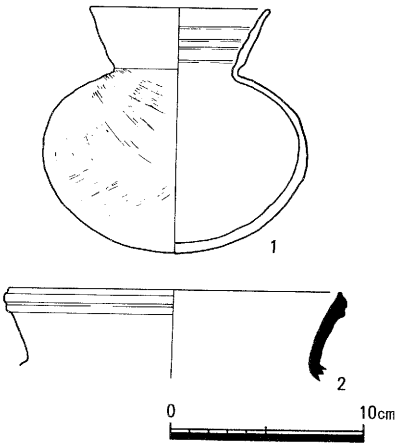
第3図　検出遺構平面図

1号墳（八尾南11号墳）

南区の中央部で検出した。南西部は調査区外に至る。また、東周溝の上部はＳＤ－２によって削平を受けている。墳丘の平面形は方形を呈し、方向は南北軸に対しＮ－20°－Ｅを示す。一辺の規模は東西6.2ｍ・南北6.0ｍを測る。周溝の断面はほぼＵ字形を呈し、幅0.55～0.75ｍ深さ0.25～0.42ｍを測る。周溝内部の埋土は、基本的には２層で上層が暗灰茶色砂質土で下層は灰色砂質土である。ただし、東周溝の上部はＳＤ－２によって削平を受けているため、下層のみを検出したにすぎない。なお、墳丘内で小穴２個（ＳＰ－12・ＳＰ－13）を検出したが、**1号墳**との関連は不明である。遺物は出土しなかった。

2号墳（八尾南12号墳）

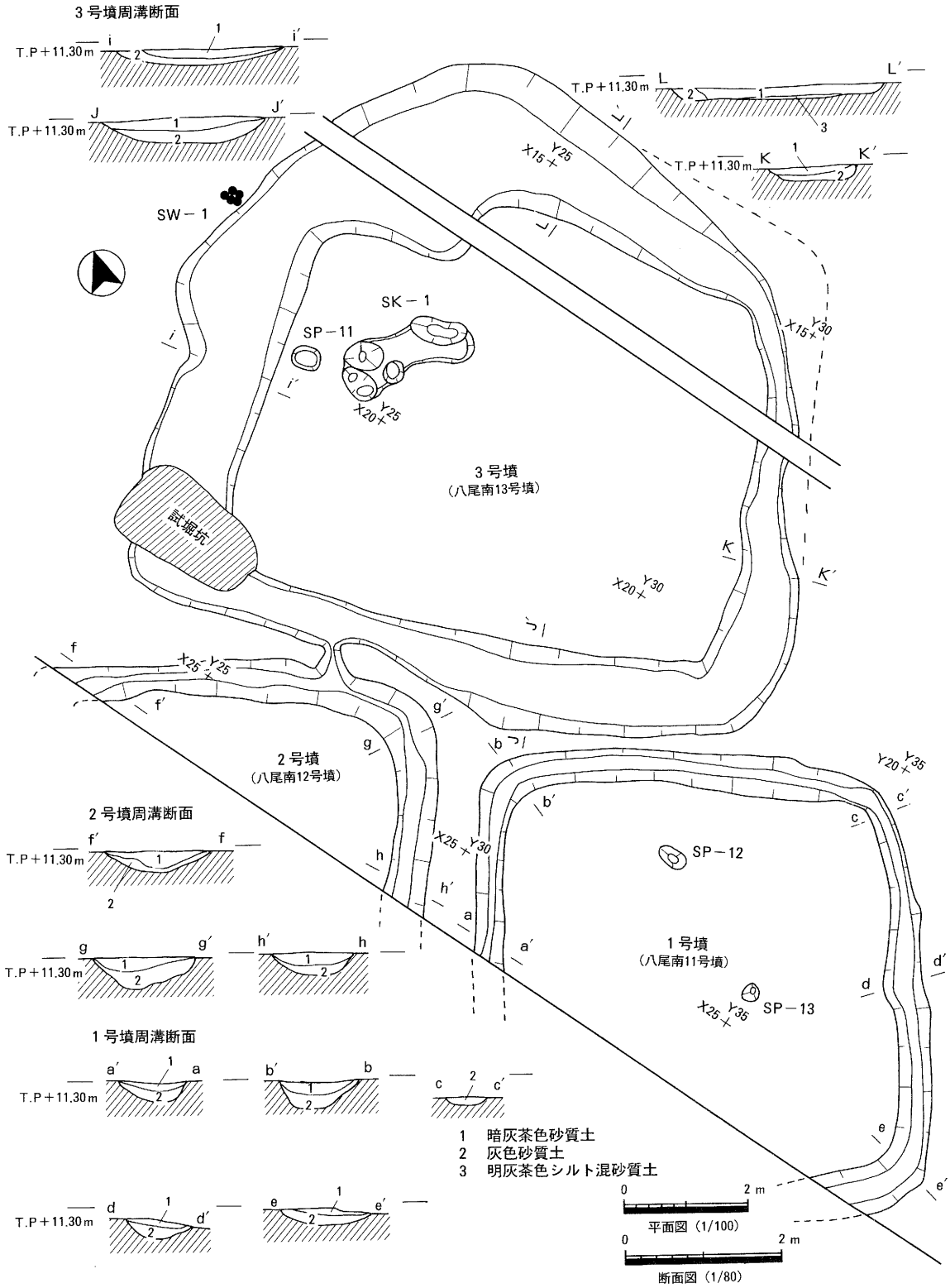
1号墳の西側に位置するもので、方墳の北東隅を検出した。南側は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分の北辺で4.4ｍを測る。方向は南北軸に対してＮ－20°－Ｅを示す。なお、北周溝と**3号墳**の南周溝をつなぐ小溝（幅0.2～0.5ｍ・長さ0.4ｍ）が存在しているが、意識して開削されたものか、偶発的な作用で出来たものかは区別し得ない。周溝は断面Ｕ字形を呈し、幅0.7～0.85ｍ、深さ0.15～0.25ｍを測る。周溝内部の埋土は１号墳と同様である。なお、下部の一部には黒褐色粘質土が堆積しており、一時期滞水していたことが窺える。遺物は東周溝で完形の土師器直口壷（１）が出土している。（１）は球形の体部から上外方に直線的に伸びる口頸部が付く直口壷で、口径9.4㎝、器高13㎝、体部最大径13.9㎝を測る。口頸部内面に強いヨコナデによる沈線状の窪みが巡る。体部外面にはハケナデが施されている。明赤茶色の色調で胎土には0.1～１㎜大の石英・長石粒が多量に含まれている。



第４図　２号墳（１）、４号墳（２）出土遺物実測図

3号墳（八尾南13号墳）

1号墳・**2号墳**の北側に位置する。墳丘の平面形は不整の長方形を呈し、方向は南北軸に対しＮ－21°－Ｅを示す。一辺の規模は、東西幅7.9ｍ、南北幅5.6～6.8ｍを測る。周溝は東周溝がＳＤ－２によって削平を受けているが、検出部分で幅0.45～2.9ｍ、深さ0.15～0.2ｍを測り、溝底面は水平な面を有している。周溝内部の埋土は**2号墳**と同様であるが、北周溝では最下層に明灰茶色シルト混砂質土が堆積している。また、南周溝の西側部分では周溝幅が狭くなる部分が認められることから、**2号墳**が築造された後に**3号墳**が築造されたものと考えられる。墳丘部および周溝内からは遺物は出土していないが、周溝北西隅の外側で**3号墳**に関連すると思



第5図　1号墳～3号墳平面図および周溝断面図

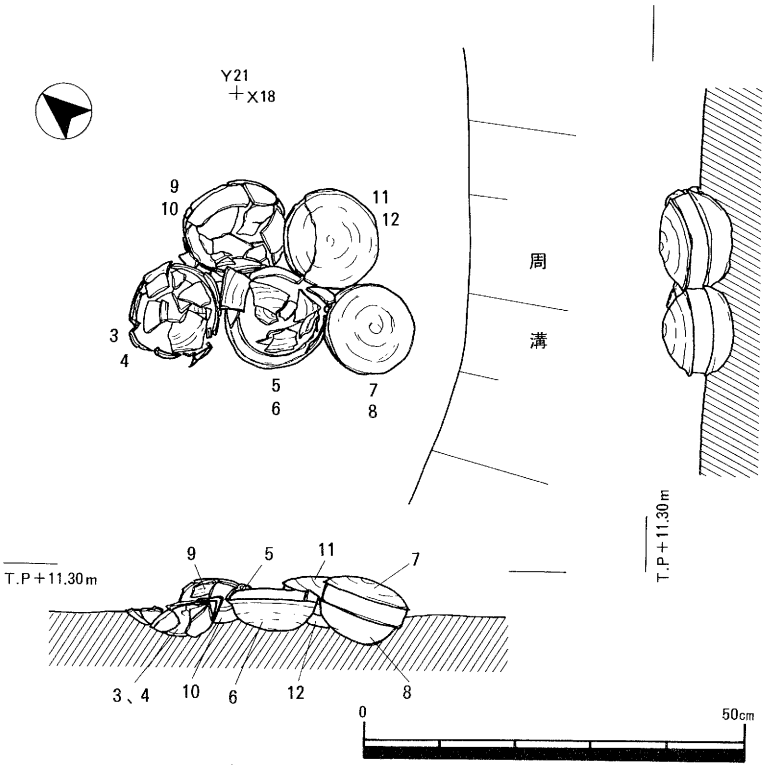
われる須恵器蓋杯が５組が集中して出土する土器集積（ＳＷ－１）が検出されている。また、墳丘の北西部で土坑（ＳＫ－１）および小穴（ＳＰ－11）を検出したが、その性格や時期は不明である。

土器集積（ＳＷ）

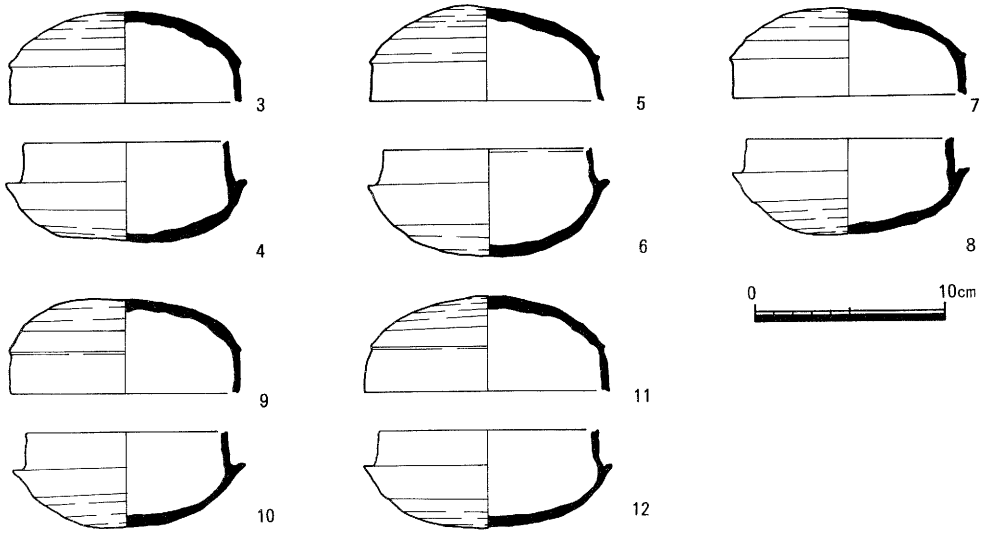
ＳＷ－１

３号墳の北西隅で検出した。周溝に接近した位置に存在しており、周溝の外側ラインとの間隔は７cmを測る。土器集積は、須恵器蓋杯のセットを南側で３組、西から蓋杯（３・４）、蓋杯（５・６）、蓋杯（７・８）と北側で２組、西から蓋杯（９・10）、蓋杯（11・12）の計５組の蓋杯で構成されている。検出時点では、杯身５点は完存していたが杯蓋（３・５・９）については、後世の削平のため小片化しており、部分的に欠損した箇所が認められた。

杯蓋５点（３・５・７・９・11）は口径12.0～12.7cm、器高4.7～5.1cm、稜径12.1～12.5cmを測る。天井部はやや高く丸味を持つもので、鋭く水平方向に伸びる稜から口縁部がほぼ垂直に下るもので、口縁端部はわずかに段を有し内傾するものである。天井部のロクロ回転の方向は（９）が時計回り、（３・５・７・11）が逆時計回りである。色調は（５）は灰白色であるが他は青灰色で、焼成は良好堅緻である。杯身５点（４・６・８・10・12）は口径10.5～11.4cm、器高5.1～5.7cm、受部径12.3～13.1cm、立ち上がり高1.6～2.1cmを測る。底体部の形態では深くて丸い（６）の他はやや深くて丸味をもつものである。立ち上がりは、概ね内傾して伸びるもので（４）が2.1cmとやや高いが、他は1.7cm前後を測る。受部は外上方に短く伸びる。口縁端部はわずかな段を有し内傾する（４・６・10・12）と平で



第６図　ＳＷ－１平断面図



第７図　ＳＷ－１出土遺物実測図

内傾する（８）がある。底体部のロクロ回転の方向は（４・６）が時計回り、（６・10・12）が逆時計回りである。色調は（６）が灰白色であるが、他は青灰色で焼成は（６）がややあまい他は、良好堅緻である。杯身（６）がやや新しい様相を呈しているが他は、ＴＫ23型式に対比されよう。

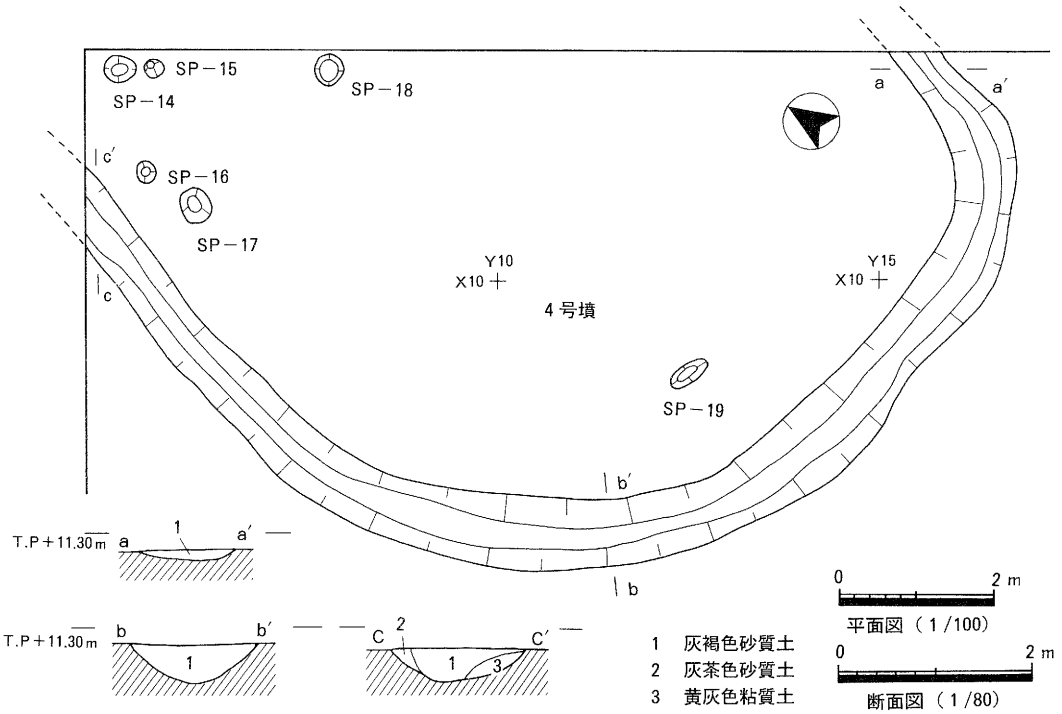
４号墳（八尾南14号墳）

北区の北西隅で検出した。北部および北西部は調査区外に至るため全容は不明であるが、墳丘の平面形は隅丸胴張り方形を呈するものと推定される。方向は南北軸に対してＮ－10°－Ｅを示す。一辺の規模は検出した南辺で8.5ｍを測る。周溝は断面Ｕ字形を呈し、幅0.6～1.0ｍ、深さ0.1～0.3ｍを測る。周溝内の埋土は大半が灰褐色砂質土である。遺物は周溝内から須恵器杯身・杯蓋・壷の小片が極少量出土している。そのうち図化できたものは須恵器広口壷（２）の１点である。（２）は広口壷の口頸部の⅛程度が遺存するもので、復元口径17.3㎝を測る。頸部は上外方にゆるやかに伸びるもので、端部は肥厚し、外端面下部に１条の凹線が巡らされている。灰白色の色調で焼成は良好堅緻である。ＭＴ15型式に対比されよう。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

３号墳の墳丘部で検出した。楕円形を呈し、長径2.1ｍ、短径0.6ｍを測る。断面の形状は浅い皿状を呈するが、底部には小穴状の窪みが４個存在している。遺物は出土しておらず帰属時期や３号墳との関係は不明である。



第8図　4号墳平面図および周溝断面図

溝（SD）

SD－1

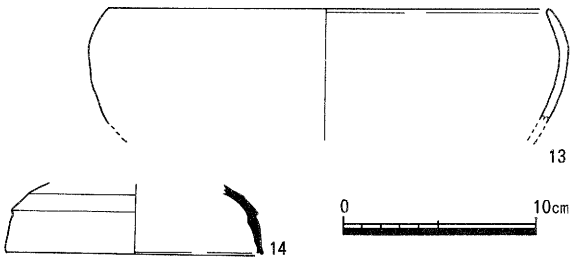
南区で検出した。北東－南西方向に伸びるものであるが、南側は調査区外に至るため不明である。検出長2.5mを測り、幅0.3～0.4m、深さ0.04～0.13mで南に向かって深くなっている。断面の形状はU字形である。埋土は灰色砂質土1層である。遺物は出土していない。

SD－2

調査区の中央部を南北方向に伸びる溝で、**1号墳**と**3号墳**の東周溝の上部を切っている。流路方向がほぼ磁北方向に一致していることから、条里遺制を踏襲した溝であると考えられる。遺物は近世に比定される国産磁器の小片が少量出土している。

小穴（SP）

全体で19個（SP－1～SP－19）検出した。上面形状は円形ないしは楕円形を呈し、規模は幅0.3～0.7m、深さ0.11～0.37mを測る。埋土は、SP－9・SP－19が淡灰色砂質土である他は淡灰褐色砂質土である。



第9図　SP－3（13）、SP－10（14）出土遺物実測図

遺物はＳＰ－３から土師器鉢（13)、ＳＰ－10からは須恵器杯蓋（14）が出土した。(13）はいわゆる鉄鉢形を呈するもので復元口径23.3cmを測る。全体に丁寧な作りで、体部上半から口縁部にかけてはヨコナデ調整が行われている。胎土には精良な粘土が使用されている。色調は淡赤茶色で焼成は良好である。奈良時代に比定されるものである。(14）は須恵器杯蓋の天井部から口縁部にかけての資料である。復元口径13.6cmを測る。鈍く短い稜から口縁部が下外方に下るもので、端部は段を有し内傾している。色調は内外面ともに青灰色で、器肉部分は紫灰色である。外面全体に灰かぶりが認められる。古墳時代中期末に比定されよう。

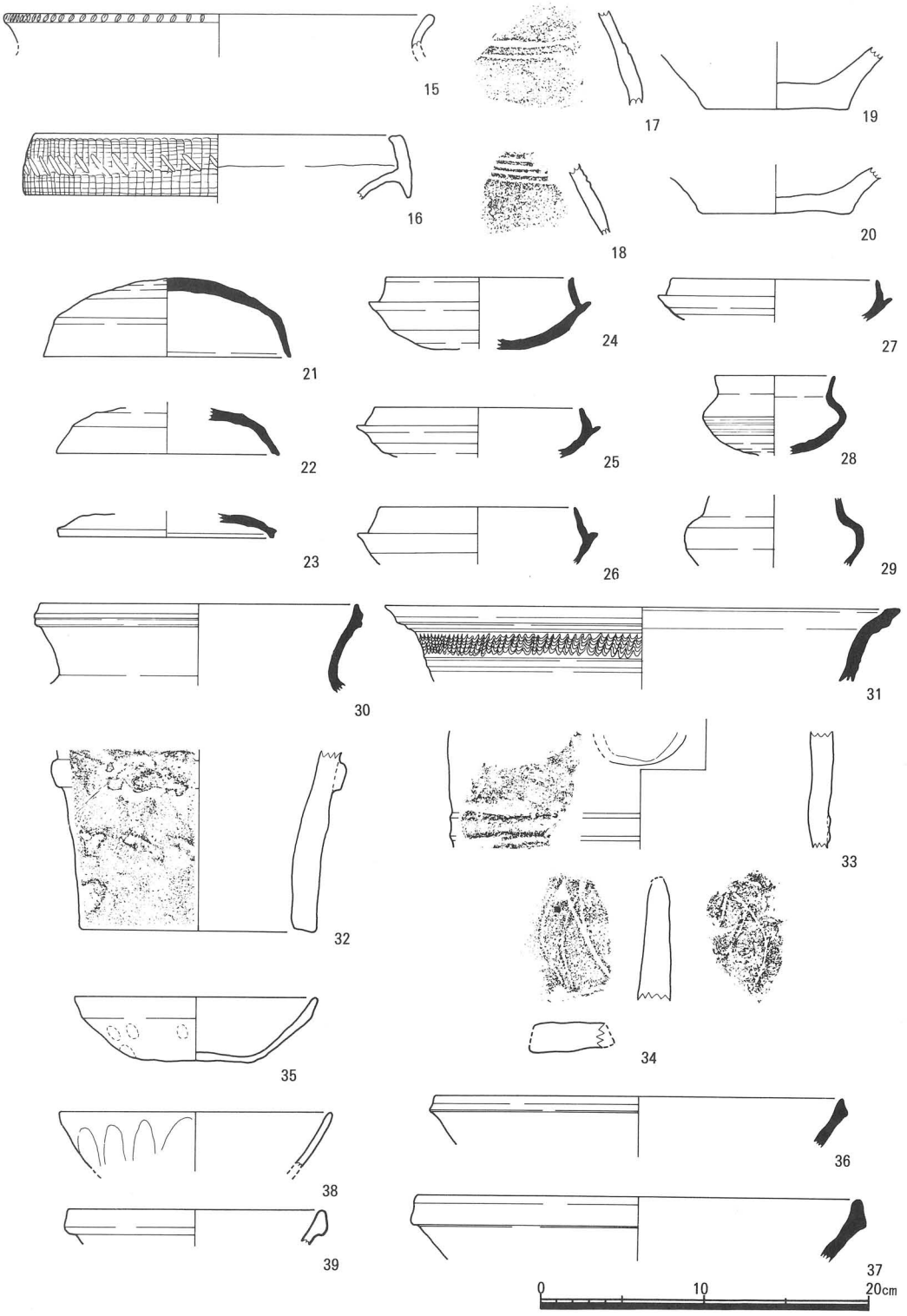
包含層出土遺物

遺物は第２ｂ層および第３層から出土している。全体に小片化したものが大半で、量的にもコンテナ箱に半分程度である。時期的には弥生時代前期～中世に至るもので、種別では弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・瓦器椀・白磁・青磁・国産陶磁器・屋瓦のほか、サヌカイトの剥片等がある。図化し得たものは25点（15～39）である。

弥生土器－６点（15～20）を図化した。(15）が甕、(16～20）が壷である。時期的には（16）が中期後半（畿内第Ⅳ様式）であるが、そのほかは前期（畿内第Ｉ様式）に比定されるものである。

（15）は口縁端部に刻目をもつ甕で復元口径26.0cmを測る。２Ｇ・Ｈ地区出土。(16）は広口壷で復元口径22.3cmを測る。上下に大きく拡張する口縁部を有するもので、外面には簾状文を上下２段に配し、その間に列点文が施文されている。生駒西麓産である。４Ｆ～Ｈ地区出土。(17・18）は広口壷の体部から頚部にかけての小片である。体部と頚部の境に段を有する（17）と沈線を有する（18）がある。(17）は生駒西麓産である。(17・18）はともに２Ｇ・Ｈ地区出土である。(19・20）は壷の底部で底径は（19）が8.7cm、(20）が9.1cmを測る。ともに胎土には、石英・長石・チャートの小粒が多量に含まれている。(19）が４Ｆ地区、(20）が５Ｈ地区出土である。

須恵器－11点（21～31）を図化した。種別では、杯蓋３点（21～23)、杯身４点（24～27)、短頚壷２点（28・29)、広口壷１点（30)、器台１点（31）である。(21）はやや高く丸みを持つ天井部を有する杯蓋で、口径15.0cm、器高4.8cmを測る。稜は退化しており、天井部と口縁部との境に凹線を巡らしている。ＴＫ10型式に対比される。５Ｄ～Ｉ地区出土。(22）は口縁部が⅙程度遺存するもので、口径13.5cmを測る。低くて丸い天井部を有するもので、口縁端部は段を有し内傾している。３・４ＥＦ地区出土。(23）は天井部中央部を欠損しているが、宝珠つまみを有する杯蓋である。８世紀以降に比定されるものである。２Ａ～Ｊ地区出土。杯身は４点（24～27）図化したが（24）が½程度遺存している他は小片である。(24）は丸味をもつ底体部から立ち上がりが短く内傾して伸びるもので、端部は段を有し内傾して終る。ＴＫ23



第10図　包含層出土遺物実測図

～ＴＫ47型式に対比されよう。３・４ＣＤ地区出土。(25・27) は受部が上外方に短く伸びるもので、立ち上がりは短く内傾している。ＴＫ10型式に対比されよう。ともに、３・４Ｆ～Ｈ地区出土である。(26) は立ち上がりが前記のものに比して長く、受部も水平方向に伸びるものでＭＴ15型式に対比されよう。５Ｂ地区出土。(28) は扁球形で体部の最大径がやや上位に位置する体部から上外方に伸びる短頸壷である。口径7.2㎝、体部最大径8.9㎝を測る。体部上半にカキ目、口縁部から体部上半にかけて灰かぶりが認められる。５ＤＥ地区出土。(29) は口縁部および底部を欠損するものである。体部外面に回転ヘラケズリが行われている。５ＨＩ地区出土。(30) は広口壷の口頸部で全体の⅛が遺存するもので、復元口径19.4㎝を測る。口頸部がゆるやかに外反して伸びるもので、端部は肥厚し１条の凹線を巡らしている。３・４ＢＣ地区出土。(31) は器台の杯部と推定されるもので、復元口径22.6㎝を測る。口縁部の下方を肥厚させその部分に凸帯と凹帯が巡らしている。現存する杯部外面の上半には波状文と２本の凹線が認められる。色調は外面が青灰色～黒灰色、内面が灰白色である。灰かぶりが内面に認められる。２Ｄ地区出土。

埴輪－(32) は円筒埴輪の最下段の資料で、復元底径は14㎝を測る。タガは全周せず一部欠損しているが、遺存している部分のタガは、粘土紐を指で器壁に貼り付けただけの簡略化されたものである。外面調整は板状工具によるナデの後指ナデ、内面はナデを施している。２Ａ～Ｇ地区出土。(33) は円筒埴輪の小片で、タガは偏平で「Ｍ」字形を呈している。２・３Ａ地区出土。(34) は両面に線刻による装飾が認められるため、衣笠形埴輪の立ち飾り部分と推定されるが小片のため詳細は不明である。２ＧＨ地区出土。

土師器－(35) は完形の土師器杯で口径14.8㎝、器高3.9㎝、底径6.5㎝を測る。口縁部外面から体部内面ナデ。体部外面から底部にかけて指頭圧成形後ナデを施す。淡赤茶色の色調で、胎土には石英・長石の小粒が多量に含まれている。時期的には平安時代前期以降のものと推定される。２Ｂ地区出土。

中世須恵器－(36・37) 東播磨系の須恵器鉢である。２点ともに２ＣＤ地区出土。

中国産磁器－(38) は体部外面に鎬のない蓮弁文を削り出す青磁椀で、釉色は淡い緑灰色である。全体に貫入が認められる。横田・森田氏分類の龍泉窯系青磁Ｉ類のＩ－５にあたり、13世紀中葉に比定されている。２ＣＤ地区出土。(39) は玉縁口縁を有する白磁碗で、横田・森田氏分類のⅣ類のⅣ－２[註1]にあたり、11世紀中葉から12世紀初頭に比定される。３・４ＢＣ地区出土。

註

註１　横田賢次郎・森田　勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について――型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集４』

第3章　まとめ

今回の調査では、方墳4基〔**1号墳**（八尾南11号墳）・**2号墳**（八尾南12号墳）・**3号墳**（八尾南13号墳）・**4号墳**（八尾南14号墳）〕が検出された。古墳の形状や配置みて、南区中央部から北区の南部にかけての3基の方墳（**1号墳～3号墳**）と北区の北西隅で検出された**4号墳**に区別することが可能である。**1号墳～3号墳**は近接して築造されていることや、主軸方向が概ね共通しており、血縁的な関わりの強い被葬者集団が推定される。3基のなかで、**3号墳**が墳丘規模や周溝幅において他を凌駕しており、これらの集団のなかでの優位性を可視的に示すものと考えられる。また、**3号墳**の北西隅周溝の外側で検出された須恵器の蓋杯5セットから成る土器集積（ＳＷ－１）についても、**3号墳**に関わる墓前祭祀に関わるものと推定される。なお、同様な祭祀形態は、八尾南第8次調査（ＹＳ87－８）で検出された八尾南8号墳でも検出されている。[註1]そこでは、周溝底から須恵器蓋杯7組、杯蓋1点、杯身1点、直口壷1点・短頸壷1点（田辺編年－ＴＫ47型式段階）から成る土器集積が検出されており、いずれも須恵器類で構成される土器類が一ヶ所に集中している点で共通しており、時期的には差があるものの、この地域における墓前祭祀の形態を推定するうえで重要である。一方、北区の北西隅で検出された**4号墳**については、北部が調査区外のため不明な点が多いが、検出部分からみて不整形の方墳と推定される。

構築時期については、**3号墳**が土器集積（ＳＷ－１）との関わりから、5世紀後半（田辺編年－ＴＫ23型式段階）の築造と推定される。**2号墳**については、**3号墳**の南周溝の西部が一部幅を減じている事実を**2号墳**の北周溝に規制されたものとすれば、[註2]**2号墳**→**3号墳**の構築順位が推定される。従って、**2号墳**の構築時期はＴＫ23型式段階ないしはそれ以前と推定される。**1号墳**についても、時期を示す遺物が出土していないが、**2号墳**に近い時期が推定される。**1号墳～3号墳**から離れた位置に構築されている、**4号墳**については、出土した広口壷の特長から6世紀前半（田辺編年－ＭＴ15段階）の築造が推定される。なお、包含層からは、極少量、埴輪類が検出されているが、今回検出した古墳に伴うものとは考え難く、調査地周辺に埴輪を保有した古墳が存在した可能性を想定する必要があろう。

以上、今回の調査ではこの地が、5世紀後半と6世紀前半（八尾南10期～八尾南11期）において墓域として利用されてきたことが明らかになった。本調査以外で、5世紀後半（八尾南10期）に比定される古墳が検出された例としては、第1次調査（ＹＳ82－１）で3基（八尾南4号墳～6号墳）、[註3]第2次調査（ＹＳ83－２）で1基（八尾南7号墳）、[註4]第8次調査（ＹＳ87－８）で3基（八尾南8号墳～10号墳）の計10基がある。[註5]一方、八尾南11期とした6世紀前半の古墳

としては、今回検出した**4号墳**（八尾南14号墳）が唯一のものである。ただ、現時点ではこれらと関わりを持つ遺物の検出が認められるものの、集落として捉えられる遺構が検出されておらず、今後これらの古墳造営を推進した集落の存在を追究していく必要があろう。

註

註1　本書掲載「Ⅰ　八尾南遺跡第8次調査（ＹＳ87－8）」

註2　田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

註3　駒沢　敦　1984「3　八尾南遺跡」『昭和58年度事業概要報告』㈶八尾市文化財調査研究会報告5　㈶八尾市文化財調査研究会

註4　駒沢　敦　1985「1　八尾南遺跡（第2次調査）」『昭和59年度事業概要報告』㈶八尾市文化財調査研究会報告7　㈶八尾市文化財調査研究会

註5　前掲註1

図　　版

南区全景（東から）

北区全景（東から）

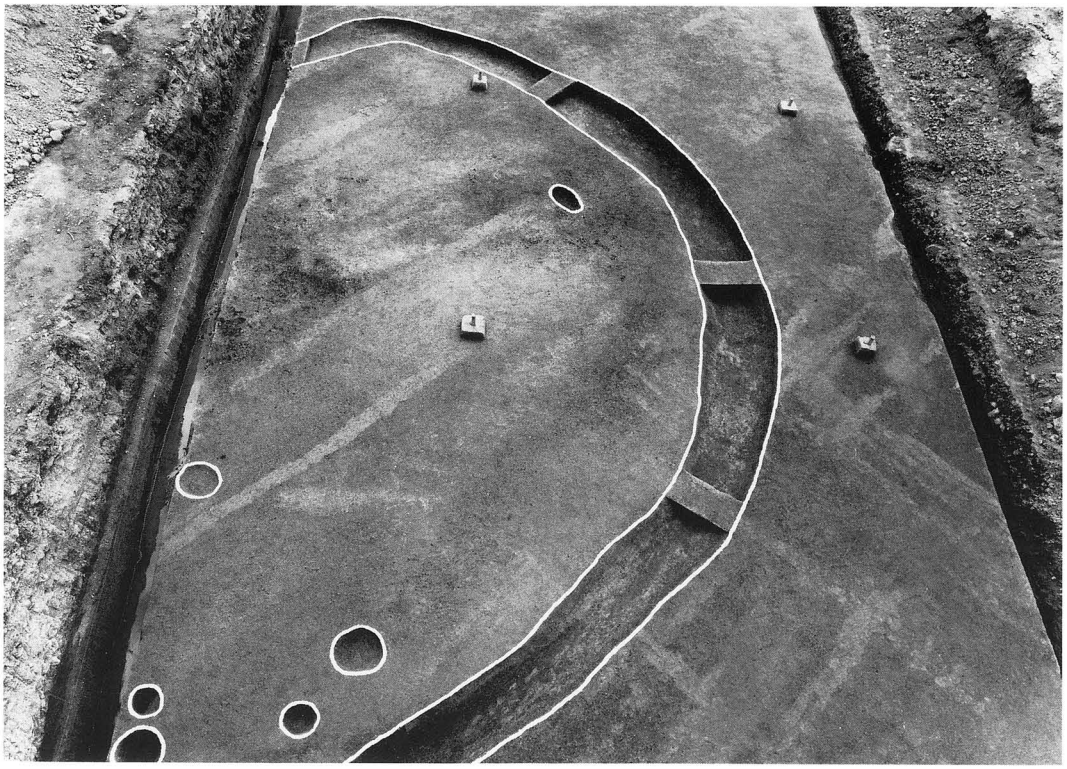
南区１号墳～３号墳検出状況（南から）

南区１号墳・２号墳検出状況（南から）

南区２号墳東周溝内遺物出土状況（南から）

南区ＳＷ－１　検出状況（南から）

北区３号墳・４号墳検出状況（東から）



北区４号墳検出状況（西から）

2号墳（1）、ＳＷ－１（3～12）出土遺物

Ⅲ　八尾南遺跡第17次調査（YS90－17）発掘調査報告

例　　言

1．本書は、八尾市若林町３丁目50番地他２筆で実施した社屋建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する八尾南遺跡第17次調査（ＹＳ90－17）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第122号　平成２年12月21日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が株式会社佐々木電気製作所から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成３年１月28日から平成３年２月27日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積436㎡を測る。調査においては中西隆子・浜田千年・真柄　竜・正木洋二・松下哲也・垣内洋平が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成７年１月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は遺物実測－沢村妙子、図面レイアウト－原田、図面トレース－北原清子、遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

1．火山灰分析については、株式会社京都フィッション・トラックの壇原　徹氏に依頼した。

1．なお、本調査地の土層と長原遺跡南部の層序の対比は、㈶大阪市文化財協会趙哲済氏からご教示を受けた。記して謝意を表する次第である。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過 ……145

第２章　調査概要 ……145

　第１節　調査の方法と経過 ……145

　第２節　基本層序 ……147

　第３節　検出遺構・出土遺物 ……149

第３章　まとめ ……166

付章　八尾南遺跡第17次調査の火山灰分析 ……169

挿　図　目　次

第１図　調査区設定図および地区割図 ……146
第２図　基本層序模式図 ……148
第３図　ＳＫ－１、ＳＫ－４、ＳＫ－５出土遺物実測図 ……149
第４図　検出遺構平面図（上層遺構） ……150
第５図　ＳＫ－４平断面図 ……151
第６図　ＳＫ－５・６平断面図 ……152
第７図　ＳＫ－８平断面図 ……153
第８図　ＳＫ－15・16平断面図 ……155
第９図　ＳＫ－19平断面図 ……155
第10図　ＳＫ－６、ＳＫ－８、ＳＫ－12、ＳＫ－15、ＳＫ－22出土遺物実測図 ……156
第11図　ＳＤ－２、ＳＤ－３、ＳＤ－４、ＳＤ－５、ＳＤ－９出土遺物実測図 ……158
第12図　ＳＰ－55出土遺物実測図 ……160
第13図　西トレンチ包含層（第４層）出土遺物実測図 ……161
第14図　ＳＫ－26・27平断面図 ……162
第15図　ＳＫ－23、ＳＫ－26、ＳＫ－30、ＳＫ－31出土遺物実測図 ……163
第16図　ＳＤ－13出土遺物実測図 ……164
第17図　東トレンチ包含層（第４層）出土遺物実測図 ……165
第18図　下層調査グリッド設定図 ……166

写　真　目　次

写真１　ＳＤ－４広口壷出土状況（北から） ……158
写真２　第９グリッド調査風景（南から） ……165

図　版　目　次

図版一　西トレンチ全景
図版二　東トレンチ全景
図版三　西トレンチ南部遺構検出状況
　　東トレンチ南部遺構検出状況
図版四　西トレンチＳＫ－５・６検出状況
　　西トレンチＳＫ－８検出状況
図版五　西トレンチＳＫ－14～16検出状況
　　西トレンチＳＫ－19検出状況
図版六　東・西トレンチ下層確認グリッド
図版七　下層確認グリッド（１～８グリッド）
図版八　ＳＫ、ＳＤ、ＳＰ出土遺物
図版九　ＳＤ、東西トレンチ包含層出土遺物

第１章　調査に至る経過

八尾南遺跡は、河内台地の東縁から河内低地に位置する旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市南西部の若林町１～３丁目・西木の本１～４丁目の東西0.5km、南北1.4kmがその範囲とされている。

昭和53年～昭和54年にかけて、八尾南遺跡調査会により行われた地下鉄谷町線延伸工事に伴う調査で旧石器時代から中世に至る複合遺跡として認識されて以来、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により28次（平成７年１月現在）にわたる調査が実施されてきた。それらの調査結果から、沖積作用が緩慢で、比較的浅い位置に旧石器の基盤面である沖積層下部層が存在する遺跡範囲の中部以南では、旧石器・縄文および稲作受容期である弥生時代の初期の段階に開発が行われているのに対して、沖積作用が著しい遺跡北部では開発時期が弥生時代後期以降であったことが確認されている。

今回の調査地ある八尾市若林町３丁目50番地は遺跡範囲の南部に位置し、昭和58年に当調査研究会が調査を実施し、弥生時代後期の方形周溝墓10基、古墳時代中期末から後期初頭の方墳５基、平安時代後期の集落等を検出した第１次調査地（ＹＳ82－１）に隣接している。発掘調査は株式会社佐々木電気製作所の社屋建築工事に伴うもので、発掘調査面積は436㎡を測る。現地調査期間は平成３年１月28日から平成３年２月27日までの26日間である。報告書作成にかかわる業務は、現地発掘調査終了後平成７年１月31まで随時実施した。

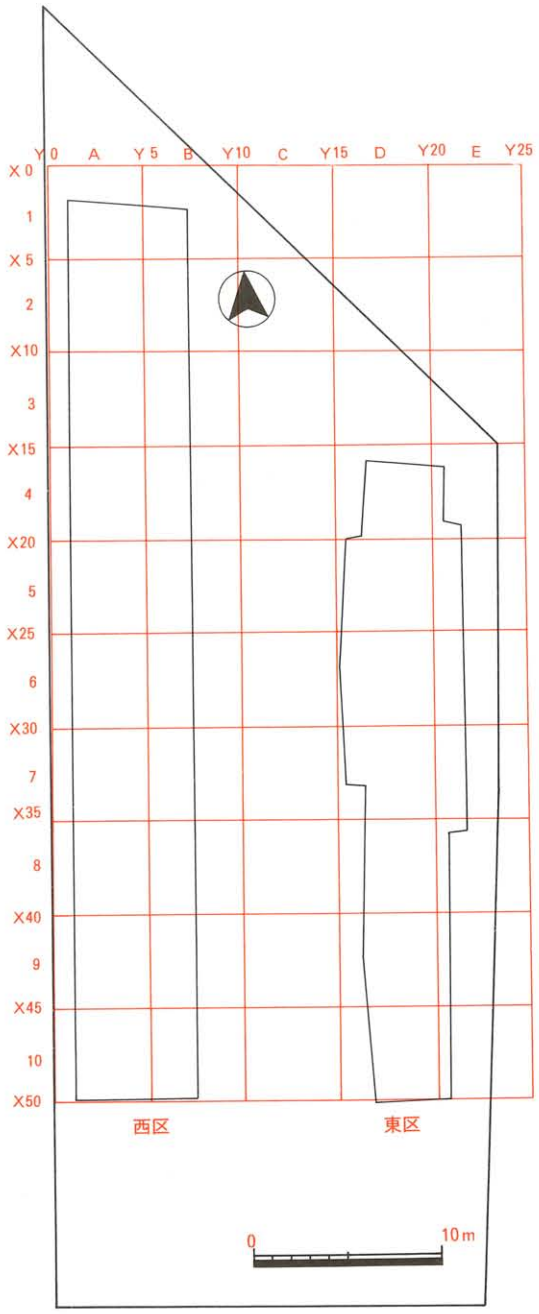
第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は社屋の建築工事に伴うもので、建築物の基礎部分を調査対象とした。調査区の設定に当っては、南北方向の基礎部分に合わせて２本のトレンチ（東トレンチ６×50ｍ・西トレンチ４×34ｍ）を並列に配置する方法を取った。調査面積は436㎡を測る。調査区の地区割については、東西25ｍ、南北50ｍにわたって設定した。設定した一区画の単位は５ｍ四方で、北西隅を基準点として東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｅ）、南北方向は算用数字（1～10）で示し、地区の表示には１Ａ地区～10Ｅ地区とした。地点の表示については、東西線Ｘ（Ｘ０～Ｘ50）、南北線（Ｙ０～Ｙ25）と設定し、Ｘ線とＹ線の交点の数値で示した。

調査では、弥生時代前期以降を対象とした上層調査と、縄文時代晩期から旧石器時代を対象とした下層調査に分けて実施した。上層調査の掘削に際しては、両トレンチともに重機により

1.0m前後を掘削した後、以下0.3m前後ついては層理に従って人力掘削を行い、第5層上面での遺構検出に努めた。下層調査は上層調査終了後、各調査区内にグリッド（西トレンチ8箇所・東トレンチ2箇所）を設定し、人力掘削により第5層から第14層下部に至るまでを調査対象とした。なお、第5層から第12層までは、縄文時代全般の遺構・遺物の有無を確認することに主眼を置いた。第12層から第14層下部については、旧石器時代相当層にあたることから、旧石器の検出と埋没古地形の復元を主目的とし、ひねり鎌（手ガリ）を使用して0.5m前後にわたる範囲の調査を実施した。両調査区の調査概要は下記のとおりである。



第1図　調査区設定図および地区割図

・西トレンチ

上層調査－地表下1.3m前後（T.P.＋11.4m前後）に存在する第5層上面で、弥生時代中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ様式）に比定される土坑22基（ＳＫ－１～ＳＫ－22）、溝12条（ＳＤ－１～ＳＤ－12）、小穴78個（ＳＰ－１～ＳＰ－78）を検出した。

下層調査－上層調査の終了後、基礎杭構築部分にグリッド（2.5×2.5m）を8箇所（北から第1グリッド～第8グリッド）を設定した。調査の結果、第5層から第12層までの土層内からは、遺構・遺物は検出されなかった。第12層から第14層下部までの旧石器相当層を対象とした調査でも、旧石器は出土していない。埋没古地形に関しては、第2グリッドで小規模な河川の存在が想起される水成層が確認されたほかは、第13層上面の標高が北部の第1グリッドでT.P.＋10.1m、南部の第8グリッ

ドではT.P.＋10.2m前後と比高差も僅かであった。

・東トレンチ

上層調査－調査地の北端から約1.5m地点より南側約17mにわたって、現表土下３mにおよぶ大規模な攪乱を受けていたため、この部分については安全面を考慮して上幅を拡張した。この撹乱のため、上層調査は調査区の約半分が調査不能になったほか、一部は旧石器相当層である13層に達する箇所がみられた。調査の結果、地表下1.3m前後（T.P.＋11.4m前後）付近に存在する第５層上面で、弥生時代中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ様式）に比定される土坑10基（ＳＫ－23～ＳＫ－32)、溝１条（ＳＤ－13)、小穴10個（ＳＰ－79～ＳＰ88）を検出した。

下層調査－攪乱部分のなかで、攪乱が第14層下部におよんでいない部分に第９グリッド（Ｘ25～27.3地点)、第10グリッド（Ｘ31～32地点）を設定した。両グリッドともに第13層・第14層を調査対象としたが旧石器は出土しなかった。なお、第13層上面の標高はT.P.＋10.1m前後で、西トレンチの数値に等しい。

・出土遺物

遺物は第４層および遺構内から土器類・石器類およびサヌカイトの剥片がコンテナ５箱程度出土した。土器類は一部を除いて、そのほとんどが小片で、しかも酸性土壌のためか土器の表面の風化が進んだものが大半を占めた。土器類の帰属時期は弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式）から中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ様式）に比定されるもので、そのうち前期のものは数点出土したのみである。石器類は石鏃・石槍・石庖丁のほかサヌカイトの剥片が出土している。なお、下層調査では土器類・石器類は出土していない。

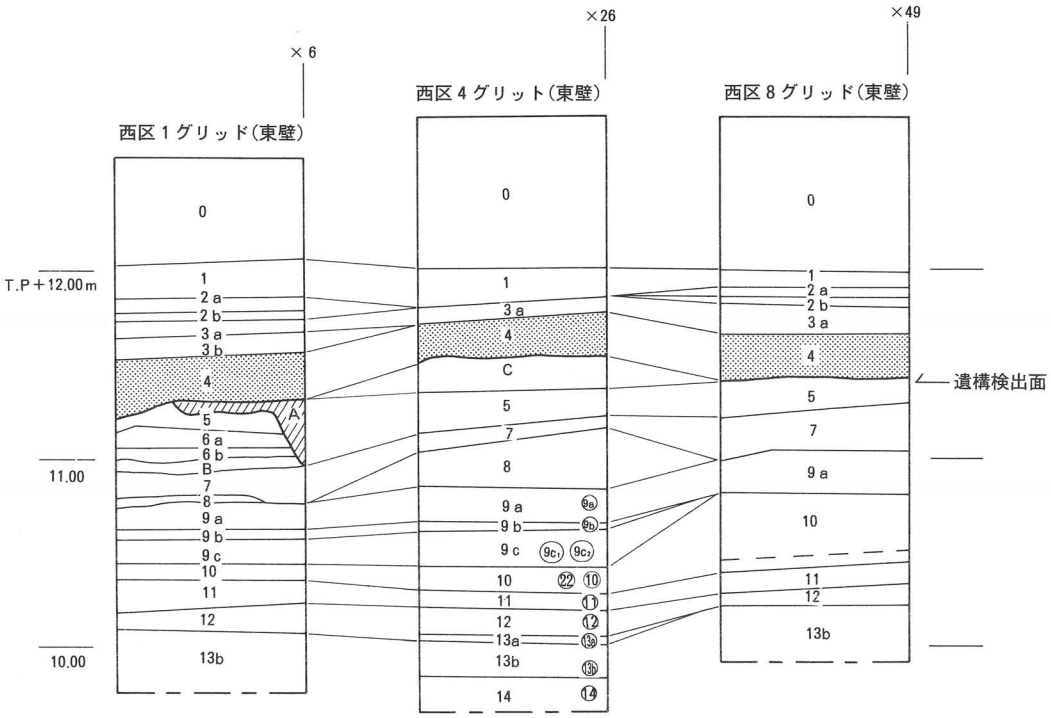
第２節　基本層序

東トレンチで幅約17m、深さ３mにおよぶ大規模な撹乱跡が見られたが、それ以外は比較的安定した層相が確認された。調査区内で普遍的に確認された第１層から第14層を基本層序とした。なお、西接する長原遺跡の基本層序との整合性を高めるため、調査時に㈶大阪市文化財協会の趙哲済氏に層準の対比をお願いした。また、当地点における火山灰分析を㈱京都フィッション・トラックの壇原徹氏に依頼した。(付章Ｐ169～186参照)

第０層	客土。層厚0.7～0.8m。上面の標高はT.P.＋12.8m前後。	
第１層	旧耕土。N6/0灰色極細粒砂。層厚0.1～0.2m。	
第２層ａ	7.5 GY7/1明緑灰色極細粒砂。層厚0.05～0.1m。	
第２層ｂ	2.5 GY8/1灰白色極細粒砂～シルト。層厚0.05m前後。	
第３層ａ	10 YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂。層厚0.03～0.1m。	ＮＧ６～７層
第３層ｂ	5 Y8/3淡黄色細粒砂。層厚0.03～0.1m。	ＮＧ６～７層
第４層	10 YR4/1褐灰色細粒砂～中粒砂。層厚0.05～0.3m。	ＮＧ８Ｂ層

弥生時代前期から中期の遺物を含む。

第５層	7.5 GY7/8黄橙色中粒砂。層厚0.1～0.3ｍ。上面が遺構検出面。	ＮＧ８Ｃ層
第６層ａ	７YR6/8橙色細粒砂。層厚0.1ｍ前後。	ＮＧ８Ｃ層
第６層ｂ	N7/0灰白色シルト。層厚0.1～0.25ｍ。	ＮＧ８Ｃ層
第７層	7.5 YR7/1明灰褐色粘土。層厚0.1ｍ。	ＮＧ８Ｃ層
第８層	2.5Y8/1灰白色～10 GY8/1緑灰色シルト～細粒砂。層厚0.１～0.2ｍ。	ＮＧ８Ｃ層
第９層ａ	10 BG5/1青灰色粘土。層厚0.1～0.25ｍ。	ＮＧ９Ａ層
第９層ｂ	10 BG7/1明青灰色粘土。層厚0.05ｍ前後。	ＮＧ９Ｂ層
第９層ｃ	N5/0灰色粘土。層厚0.2ｍ前後。	ＮＧ９Ｃ層
第10層	10 G6/1緑灰色粘土質シルト。層厚0.1～0.25ｍ。	ＮＧ10層
第11層	10 BG6/1青灰色粘土。層厚0.1～0.2ｍ。	ＮＧ11層
第12層	N6/0灰色シルト。層厚0.05～0.25ｍ。	ＮＧ12層
第13層ａ	2.5 GY8/1灰白色シルト。層厚0.05～0.1ｍ。	ＮＧ13Ａ層
第13層ｂ	５Y8/4淡黄色～10 GY8/1明緑灰色シルト。層厚0.05～0.1ｍ。	ＮＧ13Ｂ層
第14層	10 GY8/1明緑灰色シルト。層厚0.2ｍ。	ＮＧ14層



第２図　基本層序模式図

第３節　検出遺構・出土遺物

１）西トレンチ上層調査

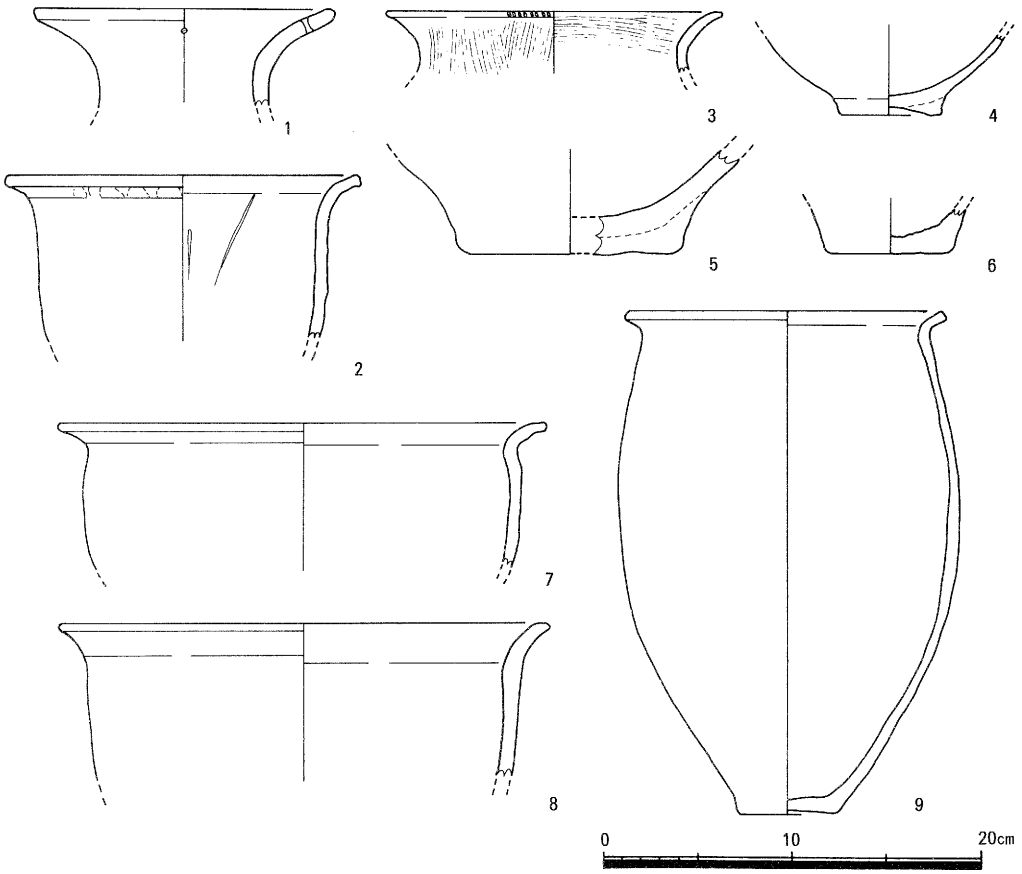
土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

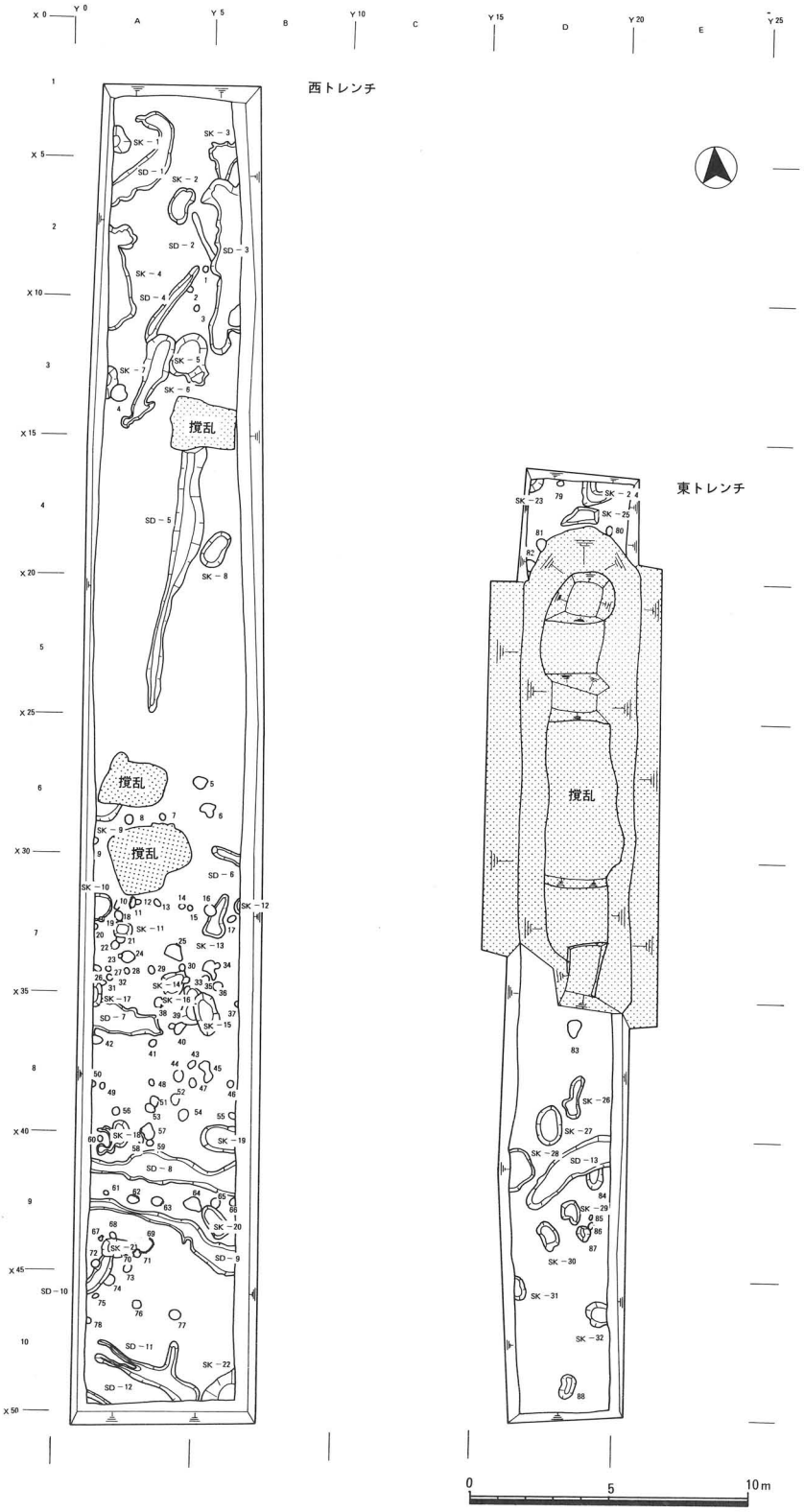
１Ａ地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.62ｍ、南北幅0.92ｍ、深さ0.34ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層黄橙色細粒砂・第３層暗灰色細粒砂・第４層灰白色粘質シルトと灰色細砂の互層である。遺物は弥生中期前半（畿内第Ⅱ様式）に比定される壷（１）が１点出土した。（１）は直上に伸びる頸部から口縁部が大きく外反する広口壷である。口縁端部直下に紐孔を有する。胎土には、多量の石英・長石粒と微量のチャート粒が含まれている。焼成は良好で色調は褐灰色である。

ＳＫ－２

２Ａ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.8ｍ、南北幅1.38ｍ、深さ0.23ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂である。遺物は第



第３図　ＳＫ－１（１）、ＳＫ－４（２～６）、ＳＫ－５（７～９）出土遺物実測図



第４図　検出遺構平面図（上層遺構）

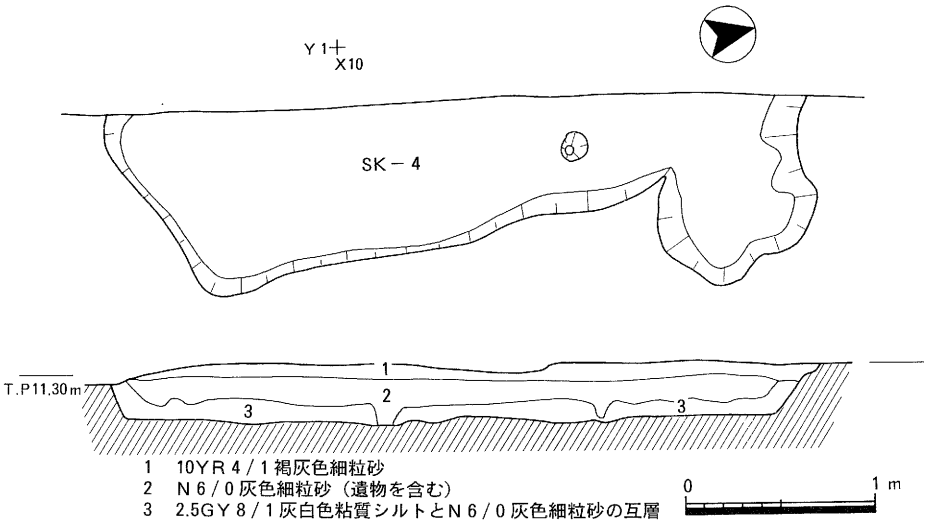
２層から弥生土器片１点出土したが、器種や時期は明確でない。

ＳＫ－３

１・２ＡＢ地区で検出した。東部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.98ｍ、南北幅1.38ｍ、深さ0.09ｍを測る。埋土は灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が４点出土したが、器種や時期は明確でない。

ＳＫ－４

２・３Ａ地区で検出した。西部は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分では南北方向に長い溝状を呈する。検出部分は東西幅0.8ｍ、南北幅3.68ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は第２層から弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）の土器片が少量と、サヌカイトの剥片が７点出土した。５点（２～６）を図化した。（２・３）は甕である。（２）は口縁部が外反するもので、全体に風化が著しく調整等は不明である。復元口径18.8㎝を測る。胎土には石英・長石粒が多量に含まれている。焼成は良好で色調は淡灰色である。（３）は大和型の甕である。復元口径17.8㎝を測る。口縁端部に細かい刻目が施されている。器面調整は外面が縦方向、内面が横方向にハケ調整が行われている。胎土には石英・長石・黒雲母が多量に含まれている。焼成は良好で色調は淡褐色である。（４）はあげ底の底部を有する鉢である。内外面ともにナデ調整が行われている。胎土はやや粗く石英・長石・チャート粒が多量に含まれている。焼成は良好で色調は淡灰色である。（５・６）は壷の底部で（５）がやや大型で底径12㎝（６）が中型で底径6.5㎝を測る。（５）は生駒西麓産である。



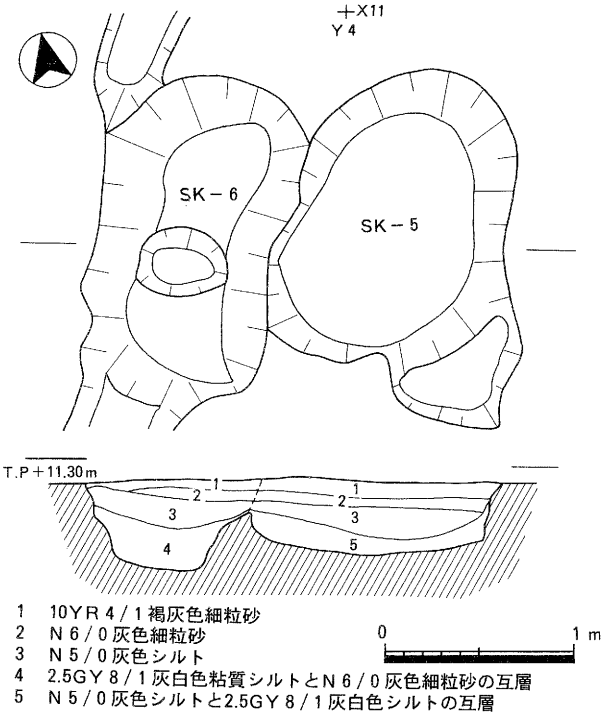
第５図　ＳＫ－４平断面図

ＳＫ－５

３Ａ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、南北幅1.3ｍ、南北幅1.9ｍ、深さ0.37ｍを測る。埋土は上層から第１褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰色シルト・第５層灰色シルトと灰白色シルトの互層である。遺物は第２層から弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）の壷・甕の小片が少量と、サヌカイトの剥片が３点出土した。図化したものは３点（７～９）である。（７・８）は体部上半から口縁部が外反して伸びる甕で、２点ともに1/10程度が残存する資料である。（７）が口縁部が強く屈曲するのに対して（８）はゆるやかに外反する口縁部を有するが、口縁端部は共に丸味を持って終る。色調は（７）が淡褐灰色、（８）が灰白色で、前者は生駒西麓産である。（９）は全体の1/2程度が残存した甕で口径16.5㎝、器高26.8㎝、胴部最大径17.9㎝、底径５㎝を測る。底部は径が小さく、あげ底気味の底部を有する。胴部はやや細身で長く伸びるもので、中位に最大径を持った後、頸部に向かって内傾する。口縁部は強く屈曲し、端部は水平な面を持つ。器面調整は内外面ともにナデ調整を行う。頸部と口縁部の境に指頭圧痕が認められる。胎土には長石・石英粒が多量に含まれている。焼成は良好で色調は褐灰色である。

ＳＫ－６

３Ａ地区で検出した。ＳＫ－５の西部と接し、ＳＤ－４を切っている。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.9ｍ、南北幅1.8ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は上層から第１褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰色シルト・第４層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は第２層～第４層から弥生時代中期前半～中頃（畿内第Ⅱ～Ⅲ様式）の壷・甕・高杯の小片が少量と、サヌカイトの剥片が３点出土した。図化したのは３点（10～12）である。（10）は細頸壷の体部から頸部に至る資料である。頸部外面に直線文が施文されている。胎土には、長石・石英が散見される程度の良好な粘土が使用されている。色調は褐灰色を呈する。（11）は口縁部が外反する甕である。器面調整は両面ともにナデである。胎土に



第６図　ＳＫ－５・６平断面図

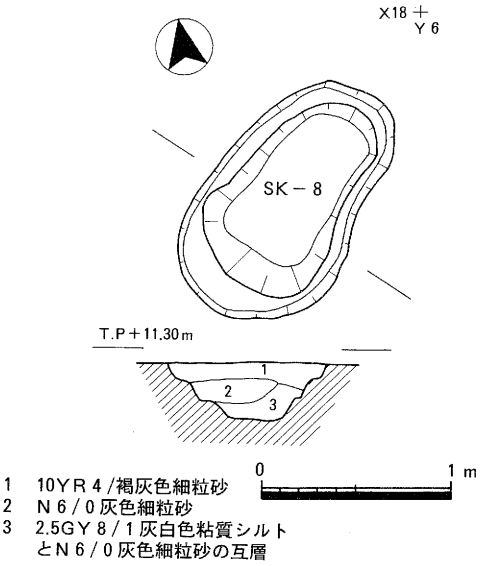
は石英粒が多量に含まれている。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。（12）は高杯の杯部の小片である。胎土には石英・長石・角閃石がわずかに散見される程度の精良粘土を使用している。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。

ＳＫ－７

３Ａ地区で検出した。西部は調査区外に至るため全容は不明である。南東部はＳＰ－４に切られている。検出部分で東西幅0.38ｍ、南北幅1.02ｍ、深さ0.17ｍを測る。埋土は上層から第１層灰色細粒砂・第２層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－８

４Ａ・Ｂ地区で検出した。楕円形を呈するもので、東西幅0.84ｍ、南北幅1.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式〕の土器片のほか、サヌカイトの剥片が１点出土した。２点（13・14）図化した。（13）は甕の底部である。胎土はやや粗く、石英・黒雲母・角閃石のほか５㎜大の長石が含まれている。褐灰色の色調を呈するもので、生駒西麓産である。（14）は鉢であげ底の底部を有する。底径５㎝を測る。赤褐色の色調で、胎土には長石・石英・角閃石が多量に含まれている。



第７図　ＳＫ－８平断面図

ＳＫ－９

６Ａ地区で検出した。北部が撹乱を受けており上面の形状は明確でない。検出部分で東西幅0.8ｍ、南北幅0.6ｍ、深さ0.11ｍを測る。埋土は上層から褐灰色細粒砂の単一層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－10

７Ａ地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。南部の一部がＳＰ－19に切られているほか、土坑内の北部には小穴２個が存在している。検出部分で東西幅0.62ｍ、南北幅0.9ｍ、深さ0.09ｍを測る。埋土は灰色細粒砂の単一層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－11

７Ａ地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、南部でＳＰ－21を切っている。規模は東西幅0.7ｍ、南北幅0.58ｍ、深さ0.09ｍを測る。埋土は第１層灰色粘質シルトと灰白色細粒砂の互

層・第２層褐灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－12

７Ａ地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.2ｍ、南北幅0.52ｍ、深さ0.03ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代中期中頃〔畿内第Ⅲ様式〕の壷・甕の小片が少量出土した。５点（15～19）図化した。（15～18）は甕、（19）は壷である。（15）は口縁部がゆるやかに外反するもので、器面全体が風化しており調整は不明である。橙色系の色調で、胎土には長石・石英が多量に含まれている。（16～18）は底部のみが残存したもので、底径は（16）が5.6㎝、（17）が4.8㎝、（8）が5.7㎝を測る。色調は（16）が乳白色、（17・18）が灰白色である。胎土は（16）が石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む搬入品と考えられるが、（17・18）には石英・長石粒が多量に含まれており在地製と推定される。（19）は球形の体部から頚部が直上に伸びた後、口縁部が外反し外側に面をもつ広口壷である。口径15.6㎝を測る。外面の調整はナデで、内面は体部上半に指ナデの痕跡が認められる。胎土には石英・長石粒が多量に含まれており、焼成は良好で灰白色の色調を呈している。

ＳＫ－13

７Ａ地区で検出した。不定形を呈するもので、西部の一部がＳＰ－16に切られている。規模は東西幅0.5ｍ、南北幅1.56ｍ、深さ0.14ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂の単一層である。遺物は弥生土器片が１点出土したが器種や時期は明確でない。

ＳＫ－14

７・８Ａ地区で検出した。不定形を呈するもので、北部の一部がＳＰ－30・ＳＰ－33に切られている。規模は東西幅0.9ｍ、南北幅0.92ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は第１層褐灰色細粒砂・第２層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が２点出土したが器種や時期は明確でない。

ＳＫ－15

８Ａ・Ｂ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、西部でＳＫ－16を切っている。規模は南北幅0.4ｍ、南北幅1.42ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰色シルト・第４層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生時代中期の土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が１点出土している。甕１点（20）を図化した。甕の口縁部の小片で残存率は⅛程度である。全体に風化しており器壁面の調整は不明である。胎土に石英・長石・角閃石が含まれており、色調も褐灰色を呈することから生駒西麓製と推定される。

ＳＫ－16

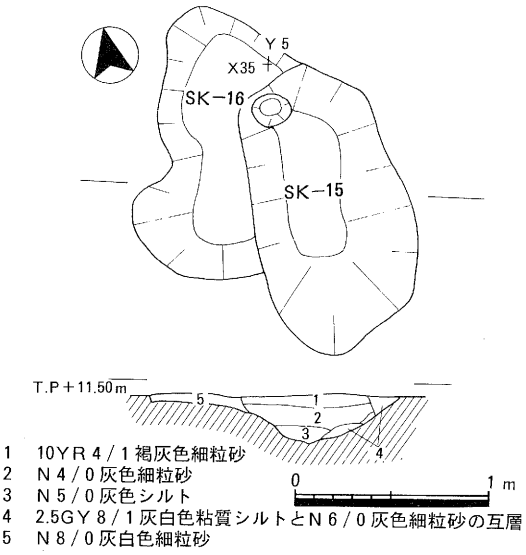
７・８Ａ地区で検出した。東部がＳＫ－15に切られている。規模は南北幅0.84ｍ、南北幅1.46ｍ、深さ0.03ｍを測る。埋土は灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－17

７・８Ａ地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北幅0.28ｍ、南北幅0.88ｍ、深さ0.13ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－18

８・９Ａ地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.0ｍ、南北幅1.1ｍ、深さ0.31ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が極少量出土したが、器種や時期は明確でない。



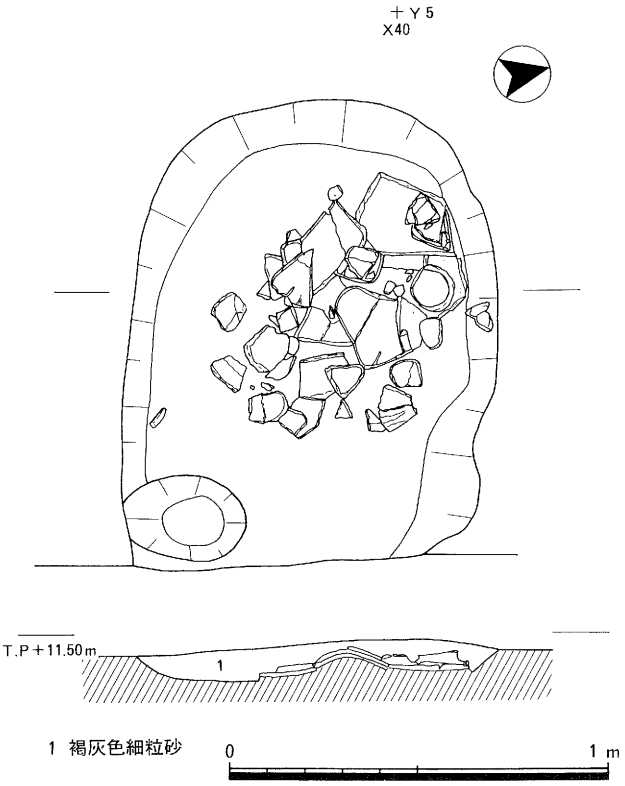
第８図　ＳＫ－15・16平断面図

ＳＫ－19

８・９Ｂ地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北幅1.22ｍ、南北幅0.96ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期の甕の１個体分が出土したが、全体に風化が顕著で細片化しており、復元することが出来なかった。

ＳＫ－20

９Ｂ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、南北幅0.7ｍ、南北幅1.26ｍ、深0.08ｍを測る。埋土は第１層褐灰色細粒砂・第２層灰白色粘



第９図　ＳＫ－19平断面図

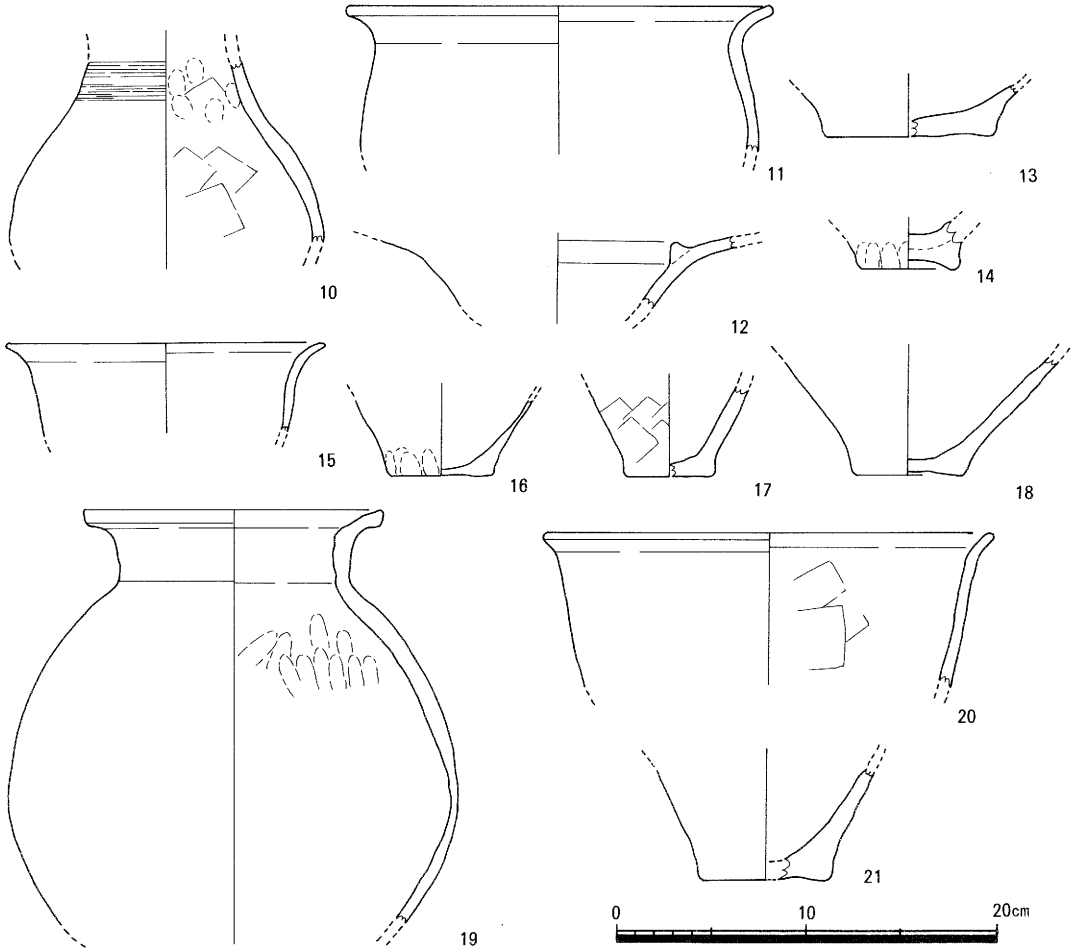
質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－21

９Ａ地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、北部の一部でＳＰ－68に切られ、南部でＳＤ－10を切っている。規模は東西幅0.9ｍ、南北幅0.68ｍ、深さ0.21ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－22

10Ｂ地区で検出した。東部および西部が調査区外に至るため全容は不明であるが、西部でＳＤ－11を切っている。検出部分で東西幅1.2ｍ、南北幅1.0ｍ、深さ0.28ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰色シルトである。遺物は弥生時代中期の甕の小片が少量と、サヌカイトの剥片が２点出土している。甕１点（21）を図化した。（21）は甕の底部で、残存率は¼程度である。全体に器壁面の風化が顕著である。生駒西麓産である。



第10図　ＳＫ－６（10～12）、ＳＫ－８（13・14）、ＳＫ－12（15～19）、ＳＫ－15（20）、ＳＫ－22（21）出土遺物実測図

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

１・２Ａ地区で検出した。南西－北方向に伸びるもので、検出長3.8ｍ、幅0.5～1.0ｍ、深さ0.18ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層黄橙色細粒砂・第３層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が３点出土した。

ＳＤ－２

２Ａ・Ｂ地区で検出した。南東－北西方向に直線的に伸びるもので、北西端はＳＤ－３に切られている。規模は検出長2.0ｍ、幅0.18ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期中頃（畿内第Ⅲ様式〕の壷の小破片が極少量出土した。壷１点（22）を図化した。（22）は口縁端部が下外方に垂下する広口壷で、口縁端面に波状文が施文されている。灰白色の色調で、焼成は良好である。胎土には小砂粒が散見される程度の精良な粘土が使用されている。

ＳＤ－３

２・３ＡＢ地区で検出した。東側が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では南北方向に伸びるもので、西側でＳＤ－２を切っている。規模は検出長6.3ｍ、幅0.62～1.24ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式－新段階）の甕の小破片のほか、サヌカイトの剥片が３点出土している。甕３点（23～25）を図化した。（23）は底部で底径6.8㎝を測る。内外面ともにナデ調整が行われている。胎土は粗く石英・長石・チャート粒が多量に含まれている。外面淡褐色、内面灰白色を呈する。（24）は口縁部が「く」の字状に鋭く屈曲するもので、口縁端部に刻目、頚部に２条のヘラ描による直線文を巡らせている。胎土には石英・長石・チャート粒を多量に含むもので、色調は外面が淡褐色、内面が灰白色を呈する。形状から、前期の中でも新しい段階のものと考えられる。（25）は大型の甕で、頚部に７条を１単位とする櫛描直線文を施文している。器面調整は内外面ともにナデである。色調は淡褐灰色で、胎土には長石粒が散見される。

ＳＤ－４

２・３Ａ地区で検出した。北東－南西方向に伸びるもので、南西端はＳＫ－６に切られている。規模は検出長3.34ｍ、幅0.36ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は第３層から弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式〕の壷等が出土した。壷１点（26）を図化した。（26）はやや小型の長頚の広口壷で、口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径16㎝、器高27.5㎝、体

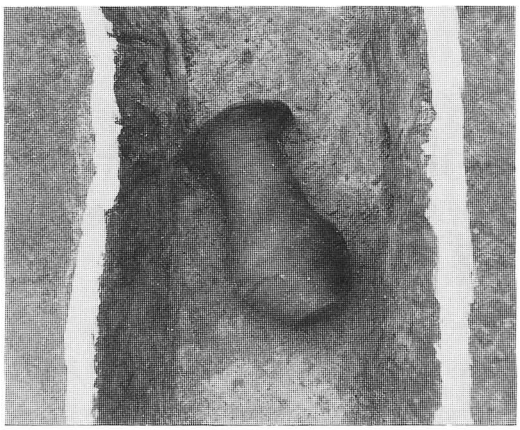
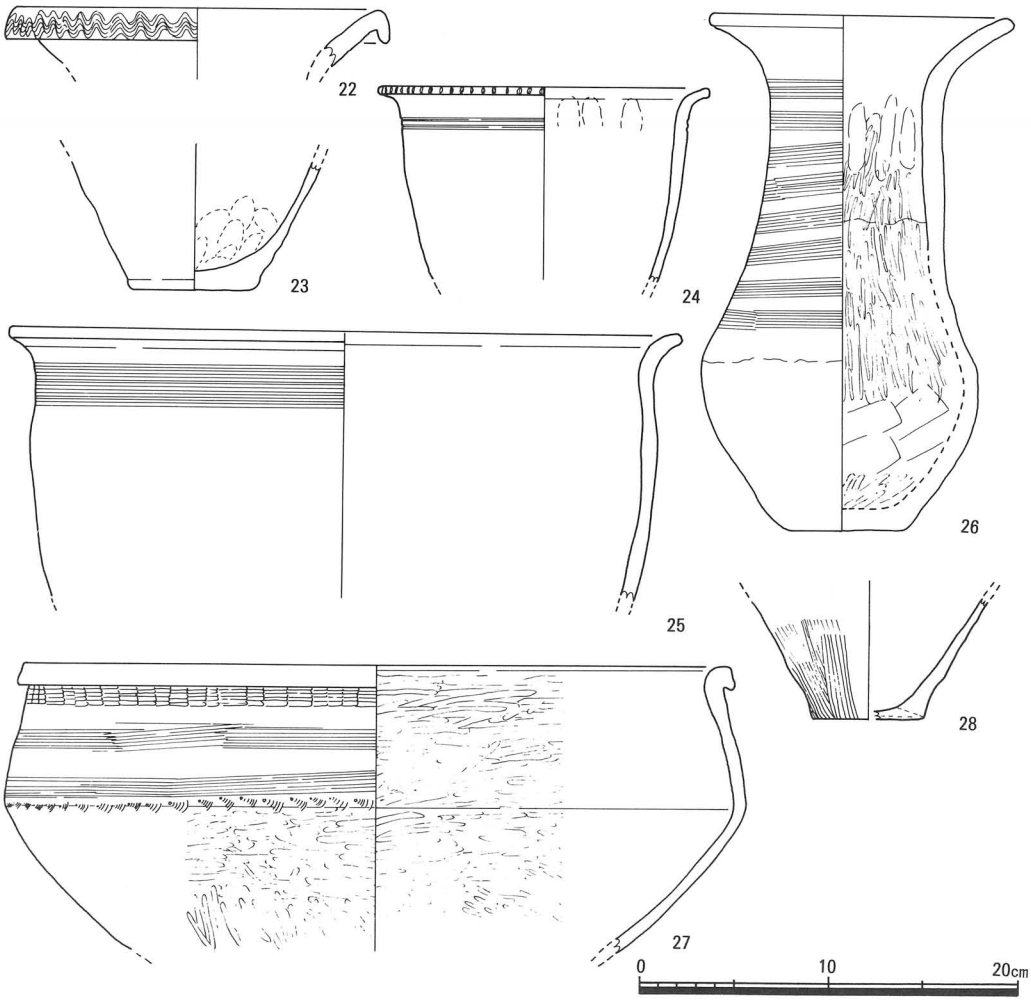


写真１　ＳＤ－４広口壺（26）出土状況（北から）

部最大径14.6㎝、底径5.7㎝を測る。頚部に１単位７本の櫛描直線文を８条巡らしている。器面調整は外面がナデ、内面は底部と口縁部がナデ、頚部が縦方向のミガキである。焼成は良好で色調は褐灰色を呈する。生駒西麓産である。

ＳＤ－５

４・５Ａ地区で検出した。南西方向に伸びるもので、北端は攪乱により切られている。規模は検出長9.6ｍ、幅0.38～1.06ｍ、深さ



第11図　ＳＤ－２（22）、ＳＤ－３（23～25）、ＳＤ－４（26）、ＳＤ－５（27）、ＳＤ－９（28）出土遺物実測図

0.52ｍを測る。埋土は上層から第１層青灰色粘土・第２層褐灰色細粒砂・第３層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層・第４層灰色細粒砂である。遺物は第４層から弥生時代中期中頃（畿内第Ⅲ様式〕の甕・大型鉢の破片等が少量出土した。鉢１点（27）を図化した。（27）は大型の鉢で、復元口径37.4㎝を測る。内湾気味に開く体部から屈曲して口縁部が内傾して立ち上がるもので、口縁端部は折り返しにより垂直方向に面をもつ。口縁部に上から櫛描簾状文１条、櫛描直線文２条、扇形文１条を施す。器面調整は、口縁部内面および体部内外面がヘラミガキである。色調は灰白色で、胎土には長石・石英・チャート粒が散見される。

ＳＤ－６

６・７Ｂ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、東部は調査区外に至る。規模は検出長1.1ｍ、幅0.36ｍ、深さ0.05ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期前半〔畿内第Ⅱ様式〕の壷の小破片が極少量と、サヌカイトの剥片が８点出土した。

ＳＤ－７

８Ａ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、北西部でＳＫ－17に切られ、西部は調査区外に至る。規模は検出長2.54ｍ、幅0.7～1.16ｍ、深さ0.14ｍを測る。埋土は第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ－８

９ＡＢ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長5.22ｍ、幅0.4～1.16ｍ、深さ0.12ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が少量と、サヌカイトの剥片が５点出土した。

ＳＤ－９

９ＡＢ地区で検出した。東西方向に弓状に伸びるもので、検出長5.64ｍ、幅1.18～1.0ｍ、深さ0.06ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期の土器片が少量出土している。図化したものは甕１点（28）である。（28）は甕の底部で残存率は¼程度である。外面に縦方向のハケ調整が行われている。色調は灰白色で、胎土には長石・チャート粒が多量に含まれている。搬入品と推定される。

ＳＤ－10

９・10Ａ地区で検出した。北北東－南南西に伸びるもので、北端がＳＫ－21に切られている。規模は検出長1.4ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ－11

10ＡＢ地区で検出した。３本の溝で構成されている。方向は北西－南東方向に伸びるもの２条と南北方向の１条である。南東端はＳＫ－22に切られている。規模は検出長4.12ｍ、幅0.18

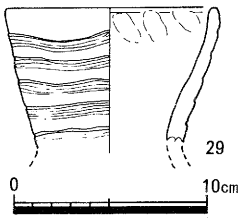
～0.64m、深さ0.06mを測る。埋土は第1層褐灰色細粒砂・第2層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が3点出土したが、器種や時期は明確でない。

ＳＤ－12

10Ａ地区で検出した。南東－北西に伸びるもので、検出長0.9m、幅0.16m、深さ0.11mを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

小穴（ＳＰ）

小穴は総数で78個〔ＳＰ－１～ＳＰ－78〕を検出した。上面の形状で区別すれば、円形、楕円形、方形、不定形の四種類が認められ、そのうち円形を呈するものが大半を占めた。規模は幅0.14～0.74m、深さ0.04～0.29mを測る。遺物はＳＰ－17・ＳＰ－39・ＳＰ－40・ＳＰ－45・ＳＰ－55・ＳＰ－66から土器類が出土したが、大半が小片で出土量も少なかった。



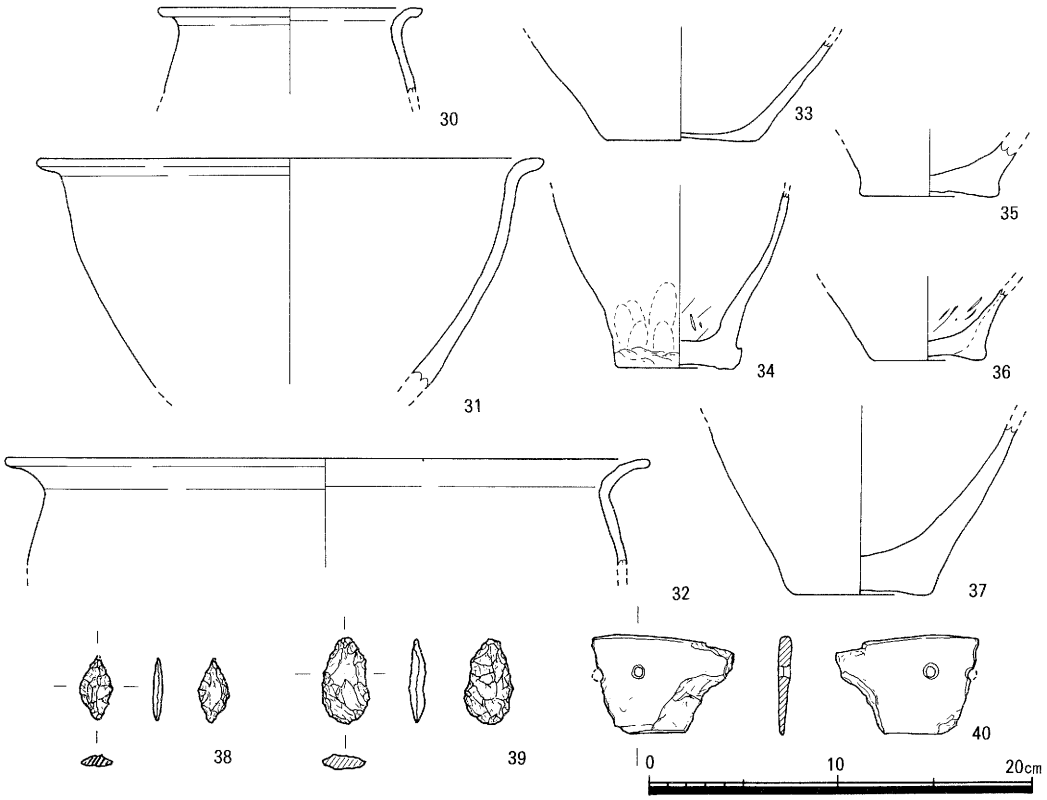
第12図　ＳＰ－55出土遺物実測図

図化したものはＳＰ－55出土の細頸壷（29）である。口縁部上半が内湾するもので口径11cmを測る。残存部分の外面には4本を1単位とする雑な櫛描直線文が5条巡っている。小粒からやや大粒の長石・石英粒を多量に含む粗い胎土で、色調は灰白色を呈する。畿内第Ⅲ様式の古相に位置付けられる。

西トレンチ包含層（第4層）出土遺物

遺物は第4層から出土した。量的にはコンテナ箱に約半分程度である。種別では土器類と石器類がある。土器類については、小片化したものが多く、しかも器壁面の風化が進んだものが大半を占めている。時期的には、弥生時代中期前半～中頃（畿内第Ⅱ～Ⅲ様式）に比定される。図化したものは、土器類8点（30～37）、石器類3点（38～40）の計11点である。

土器類のなかで図化したものは甕の8点（30～37）である。（30～32）が口縁部、（33～37）が底部の資料である。口縁部の資料には、強く屈曲する（30・31）とゆるやかに外反する（32）がある。3点ともに器壁面が風化しており、調整は不明である。色調は3点ともに赤褐色系で、胎土には比較的大粒の長石・石英粒が多量に含まれている。底部の5点は胎土・色調からみて生駒西麓産のもの（33・35・36）と、胎土にチャートの含有が目立ち灰白色を呈する（34・37）に区別される。石器類には石鏃2点（38・39）と石庖丁1点（40）がある。石鏃（38）は凸基有茎式で長さ32.8mm、幅11.85mm、厚さ4.9mm、重量2.6mgを測る。（39）は未製品である。石材はともにサヌカイトである。石庖丁（40）は両端部が欠損しているが、おそらく直線刃半月形態のものと推定される。刃部は片刃である。肩部はわずかに外湾し、面取り状の研磨痕が認められる。紐孔は2孔であるが1孔は半損している。石材は粘板岩である。



第13図　西トレンチ包含層（第４層）出土遺物実測図

２）東トレンチ上層調査

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－23

４Ｄ地区で検出した。西部および北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.44ｍ、南北幅0.44ｍ、深さ0.21ｍを測る。埋土は第１層灰色細粒砂・第２層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は石錐１点のほか、サヌカイトの剥片が２点出土した。石錐１点（45）を図化した。（45）は完形の棒状錐で長さ33.2㎜、幅7.2㎜、重さ1.3㎎を測る。頭部から錐部にかけて細かい調整剥離で成形されている。石材はサヌカイトである。

ＳＫ－24

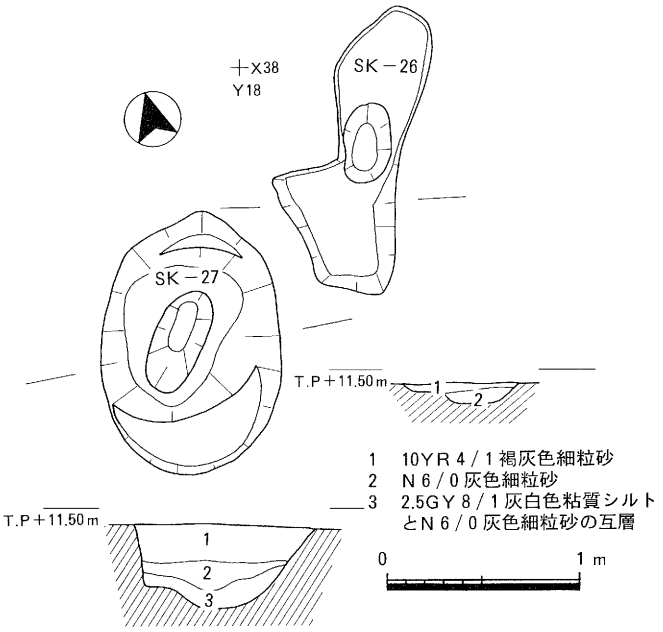
４Ｄ地区で検出した。北部が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分で「Ｌ」字形を呈するもので東西幅1.06ｍ、南北幅0.88ｍ、深さ0.37ｍを測る。埋土は第１層褐灰色細粒砂・第２層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が12点出土した。

ＳＫ－25

４Ｄ地区で検出した。南部が撹乱を受けており全容は不明である。検出部分で東西幅1.26ｍ、南北幅0.74ｍ、深さ0.36ｍを測る。なお、土坑内に存在する小穴から柱根が検出されている。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色中粒砂・第３層細粒砂である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が２点出土した。

ＳＫ－26

８Ｄ地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.64ｍ、南北幅1.54ｍ、深さ0.09ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期の土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が９点出土した。甕１点（41）を図化した。（41）は甕の口縁部で残存率が1/10程度の小片である。色調はにぶい黄橙色で、胎土には長石・石英が散見される。



第14図　ＳＫ－26・27平断面図

ＳＫ－27

８・９Ｄ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.94ｍ、南北幅1.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が２点出土した。

ＳＫ－28

９Ｄ地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.9ｍ、南北幅1.56ｍ、深さ0.35ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰色粘質シルトと灰白色細粒砂の互層・第４層灰白色中粒砂である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が２点出土した。

ＳＫ－29

９Ｄ地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.66ｍ、南北幅0.86ｍ、深さ0.09ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－30

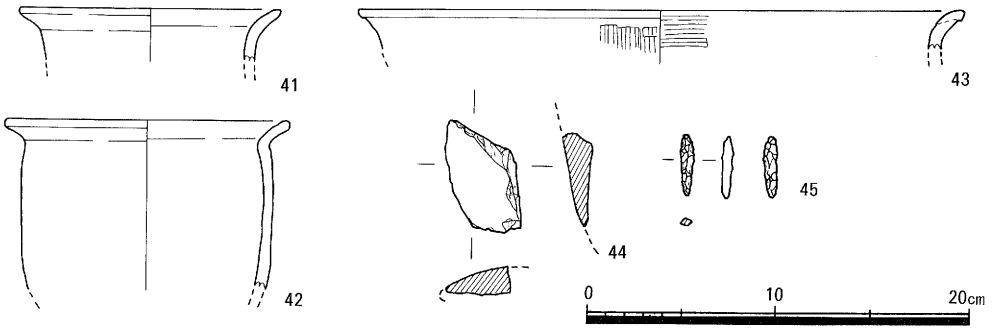
９Ｄ地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.76ｍ、南北幅1.04ｍ、深さ0.17ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂である。遺物は第２層から弥生時代中期の甕の小片が少量と、サヌカイトの剥片が１点出土した。甕１点（42）を図化した。（42）は口縁部が「く」の字に屈曲する甕である。内外面ともにナデ調整が行われている。色調は褐灰色で、胎土には石英・長石・角閃石が含まれている。

ＳＫ－31

10Ｄ地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.36ｍ、南北幅0.82ｍ、深さ0.11ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が少量と、サヌカイトの剥片が５点出土した。甕１点（43）と石斧片１点（44）を図化した。（43）は大和型甕と呼称される甕の口縁部の資料で、残存率は1/12程度の小片である。体部外面に縦方向、口縁部内面に横方向のハケ調整が施されている。色調は褐灰色で、胎土には長石・石英粒が散見される。（44）は磨製石斧の一部と推定されるもので、丁寧に研磨された部分が残っている。石材は黒灰色の色調を呈するサヌカイトである。

ＳＫ－32

10Ｄ地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.74ｍ、南北幅0.92ｍ、深さ0.33ｍを測る。埋土は上層から第１層褐灰色細粒砂・第２層灰色細粒砂・第３層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が少量と、サヌカイトの剥片が１点出土した。



第15図　ＳＫ－23（45）、ＳＫ－26（41）、ＳＫ－30（42）、ＳＫ－31（43・44）出土遺物実測図

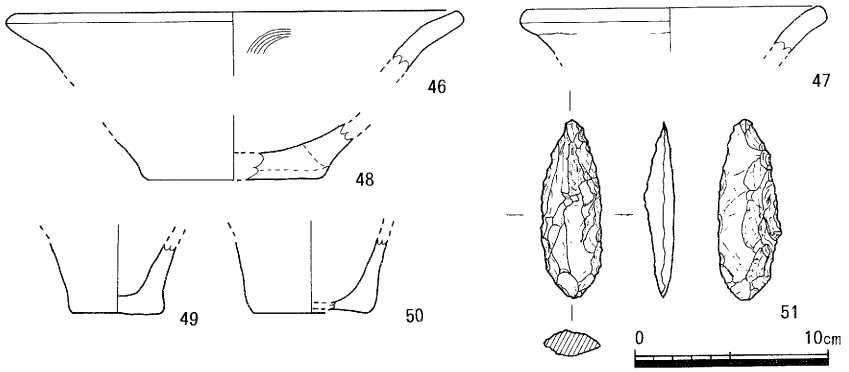
溝（ＳＤ）

ＳＤ－13

８・９Ｄ地区で検出した。南北－北東方向に伸びるもので、検出長3.7ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.17ｍを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期の土器片および石器類が少量出土

している。

6点（46～51）を図化した。（46～48）は壷である。（46・47）は広口壷の口縁部で（46）の口縁部内面には櫛描きによる連孤文が施文されている。色調は（46）が淡灰色で、胎土には長石・石英・チャート粒が多量に含まれている。（47）は褐灰色の色調を特長とする生駒西麓産である。（48）は大型壷の底部である。（47）と同様生駒西麓産である。（49・50）は甕の底部で2点とも生駒西麓産である。（51）は石槍の未成品と考えられるもので、長さ9.4cm、幅3.3cm、重さ46.4mgを測る。背面側に自然面が残り、腹面側には大剥離面が残存している。腹面側の右側面中央の剥離を行った際に、剥離角度が深くなった為、制作途中で廃棄された可能性が考えられる。石材はサヌカイトである。



第16図　ＳＤ－13出土遺物実測図

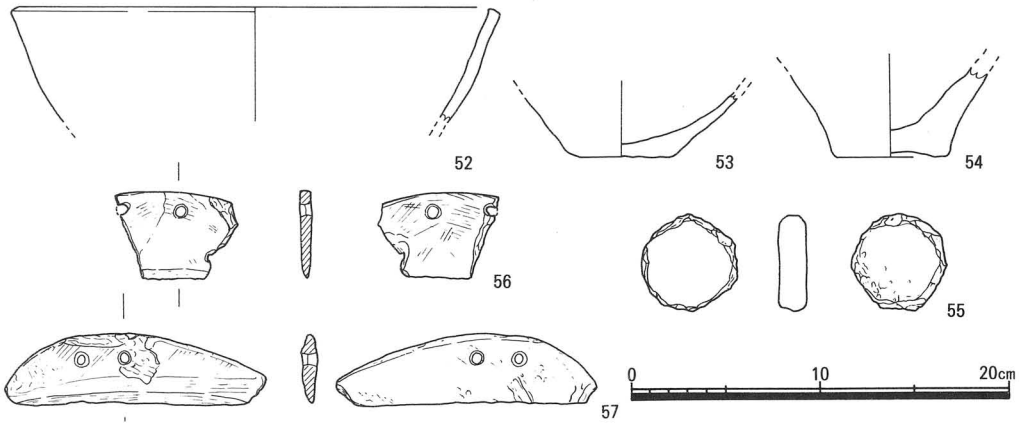
小穴（ＳＰ）

小穴は総数で10個（ＳＰ－79～88）検出した。上面の形状で区別すれば、円形・不定形がある。規模は幅0.14～0.82m、深さ0.07～0.36mを測る。遺物はＳＰ－80・ＳＰ－81・ＳＰ－83・ＳＰ－87・ＳＰ－88から弥生時代中期の土器片・サヌカイトの剥片が出土したが、いずれも小片で出土量も少ない。

・東トレンチ包含層出土遺物

第4層から出土したが、調査区の約1/2程度が現在の撹乱を受けていたため、出土量もコンテナ箱にして¼程度と少ない。6点（52～57）を図化した。（52）は鉢で口径25.8cmを測る。内外面ともに器壁面の風化が著しく、調整は不明瞭である。胎土には長石・石英・黒雲母が含まれている。色調は赤褐色である。（53・54）は壷の底部である。ともに生駒西麓産である。（55）は土器片を再加工した円板状土製品である。不整円形を呈するもので、幅5cm、厚さ1.4cmを測る。石器類は石庖丁2点（56・57）を図化した。（56）片刃の石庖丁で両端部が欠損している。刃部は直線状を呈するが刃先は潰れている。紐孔は2孔であるが1孔は半損している。石材は緑泥片岩である。（57）は両端部を欠損するが、ほぼ全容を知り得るものである。形態的には、内湾刃半月形態に分類されるもので、刃部は片刃である。現存部分で長さ13.5cm、

幅3.4㎝、厚さ0.8㎝、紐孔間距離1.6㎝、重さ54.7㎎を測る。背部および刃部に剥離が認められるほか、両面の片側端部付近に敲打痕が認められる。紐孔は２孔である。石材は緑泥片岩である。



第17図　東トレンチ包含層（第４層）出土遺物実測図

３）下層調査

上層調査の終了後、西トレンチでは、基礎杭構築部分に2.5×2.5ｍ規模のグリッド８箇所（北から第１グリッド～第８グリッド）を設定した。東トレンチでは、Ｘ17地点からＸ35地点にかけて大規模な撹乱が検出されたことから、撹乱が第14層下部におよんでいない部分に2.3×2.4ｍ規模の第９グリッド（Ｘ25～Ｘ27.5地点）、さらにその南側に2.4×2.0ｍ規模の第10グリッド（Ｘ31～Ｘ32）を設定した。西トレンチに設定したグリッドでは、第５層から第12層については、縄文時代全般の遺構・遺物の有無を確認することに主眼を置き、人力により層理ごとに掘削する調査方法を取った。第12層から第14層下部については、旧石器時代相当層に当るため旧石器の検出と埋没古地形の復元を目的として、ひねり鎌（手ガリ）と手スコを併用し、0.5ｍ前後にわたる範囲を調査対象とした。東トレンチに設定したグリッドについては、撹乱が及んでいない第12層～第14層下部を調査対象とした。 以上のような調査方法をとり丁寧な調査に努めたが、遺物は土器類および石器類は１点も出土しなかった。

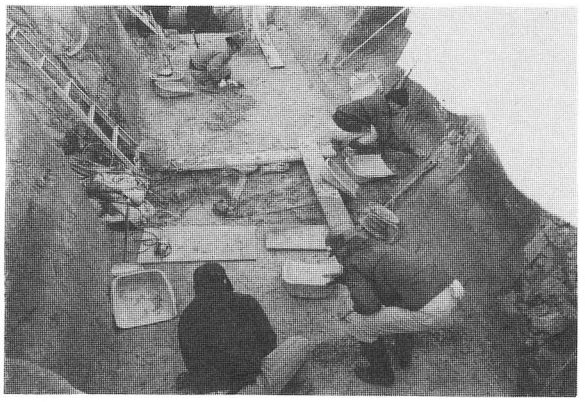
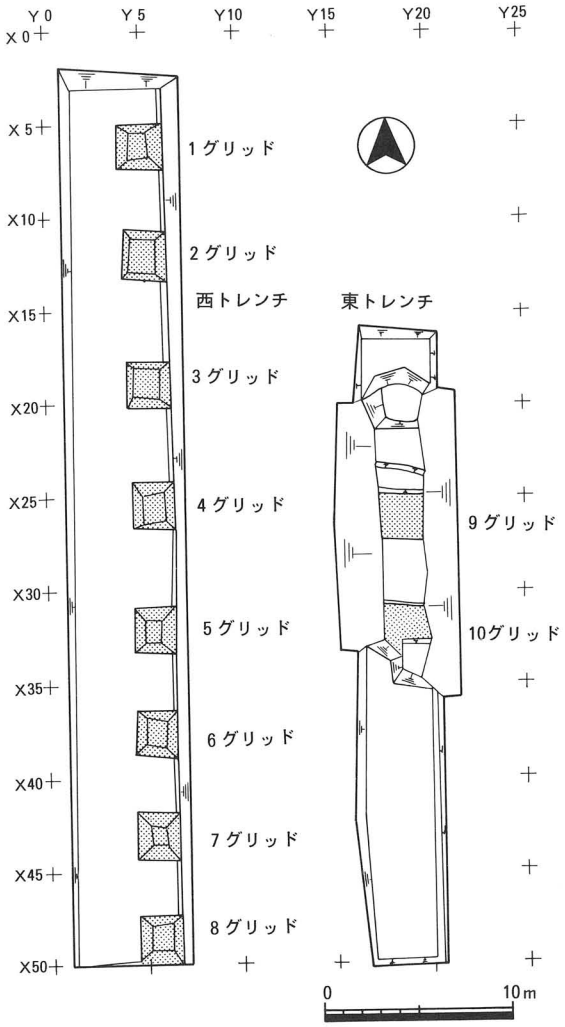


写真２　第９グリッド調査風景（南から）

一方、火山灰分析においては、絶対的な含有量が少なく降灰層準を決定することは困難であるとされつつも、相対的な火山ガラスの含有率のピークと各火山灰の降灰順序を考慮して、第12層～第13層ｂ上部で姶良－Ｔｎ火山灰（ＡＴ）、第12層で鬼界－アカホヤ火山灰（Ｋ－Ａｈ）、第９層ａ～第９層ｃで曾根沼火山灰の３種類の火山灰ガラスが確認されている。ただ、鬼界－アカホヤ火山灰（ｋ－Ａｈ）を起源とする火山ガラスについては、火山噴出物の年代幅が大きい下位層準の姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）と混在して検出される等の特徴が認められた。なお、当調査地の火山灰分析試料採取地点から北西約420ｍの八尾南遺跡第８次調査（ＹＳ87－８）で実施した火山灰分析においても、同様の成果が得られており、約1.5万年の年代差をもつ火山ガラスが同一層中に混在して出土する堆積環境の変化を各分野との相互研究の中で、明晰にする必要があろう。



第18図　下層調査グリッド設定図

第３章　まとめ

今回の調査では、弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式新段階）から弥生時代中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ様式）に比定される遺構・遺物を検出した。

弥生時代前期新段階に比定される遺構としては、西トレンチで検出したＳＤ－３があるのみで、不明な点が多い。また、遺物包含層である４層からも、当該期に比定される遺物が数点出土した程度であることから、この期に集落の存在が認められるものの、当調査地付近は居住域

の中心的な位置からは離れた地点にあったようである。既往調査では、当調査地から北西250ｍ地点で実施された第５次調査（ＹＳ86－５）[註1]で、前期古段階～新段階の掘立柱建物群・甕棺１基・しがらみ１箇所が検出されているほか、さらに南側に接する位置で実施された第15次調査（ＹＳ90－15）[註2]では、前期古段階～中段階の土器類が多量に出土した自然河川が検出されており、これらの調査地の近隣において、当該期の集落が存在したものと推定されている。

弥生時代中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ様式）の遺構については、当調査地の北西270ｍで実施された大阪市の長原遺跡第41次調査（ＮＧ82－41）[註3]で、中期中頃の水田が検出されている以外は不明であった。今回の調査では集落の中核を成す居住域に関連した遺構群が検出されており、長原遺跡第41次調査（ＮＧ82－41）で検出された水田もこれらの集落の生産遺構であった可能性が高い。

註

註１　駒沢　敦　1988「７　八尾南遺跡（第５次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告16　㈶八尾市文化財調査研究会

註２　青木勘時　1990「６　八尾南遺跡（ＹＳ89－15）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告28　㈶八尾市文化財調査研究会

註３　大阪市教育委員会・㈶大阪市文化財協会　1983『大阪市土地開発公社川辺市営住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査の現地説明会資料』

付章　八尾南遺跡第17次調査の火山灰分析

株式会社京都フィッション・トラック
檀原　　徹

1．試　　料

今回の分析試料は、八尾南遺跡第17次調査に伴い財団法人八尾市文化財調査研究会の発掘担当者の手により採取された柱状土層試料（巻末写真参照）である。この試料は、土層区分および層厚を考慮して同担当者の指示により室内でさらにサンプリングされ以下の分析に供された。なお試料の採取層準は、測定データを総合的にまとめた図１（Ｐ173・174）の図中に示されている。

2．分析方法

試料の分析は、以下のフローチャートに従い行った。

次に処理工程について説明を加える。

(1)　色調判定

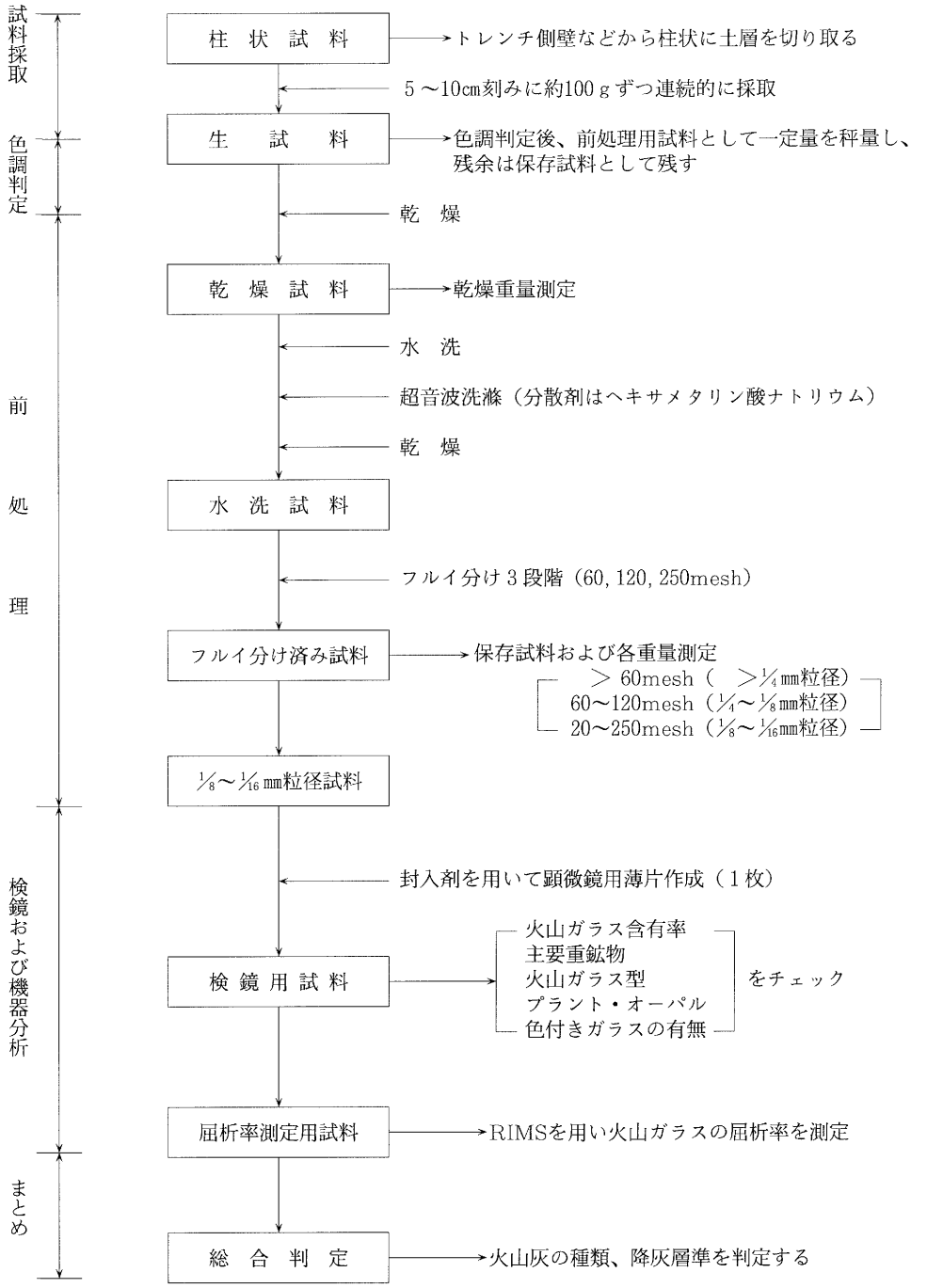
未処理試料50～100ｇを白紙上にとり、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）により判定表示する。

(2)　前処理

まず半湿潤状態の生試料を30.0ｇ秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、２ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し、超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度１～２％程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、３段階の篩別（60，120，250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250 mesh（1/8～1/16㎜）粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（Nd＝1.54）を用いて岩石用薄片を作成した。

(3)　重鉱物分析

主要重鉱物（カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イディングサイト等）※(1)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成



土壌中火山灰（火山ガラス）抽出分析処理順序表

分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。なお重鉱物分析は横山・楠木（1969）※(2)および吉川（1976）※(3)に準拠した。

(4)　火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

①火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し、各含有率を測定した。

②火山ガラス型

吉川（1976）の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

③プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

④色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付ガラスには、スコリア（塩基性火山砕屑物）中にしばしば含まれる赤褐，褐，黄，緑色のガラスは含まれない。

(5)　火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製・保存された120～250mesh（1/8 ～ 1/16 mm）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS 86）※(4)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

なお具体的に測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、次に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（Series および Sample Name）が印刷され、Immersion Oil は測定に使用した浸液の種類を示す。Nd の式はその浸液温度から屈折率を換算するもの、Nd は屈折率、t は温度を示す。この式は一次式であり火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度が測定によって得られるので、この式から火山ガラスの屈折率が計算される。

（As.＋De.）/ 2 は合致温度を上昇させた時（Asceent）と下降（Descent）の平均値として求めた時の意味であるが、繁雑さを避けるため測定温度は表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみが表示されている。測定された屈折率値は最終的に Total の項にまとめられる。

count，min，max，range，mean，st，dev，skew はそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、

最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率の histogram の図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。

＊一つが１個の火山ガラスである。

３．分析結果および考察

今回得られた分析結果は集約され、前掲の図１に表示されている。これらの分析情報の中で考古学的に価値をもつものは、編年上意味のあるテフラ（広域テフラ）の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壌中に含まれる重鉱物の分析が広く行われているが、重鉱物分析結果をテフラ降灰層準との関係で議論する場合には十分な注意が必要である。その理由は、土壌中の重鉱物は母岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源とのみ特定することができないからである。しかも同一種類の鉱物でもその組成上かなりの多様性をもつことが普通であり、純粋にテフラ起源の重鉱物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉱物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に注目すると、今回の試料中には少なくとも３種類の火山ガラスが識別される。それらは、各火山ガラスの特徴をもとに近畿地方でのテフラ・カタログ（表１）や今回の分析結果（表２）と対照すると、降灰年代の古いものから姶良－Tn 火山灰ＡＴ（BB55），鬼界－アカホヤ火山灰Ｋ－Ａｈ（B5－3（U）），曽根沼火山灰（BB7）※(5)(6)に対比するのが自然である。ただし３火山灰とも絶対的な含有率は低く、いずれも降灰層準を決定することは困難である。しかし相対的な含有率のピークと各火山灰の降灰順序を考慮すると、およその降灰層準の認定は不可能ではないと判断される。

次にこれらの対比にもとづき、今回の分析結果とその解釈を一覧表で示す（表２）。

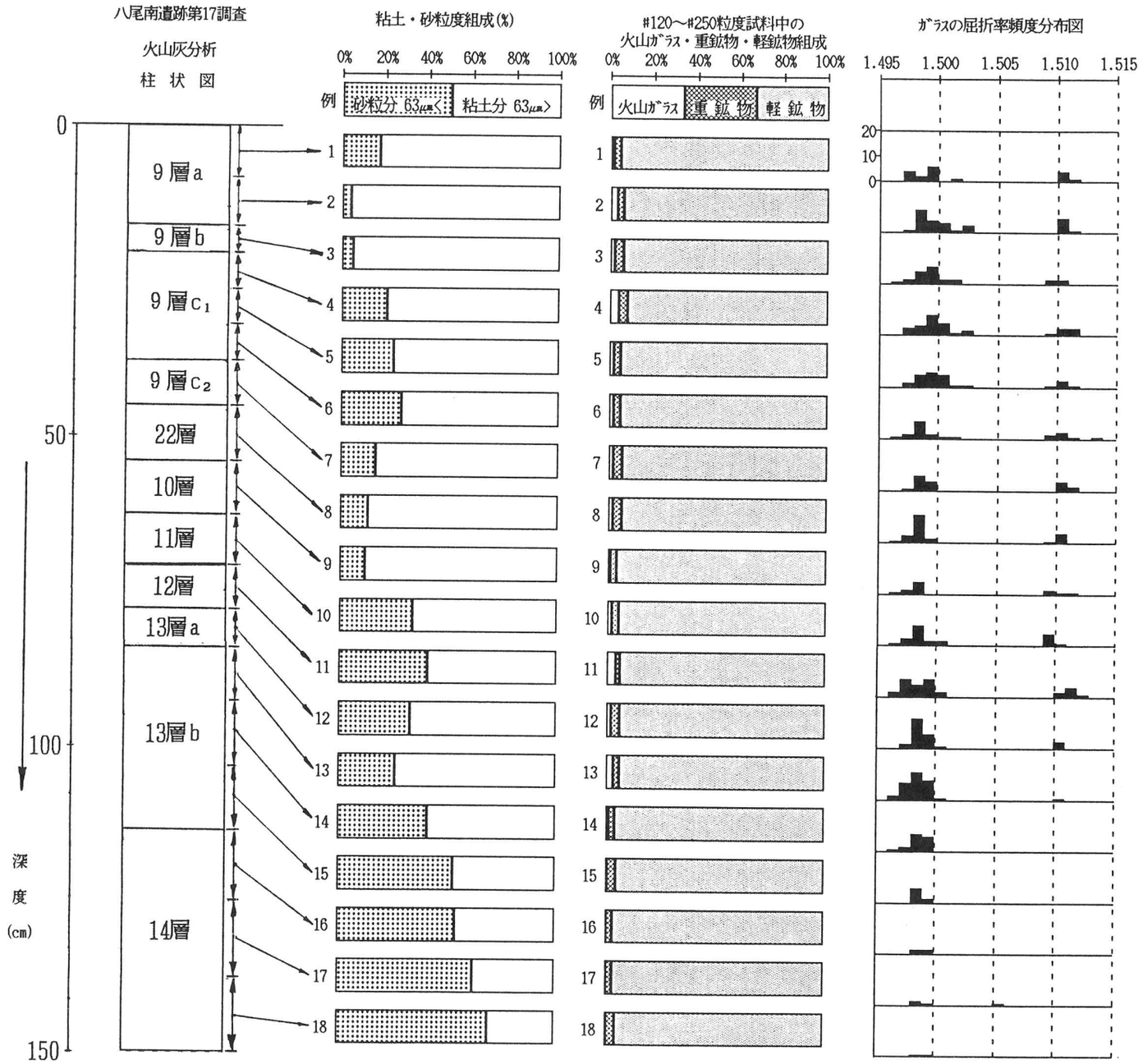
※(1)　町田瑞男・村上雅博・斎藤幸治（1983）：南関東の火山灰層中の変質鉱物“イディングサイト”について．第四紀研究．22(1)，69－76.

※(2)　横山卓雄・楠木幹浩（1969）：鍵層としての火山灰層，特に大阪層群の火山灰について．同志社大学理工研報告，９，58－93.

※(3)　吉川周作（1976）：大阪層群の火山灰層について．地質学雑誌．82(8)，479－515.

※(4)　横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究．25(1)，21－30.

※(5)　竹村恵二・檀原　徹（1988）：土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年－温度変化型屈折率測定装置を使用して－



*1 主要重鉱物および備考	*2 PO含有(%)	*3 *4 主要火山ｶﾞﾗｽ型	色付ｶﾞﾗｽの有無
GHo. Opq. Zr. Opx. Bi.	1	Hb. Ha. Cb. Ca.	＋
GHo. Opq. Opx. Zr. BHo. Bi.	5	Hb. Ha. Cb. Ca.	＋
GHo. Opq. BHo. Zr. Bi.	3	Hb. Ha. Cb.	＋
GHo. Opq. Zr. BHo. Bi.	4	Hb. Ha. Cb. It. Ca.	＋
GHo. Opq. Opx. Zr. BHo.	2	Hb. Ha. Cb.	＋
GHo. Opq. Zr. Opx. BHo. Cpx.	2	Hb. Ha. Cb.	＋
GHo. Opq. Zr. Cpx. BHo. Bi.	1	Hb. Ha. Cb.	＋
GHo. Opq. Zr. Opx. BHo. Bi.	5	Hb. Ha. Cb.	＋
GHo. Opq. Cpx. BHo. Zr.	3	Hb. Ha. Cb.	＋
GHo. Opq. Zr. Opx. Cpx.	2	Hb. Cb. Ha.	＋
GHo. Opq. Zr. BHo. Opx.	2	Hb. Ha. Cb. 亀ノ甲gl.	＋
GHo. Opq. Opx. Zr. BHo. Zeolite含む	1	Hb. Ha. Cb. 亀ノ甲gl.	＋
GHo. Opq. Zr. Opx. BHo. Zeolite含む	＋	Hb. Ha. Cb. Ca.	－
GHo. Opq. Zr. Cpx.	＋	Hb. Ha. Cb.	－
GHo. Opq. Zr. Opx.	＋	Hb. Ha.	－
GHo. Opq. Zr. Opx.	＋	Hb.	＋
GHo. Opq. Zr. Opx. Bi.	＋	Hb. Cb.	－
GHo. Opq. Zr. Opx. BHo. Bi.	＋	Hb. Ha. Cb.	－

図１．八尾南遺跡第17次調査（ＹＳ91－17）
西トレンチ第４グリッド南壁柱状試料（148cm）
試料採取層準土層模式柱状図および分析結果

＊１　主要重鉱物の略称と鉱物名
Ol：カンラン石　Opx：斜方輝石　Cpx：単斜輝石　GHo：緑色普通角閃石　BHo：褐色普通角閃石
Bi：黒　雲　石　Gar：ザクロ石　Zr　：ジルコン　Id　：イディングサイト　Opq　：不 透 明 鉱 物
＊２　PO：プラント・オパール含有率 or 有無
＊３　主要ガラス型の名称（吉川，1976）
Ha,Hb：扁平型（バブルウォール型）　Ca,Cb：中間型（軽石型）　Ta,Tb：多孔質型（軽石・繊維状型）
＊４　（吉川，1976）以外のガラス型の略称
SG：スコリア質ガラス　It：不規則型

考古学と自然科学　第20号　日本文化財学会誌，35－50.

※(6)　町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重雄（1984）：テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－．古文化財の自然科学的研究．869－928.

表1．各遺跡より検出した火山ガラスの特性と琵琶湖ボーリングの火山灰、広域テフラの特性との比較（竹村・橿原，1988年）

Table 1. Comprison among characteristics of volcanic glasses included in columnar samples at archaeological sites and those of volcanic ashes in Lake Biwa drilling samples and widespread tephras.

比較試料＼項目	テフラ名・試料名	岩石と鉱物組成	^{14}C年代（BP）	火山ガラスの色と形	火山ガラスの屈折率レンジ（モード）	文献
鳥浜	No.6	――	――	T, C	1.499−1.503 (1.501−1.503)	＊1
	No.22	――	――	Ha, Hb (br)	1.510−1.512	＊1
	No.49	軽石質・af, Ho, Bi	――	T, C	1.521−1.524 (1.521−1.523)	＊1
	――	――	――	――	――	
	56-54, 51, 50, 48-27	――	――	Ha, Hb	1.497−1.501 (1.498−1.500)	＊1
板井	――	――	――	――	――	
	――	――	――	――	――	
	――	――	――	――	――	
	P11 No.18	結晶質・Ho, Opx	19,600−20,400	T	1.501−1.504 (1.502−1.504)	＊2
	P11 No.10	ガラス質	21,500−23,600	Ha, Hb>C, T	1.499−1.502 (1.500−1.501)	＊2
京大構内	――	――	――	――	――	
	No.1	――	――	Ha, Hb (br)	1.508−1.512 (1.509−1.511)	＊1
	――	――	――	――	――	
	――	――	――	――	――	
	No.3, 4, 8, 9, total	――	――	Ha	1.498−1.501	＊1
琵琶湖	BB 7	――	――	C, T	1.499−1.504	＊3
	P 5−3 (U)	ガラス質・Opx, Cpx	――	A (br)	1.509−1.513 (1.509−1.512)	＊4, 5
	BB 23	軽石質	――	B, C	1.520−1.524 (1.502−1.504)	＊4, 5
	BB 51	結晶質・Ho, Opx	――	C	1.501−1.505	＊4, 5
	BB 55	ガラス質・Opx, Cpx, Ho	――	A>B	1.499−1.502 (1.500−1.501)	＊4, 5
広域テフラ	――	――	――	――	――	
	K−Ah	ガラス質・Opx, Cpx	6,300	bw>pm (br)	1.508−1.514 (1.501)	＊6
	U−Oki	軽石質・af, Bi, Ho	9,300	pm	1.517−1.524	＊7
	大山ホーキ	結晶質・Ho, Opx, Bi	20,000	――	――	＊8
	AT	ガラス質・Opx, Cpx, Ho	21,000−22,000 (24,720)	bw>pm	1.498−1.501 (1.500)	＊9 ＊10

af：アルカリ長石，Opx：斜方輝石，Cpx：単斜輝石，Ho：角閃石，Bi：黒雲母，bw：バブルウォール型，pm：軽石型，br：色付きガラス．
＊1：竹村・橿原（1988），＊2：竹村・橿原（1987），＊3：YOSHIKAWA（1981），＊4：横山（1973），＊5：横山（1976），
＊6：町田・新井（1978），＊7：新井ほか（1981），＊8：町田・新井（1979），＊9：町田・新井（1976），＊10：松本ほか（1987）．

表２．八尾南遺跡第17次調査火山ガラス濃集層準とその特徴

火山ガラス検出層準					屈折率	主な火山	※(6)	※(5)(6)	備考
分布層準		最大濃集層準			(Nd)	ガラス型	対比される広域テフラ	降灰年代	
サンプルNo.	深度	サンプルNo.	深度	地層名					
No.1～No.6	0cm～38cm	――	――	9層a～9層c	1.499～1.503	C型（中間型）	三瓶山 or 大山系 曽根沼火山灰 BB7	3,000 B.P.	No.1～6試料で少量検出されたのみであり、降灰層準決定は困難。降灰層準に近いという状況証拠を与えるに止まるが，火山ガラスの特徴と層序から曽根沼火山灰の可能性がある。
No.1～No.13	0cm～96cm	No.11	75cm～84cm	(12層？)	1.508～1.514 最頻値＝1.510	H型（扁平型）	鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah） B5－3（U）	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス（AT）と混在するがNo.11試料層準で相対的な含有量が多く，降灰層準に近いと判断される。ガラス形態はH型を主とし濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率が高いのが特徴。最濃集層準上位でプラント・オパール含有量が多くなる。
No.1～No.18	0cm～148cm	No.1～No.13	75cm～96cm	12層～13層b 上部	1.498～1.501 最頻値＝1.500	H型（扁平型）	始良Tn火山灰（AT） BB55	21,000～22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出される。No.11～13試料で相対的に濃集するが，含有量が少なく降灰層準と断言することは困難。降灰層準に近いとのみ言いうる。無色透明な扁平（バブル・ウォール）型ガラスを主とし亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。

※(5)竹村恵二・檀原　徹（1988）：土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年－度変化型析率測定装置を使用して－．考古学と自然科学　第20号　日本文化財科学会誌．35－50.

(6)町田　洋ほか（1984）：テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－．古文化財の自然科学的研究．865－928.

No.	試料名	重鉱物組成 ※(1)											備考
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Id	Zr	Bi	Ap	Total	
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	八尾南遺跡 9層a 上 0～8 cm	0	3	0	0	124	36	0	4	3	0	170	
		0.0	1.8	0.0	0.0	72.8	21.2	0.0	2.4	1.8	0.0	100.0	
2	八尾南遺跡 9層a 下 8～16 cm	0	1	0	1	156	36	0	1	5	0	210	
		0.0	0.5	0.0	0.5	78.0	18.0	0.0	0.5	2.5	0.0	100.0	
3	八尾南遺跡 9層b 16～20 cm	0	0	0	3	174	15	0	2	6	0	200	
		0.0	0.0	0.0	1.5	87.0	7.5	0.0	1.0	3.0	0.0	100.0	
4	八尾南遺跡 9層c_1 上 20～26 cm	0	0	0	1	151	42	0	4	2	0	200	
		0.0	0.0	0.0	0.5	75.5	21.0	0.0	2.0	1.0	0.0	100.0	
5	八尾南遺跡 9層c_1 中 26～32 cm	0	3	0	1	139	26	0	3	0	0	172	
		0.0	1.7	0.0	0.6	80.9	15.1	0.0	1.7	0.0	0.0	100.0	
6	八尾南遺跡 9層c_1 下 32～38 cm	0	2	1	2	160	22	0	3	0	0	190	
		0.0	1.1	0.5	1.1	84.1	11.6	0.0	1.6	0.0	0.0	100.0	
7	八尾南遺跡 9層c_2 38～46 cm	0	0	1	1	134	17	0	2	3	0	158	
		0.0	0.0	0.6	0.6	84.8	10.8	0.0	1.3	1.9	0.0	100.0	
8	八尾南遺跡 22層 46～55 cm	0	1	0	1	166	28	0	2	2	0	200	
		0.0	0.5	0.0	0.5	83.0	14.0	0.0	1.0	1.0	0.0	100.0	
9	八尾南遺跡 10層 55～64 cm	0	0	2	2	164	31	0	1	0	0	200	
		0.0	0.0	1.0	1.0	82.0	15.5	0.0	0.5	0.0	0.0	100.0	
10	八尾南遺跡 11層 64～75 cm	0	3	1	0	128	42	0	6	0	0	180	
		0.0	1.7	0.6	0.0	71.1	23.3	0.0	3.3	0.0	0.0	100.0	

注. ※(1) 上段 計測粒子数　　下段 %

なお各鉱物とその略称は、以下のように対応します。

Ol：カンラン石,　Opx：斜方輝石,　Cpx：単斜輝石,　BHo：褐色普通角閃石,

Gho：緑色普通角閃石, Opq：不透明(鉄)鉱物,　Id：イディングサイト,　Zr：ジルコン,

Bi：黒 雲 母,　Ap：アパタイト,　Gar：ザクロ石,　VG：火山ガラス,

No.	試料名	重鉱物組成※(1)											備考
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Id	Zr	Bi	Ap	Total	
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
11	八尾南遺跡 12層 75～82 cm	0	2	0	4	158	15	0	6	0	0	185	
		0.0	1.1	0.0	2.2	85.4	8.1	0.0	3.2	0.0	0.0	100.0	
12	八尾南遺跡 13層a 82～88 cm	0	4	0	2	160	31	0	3	0	0	200	zeolite? 含む
		0.0	2.0	0.0	1.0	80.0	15.5	0.0	1.5	0.0	0.0	100.0	
13	八尾南遺跡 13層b 上 88～96 cm	0	2	0	2	152	36	0	8	0	0	200	zeolite? 少量含む
		0.0	1.0	0.0	1.0	76.0	18.0	0.0	4.0	0.0	0.0	100.0	
14	八尾南遺跡 13層b 中 96～105 cm	0	0	2	0	149	41	0	8	0	0	200	
		0.0	0.0	1.0	0.0	74.5	20.5	0.0	4.0	0.0	0.0	100.0	
15	八尾南遺跡 13層b 下 105～115cm	0	2	0	0	105	40	0	5	0	0	152	
		0.0	1.3	0.0	0.0	69.1	26.3	0.0	3.3	0.0	0.0	100.0	
16	八尾南遺跡 14層 上 115～125cm	0	1	0	0	142	40	0	8	0	0	191	
		0.0	0.5	0.0	0.0	74.4	20.9	0.0	4.2	0.0	0.0	100.0	
17	八尾南遺跡 14層 中 125～135cm	0	1	0	0	100	25	0	5	3	0	134	
		0.0	0.7	0.0	0.0	74.7	18.7	0.0	3.7	2.2	0.0	100.0	
18	八尾南遺跡 14層 下 135～148cm	0	2	0	1	95	50	0	7	5	0	160	
		0.0	1.3	0.0	0.6	59.3	31.3	0.0	4.4	3.1	0.0	100.0	
	以下余白												

注. ※(1)　上段　計測粒子数　　下段　%

なお各鉱物とその略称は、以下のように対応します。

Ol：カンラン石,　Opx：斜方輝石,　Cpx：単斜輝石,　BHo：褐色普通角閃石,

Gho：緑色普通角閃石,　Opq：不透明(鉄)鉱物,　Id：イディングサイト,　Zr：ジルコン,

Bi：黒　雲　母,　Ap：アパタイト,　Gar：ザクロ石,　VG：火山ガラス,

火山ガラス屈折率測定結果一覧表

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均量 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
1	八尾南遺跡 9層a 上 0～8 cm	1.4973 (1.5013) 1.5100	1.4997 (1.5013) 1.5114	1.4985 1.5013 1.5107	12 1 5	1.499≦Nd<1.500	H型主C型
2	八尾南遺跡 9層a 下 8～16 cm	1.4979 1.5017 (1.5101)	1.5009 1.5023 (1.5114)	1.4991 1.5021 1.5106	19 4 1	1.498≦Nd<1.499	H型主C型
3	八尾南遺跡 9層b 16～20 cm	1.4964 1.5008 1.5096	1.5002 1.5017 1.5107	1.4988 1.5013 1.5101	16 3 4	1.499≦Nd<1.500	H型主C型
4	八尾南遺跡 9層c_1 上 20～26 cm	1.4972 1.5023 1.5097	1.5012 1.5025 1.5113	1.4993 1.5024 1.5106	21 2 7	1.499≦Nd<1.500	H型主C型
5	八尾南遺跡 9層c_1 中 26～32 cm	1.4975 1.5016 1.5093	1.5004 1.5024 1.5112	1.4992 1.5020 1.5104	18 2 5	1.499≦Nd<1.500	H型主C型
6	八尾南遺跡 9層c_1 下 32～38 cm	1.4965 (1.5015) 1.5094	1.5000 (1.5015) 1.5136	1.4984 1.5015 1.5107	13 1 7	1.498≦Nd<1.499	H型主C型
7	八尾南遺跡 9層c_2 38～46 cm	1.4978 1.5104	1.4993 1.5114	1.4987 1.5109	11 6	1.498≦Nd<1.499	H型主C型
8	八尾南遺跡 22層 46～55 cm	1.4968 1.5098	1.4997 1.5104	1.4984 1.5102	17 5	1.498≦Nd<1.499	H型主C型
9	八尾南遺跡 10層 55～64 cm	1.4969 1.5099	1.4989 1.5112	1.4980 1.5104	8 4	1.498≦Nd<1.499	H型主C型
10	八尾南遺跡 11層 64～75 cm	1.4969 1.5101	1.5002 1.5113	1.4985 1.5107	16 6	1.498≦Nd<1.499	H型主C型

※ H：扁平型
C：中間型
T：多孔質型
（吉川，1976）

火山ガラス屈折率測定結果一覧表

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均量 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
11	八尾南遺跡 12層 75～82 cm	1.4967 1.5103	1.5005 1.5123	1.4985 1.5113	23 7	1.497≦Nd＜1.498 1.499≦Nd＜1.500	H型主C型
12	八尾南遺跡 13層a 82～88 cm	1.4971 1.5101	1.5003 1.5109	1.4988 1.5104	21 3	1.498≦Nd＜1.499	H型主C型
13	八尾南遺跡 13層b　上 88～96 cm	1.4962 (1.5106)	1.5002 (1.5106)	1.4984 1.5106	29 1	1.498≦Nd＜1.499	H型主C型
14	八尾南遺跡 13層b　中 96～105 cm	1.4969	1.4998	1.4987	16	1.498≦Nd＜1.499	H型主C型
15	八尾南遺跡 13層b　下 105～115 cm	1.4980	1.4997	1.4988	8	1.498≦Nd＜1.499	H型
16	八尾南遺跡 14層　上 115～125 cm	1.4981	1.4995	1.4988	4	― ≦Nd＜ ―	H型
17	八尾南遺跡 14層　中 125～135 cm	1.4986 (1.5053)	1.4990 (1.5053)	1.4988 1.5053	3 1	― ≦Nd＜ ―	H型C型
18	八尾南遺跡 14層　下 135～148 cm	1.4981	1.4990	1.4986	2	― ≦Nd＜ ―	H型C型
	以下余白						

※　H：扁平型
　　C：中間型
　　T：多孔質型
　　（吉川，1976）

第１表　八尾南遺跡第17次調査火山灰分析

通番No.	試料名	乾燥重量（g）	粒度組成（g） 砂粒分(mesh size) >60	～120	～250	粘土分 <250	鉱物・ガラス組成(%) 火山ガラス	重鉱物	軽鉱物	＊1 主要重鉱物および備考	PO ＊2 含有(%)	＊3 ＊4 主要火山ガラス型	色付ガラス有無
1	9層a上	21.4	2.1	0.8	0.8	17.7	1.5	3.0	95.5	GHo. Opq. Zr. Opx. Bi.	1	Hb. Ha. Cb. Ca.	+
2	9層a下	20.8	0.2	0.1	0.5	20.0	3.0	3.0	94.0	GHo. Opq. Opx. Zr. BHo. Bi.	5	Hb. Ha. Cb. Ca.	+
3	9層b	21.5	0.1	0.2	0.8	20.4	2.0	4.0	94.0	GHo. Opq. BHo. Zr. Bi.	3	Hb. Ha. Cb.	+
4	9層c_1上	22.5	1.2	0.8	2.7	17.8	4.0	4.0	92.0	GHo. Opq. Zr. BHo. Bi.	4	Hb. Ha. Cb. It. Ca.	+
5	9層c_1中	23.5	1.9	0.9	2.8	17.9	2.0	3.0	95.0	GHo. Opq. Opx. Zr. BHo.	2	Hb. Ha. Cb.	+
6	9層c_1下	24.1	3.2	0.8	2.6	17.5	2.0	3.0	95.0	GHo. Opq. Zr. Opx. BHo. Cpx.	2	Hb. Ha. Cb.	+
7	9層c_2	23.8	1.3	0.5	2.0	20.0	2.0	4.0	94.0	GHo. Opq. Zr. Cpx. BHo. Bi.	1	Hb. Ha. Cb.	+
8	22層	23.4	0.5	0.6	1.9	20.4	2.0	4.0	94.0	GHo. Opq. Zr. Opx. BHo. Bi.	5	Hb. Ha. Cb.	+
9	10層	23.1	0.5	0.6	1.6	20.4	1.0	3.0	96.0	GHo. Opq. Cpx. BHo. Zr.	3	Hb. Ha. Cb.	+
10	11層	24.2	1.8	2.1	4.2	16.1	2.0	3.0	95.0	GHo. Opq. Zr. Opx. Cpx.	2	Hb. Cb. Ha.	+

＊１　各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol;カンラン石　Opx;斜方輝石　Cpx;単斜輝石　GHo;緑色普通角閃石　BHo;褐色普通角閃石

Bi;黒雲母　Gar;ザクロ石　Zr;ジルコン　Id;イディングサイト　Opq;不透明鉱物

＊２　PO含有とはプラント・オパールの含有量（%）を示します。

＊３　火山ガラス型とその略称は吉川（1976）に従い以下のように対応します。

Ha. Hb;扁平型（バブル・ウォール型）　Ca. Cb;中間型（軽石型）　Ta. Tb;多孔質型（軽石型，繊維状型）

＊４　なお、吉川（1976）以外のガラス型について次の略称を用います。

Sg;スコリア質ガラス　It;不規則型

[屈折率値頻度分布]

(No.) 試料名	1 9層a	2 9層a	3 9層b	4 9層c_1	5 9層c_1	6 9層c_1	7 9層c_2	8 22層	9 10層	10 11層
1.495=<Nd<1.496	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.496=<Nd<1.497	0	0	1	0	0	1	0	1	1	1
1.497=<Nd<1.498	4	1	2	3	2	2	1	3	2	3
1.498=<Nd<1.499	2	9	5	4	5	7	6	11	5	8
1.499=<Nd<1.500	6	5	7	8	6	2	4	2	0	2
1.500=<Nd<1.501	0	4	2	5	5	1	0	0	0	2
1.501=<Nd<1.502	1	1	2	1	1	1	0	0	0	0
1.502=<Nd<1.503	0	3	0	2	1	0	0	0	0	0
1.503=<Nd<1.504	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.504=<Nd<1.505	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.505=<Nd<1.506	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.506=<Nd<1.507	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.507=<Nd<1.508	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.508=<Nd<1.509	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.509=<Nd<1.510	0	0	2	1	1	2	0	1	2	5
1.510=<Nd<1.511	4	6	2	3	3	3	4	4	1	1
1.511=<Nd<1.512	1	1	0	3	1	1	2	0	1	0
1.512=<Nd<1.513	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.513=<Nd<1.514	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
1.514=<Nd<1.515	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第２表　八尾南遺跡第17次調査火山灰分析

通番No.	試料名	乾燥重量（g）	粒度組成（g） 砂粒分(mesh size) >60	～120	～250	粘土分 <250	鉱物・ガラス組成(%) 火山ガラス	重鉱物	軽鉱物	＊1 主要重鉱物および備考	PO ＊2 含有(%)	＊3 ＊4 主要火山ガラス型	色付ガラス有無
11	12層	25.1	1.9	2.6	5.8	14.8	4.0	2.0	94.0	GHo. Opq. Zr. BHo. Opx.	2	Hb. Ha. Cb. 亀ノ甲gl.	＋
12	13層a	24.9	1.2	1.9	5.1	16.7	2.0	4.0	94.0	GHo. Opq. Opx. Zr. BHo. ＊	1	Hb. Ha. Cb. 亀ノ甲gl.	＋
13	13層b上	24.3	0.6	1.3	4.5	17.9	3.0	3.0	94.0	GHo. Opq. Zr. Opx. BHo. ＊	＋	Hb. Ha. Cb. Ca.	－
14	13層b中	25.2	0.5	1.8	8.1	14.8	1.0	3.0	96.0	GHo. Opq. Zr. Cpx.	＋	Hb. Ha. Cb.	－
15	13層b下	25.2	0.8	3.0	9.6	11.8	0.5	4.0	95.5	GHo. Opq. Zr. Opx.	＋	Hb. Ha.	－
16	14層上	25.3	2.1	3.7	7.9	11.6	0.2	3.0	96.8	GHo. Opq. Zr. Opx.	＋	Hb.	＋
17	14層中	25.3	2.9	5.0	7.9	9.5	0.2	3.0	96.8	GHo. Opq. Zr. Opx. Bi.	＋	Hb. Cb.	－
18	14層下	25.5	4.7	6.9	6.1	7.8	0.5	4.0	95.5	GHo. Opq. Zr. Opx. BHo. Bi.	＋	Hb. Ha. Cb.	－

＊Zeolite含む

＊１　各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol;カンラン石　Opx;斜方輝石　Cpx;単斜輝石　GHo;緑色普通角閃石　BHo;褐色普通角閃石

Bi;黒雲母　Gar;ザクロ石　Zr;ジルコン　Id;イディングサイト　Opq;不透明鉱物

＊２　PO含有とはプラント・オパールの含有量（%）を示します。

＊３　火山ガラス型とその略称は吉川（1976）に従い以下のように対応します。

Ha. Hb;扁平型（バブル・ウォール型）　Ca. Cb;中間型（軽石型）　Ta. Tb;多孔質型（軽石型、繊維状型）

＊４　なお、吉川（1976）以外のガラス型について次の略称を用います。

Sg;スコリア質ガラス　It;不規則型

[屈折率値頻度分布]

(No.) 試料名	11 12層	12 13層a	13 13層b	14 13層b	15 13層b	16 14層	17 14層	18 14層
1.495＝<Nd<1.496	0	0	0	0	0	0	0	0
1.496＝<Nd<1.497	2	0	2	1	0	0	0	0
1.497＝<Nd<1.498	7	2	7	2	0	0	0	0
1.498＝<Nd<1.499	5	12	11	7	6	2	2	1
1.499＝<Nd<1.500	7	6	8	6	2	2	1	1
1.500＝<Nd<1.501	2	1	1	0	0	0	0	0
1.501＝<Nd<1.502	0	0	0	0	0	0	0	0
1.502＝<Nd<1.503	0	0	0	0	0	0	0	0
1.503＝<Nd<1.504	0	0	0	0	0	0	0	0
1.504＝<Nd<1.505	0	0	0	0	0	0	0	0
1.505＝<Nd<1.506	0	0	0	0	0	0	1	0
1.506＝<Nd<1.507	0	0	0	0	0	0	0	0
1.507＝<Nd<1.508	0	0	0	0	0	0	0	0
1.508＝<Nd<1.509	0	0	0	0	0	0	0	0
1.509＝<Nd<1.510	0	0	0	0	0	0	0	0
1.510＝<Nd<1.511	2	3	1	0	0	0	0	0
1.511＝<Nd<1.512	4	0	0	0	0	0	0	0
1.512＝<Nd<1.513	1	0	0	0	0	0	0	0
1.513＝<Nd<1.514	0	0	0	0	0	0	0	0
1.514＝<Nd<1.515	0	0	0	0	0	0	0	0

写真図版の凡例

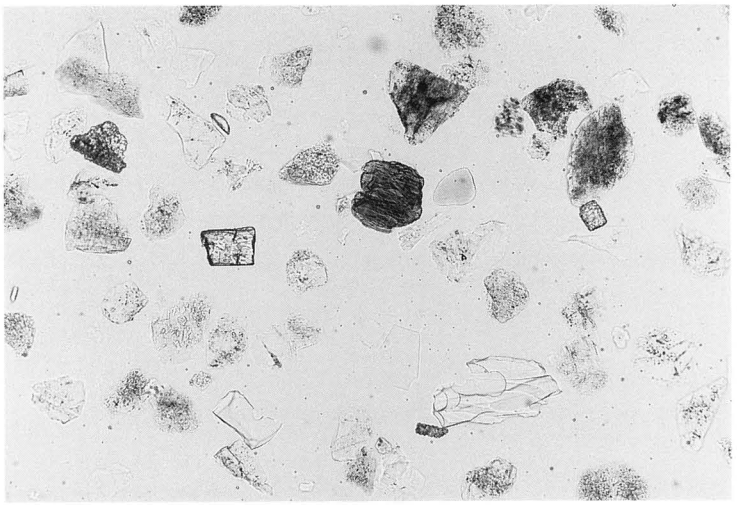
重鉱物

Ol ： カンラン石
Opx ： 斜方輝石
Cpx ： 単斜輝石
GHo ： 緑色普通角閃石
BHo ： 褐色普通角閃石
Opq ： 不透明鉱物
Id ： イディングサイト
Zr ： ジルコン
Bi ： 黒雲母
Ap ： アパタイト
Gar ： ザクロ石

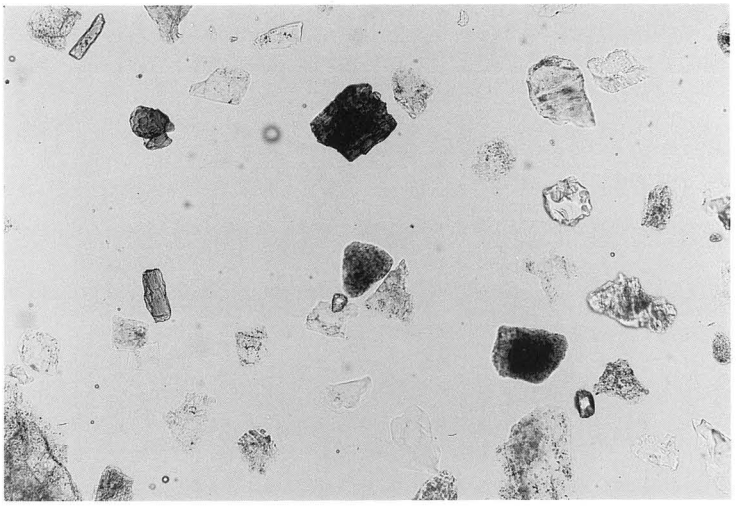
その他

VG ： 火山ガラス
CVG ： 色付火山ガラス
Po ： プラント・オパール

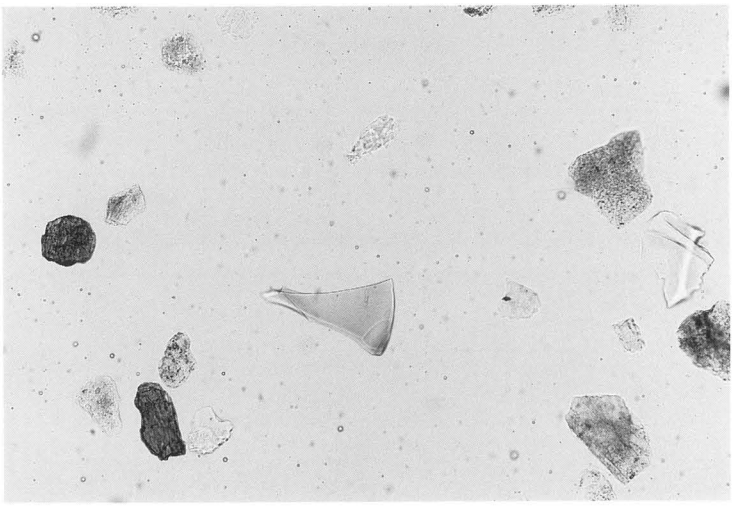
＊但し、写真倍率は焼付ごとに毎回多少の違いが生じるが、およそ70倍程度である。



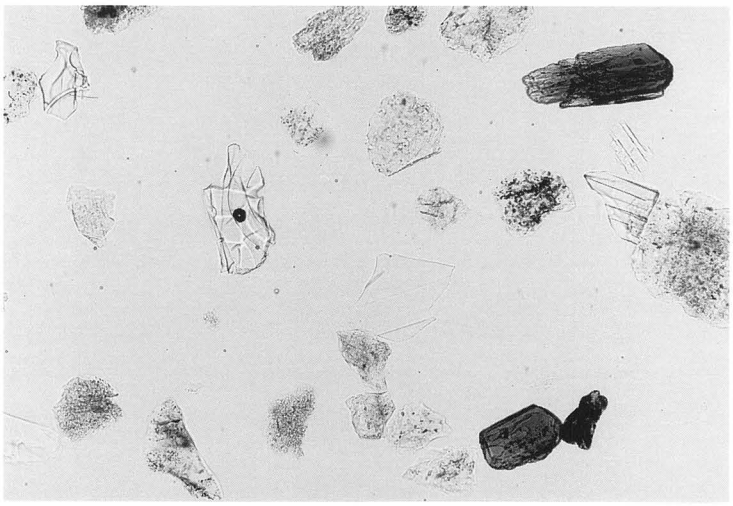
No. 1
9層a　上
0～8　cm



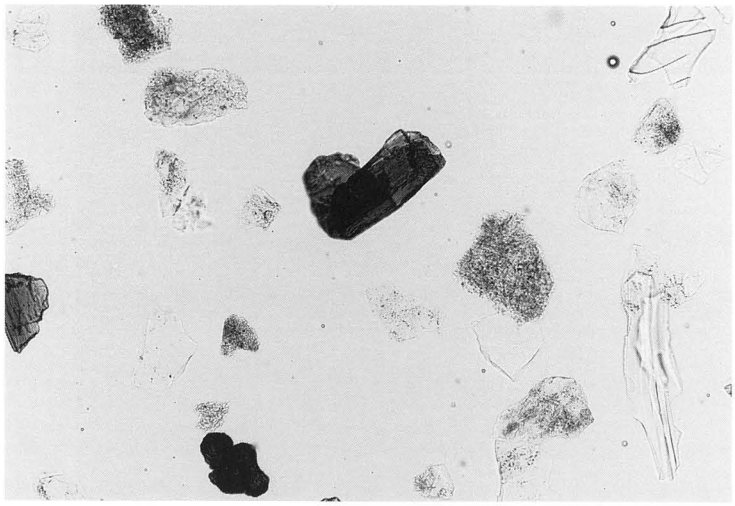
No. 4
9層c_1　上
20～26　cm



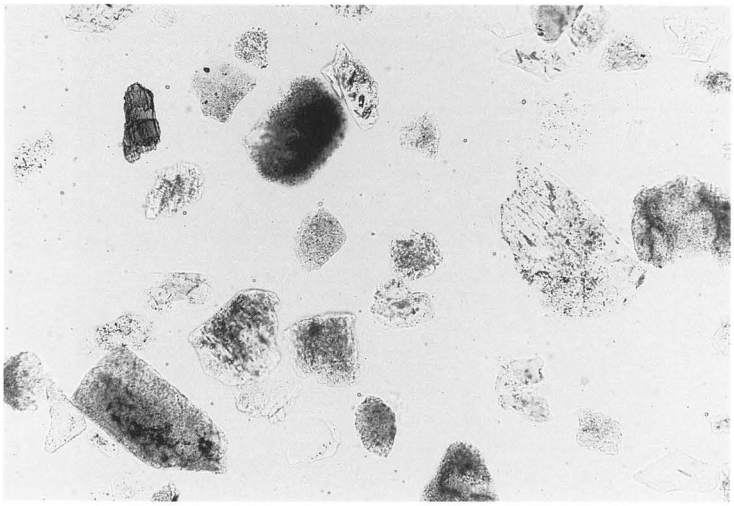
No. 7
9層c_2
38～46　cm



No.11
12層
75～82　cm

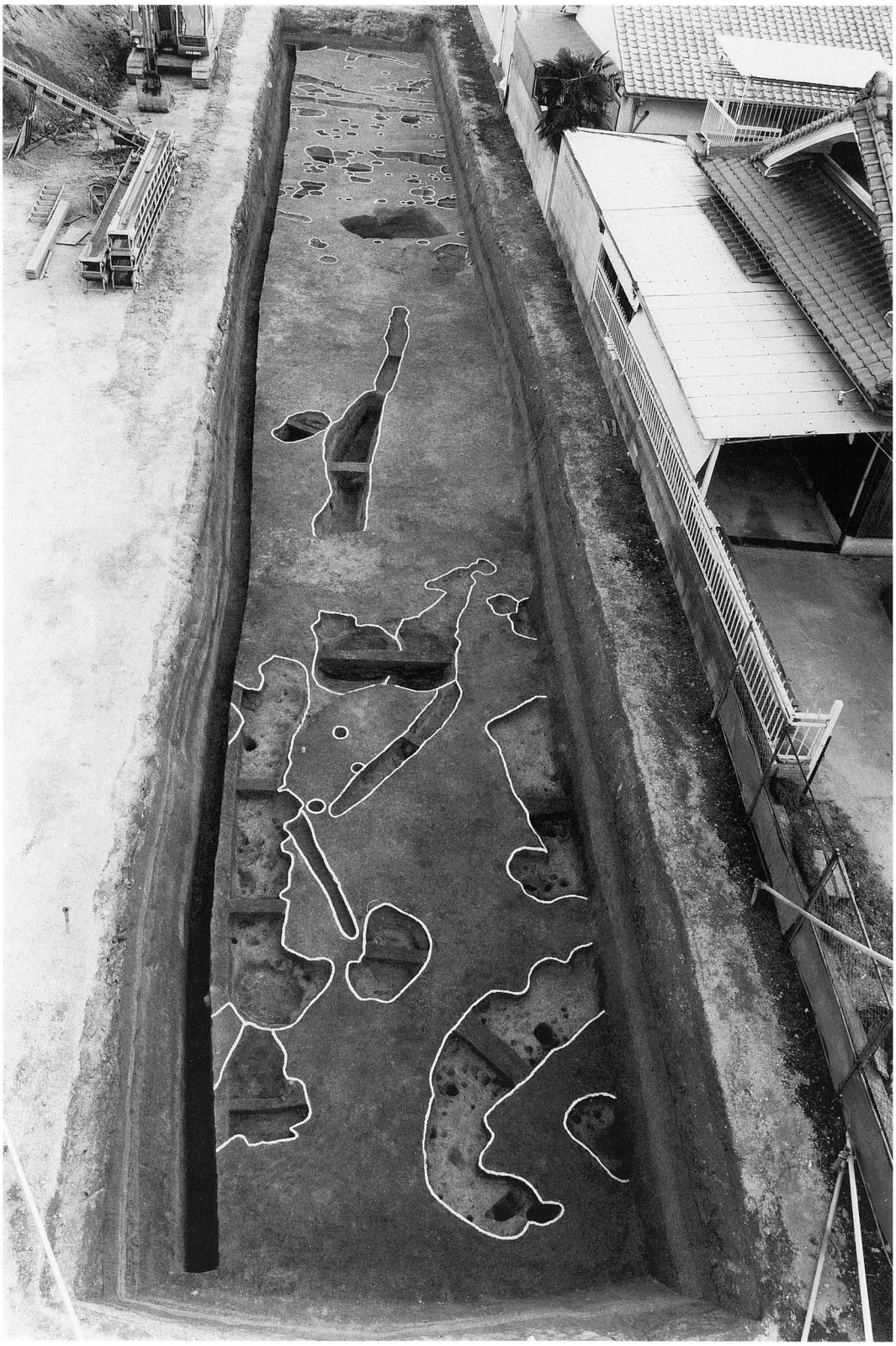


No.13
13層ｂ　上
82～88　cm



No.18
14層　下
135～148　cm

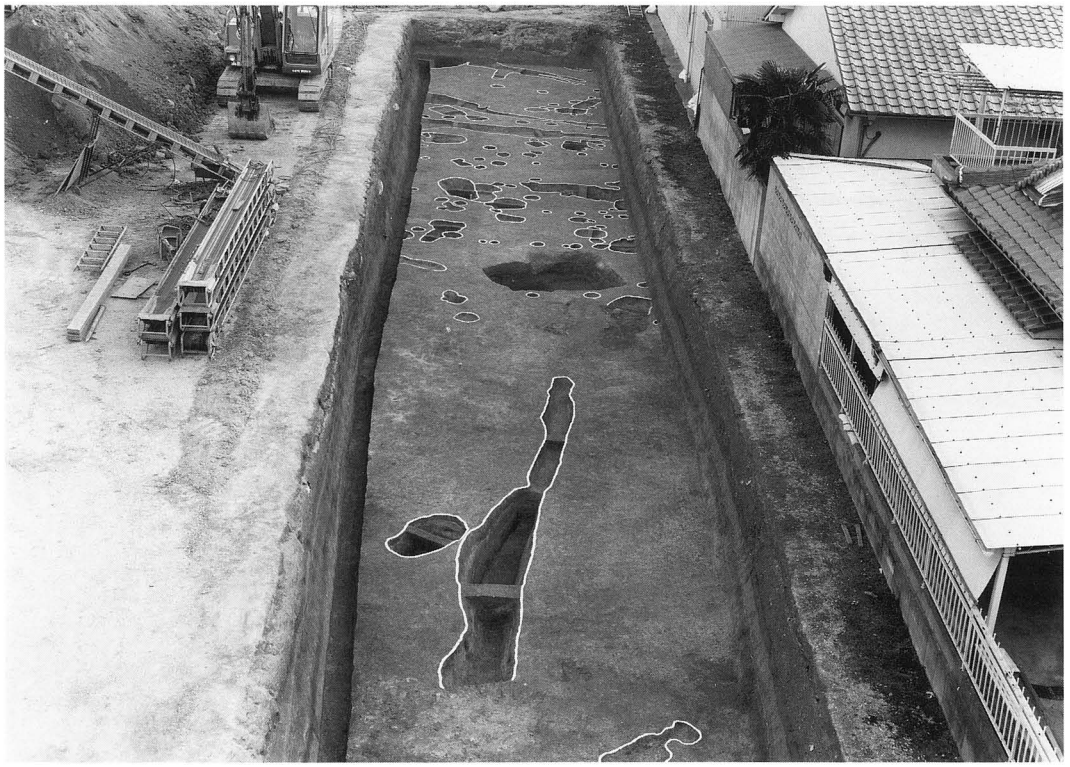
図　　版



西トレンチ全景（北から）

図版二

東トレンチ全景（北から）

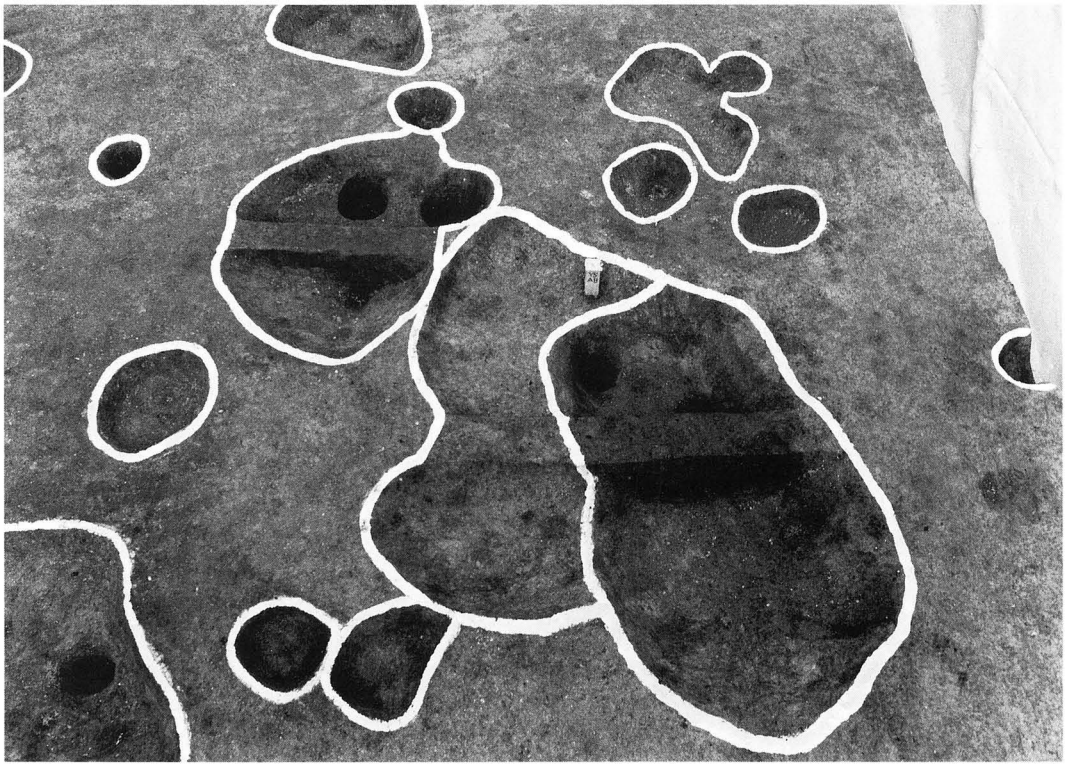


西トレンチ南部遺構検出状況（北から）

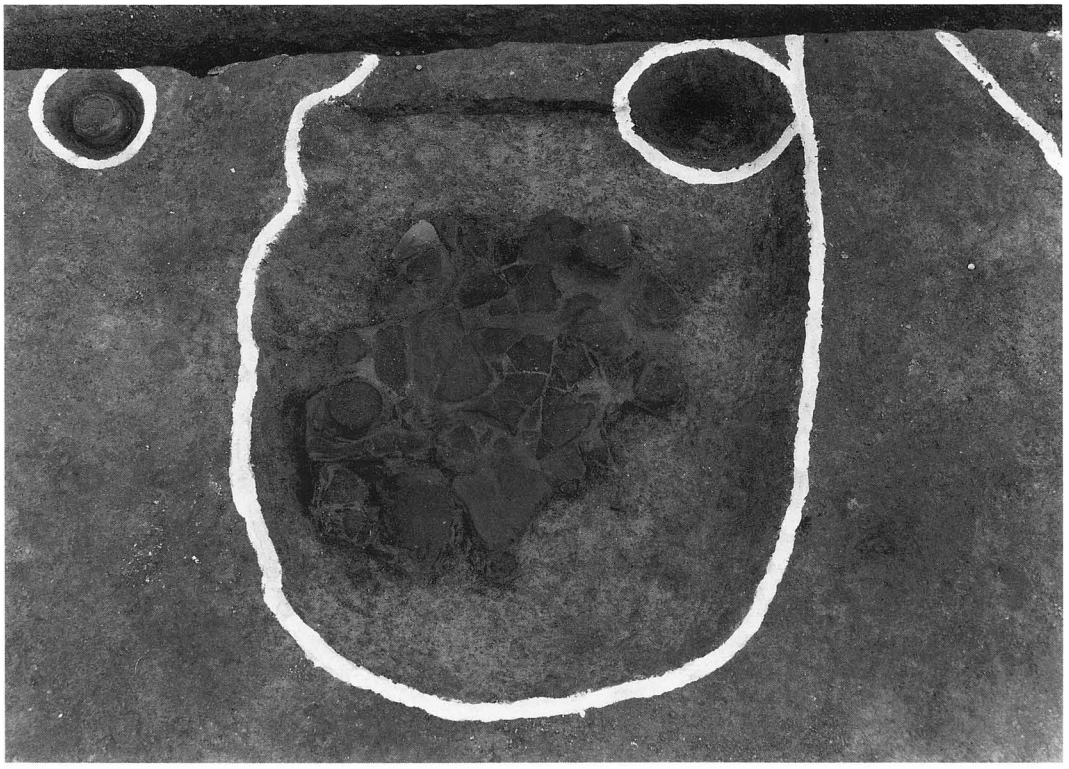
東トレンチ南部遺構検出状況（北から）

西トレンチＳＫ－５（右）・ＳＫ－６（左）検出状況（南から）

西トレンチＳＫ－８検出状況（南から）



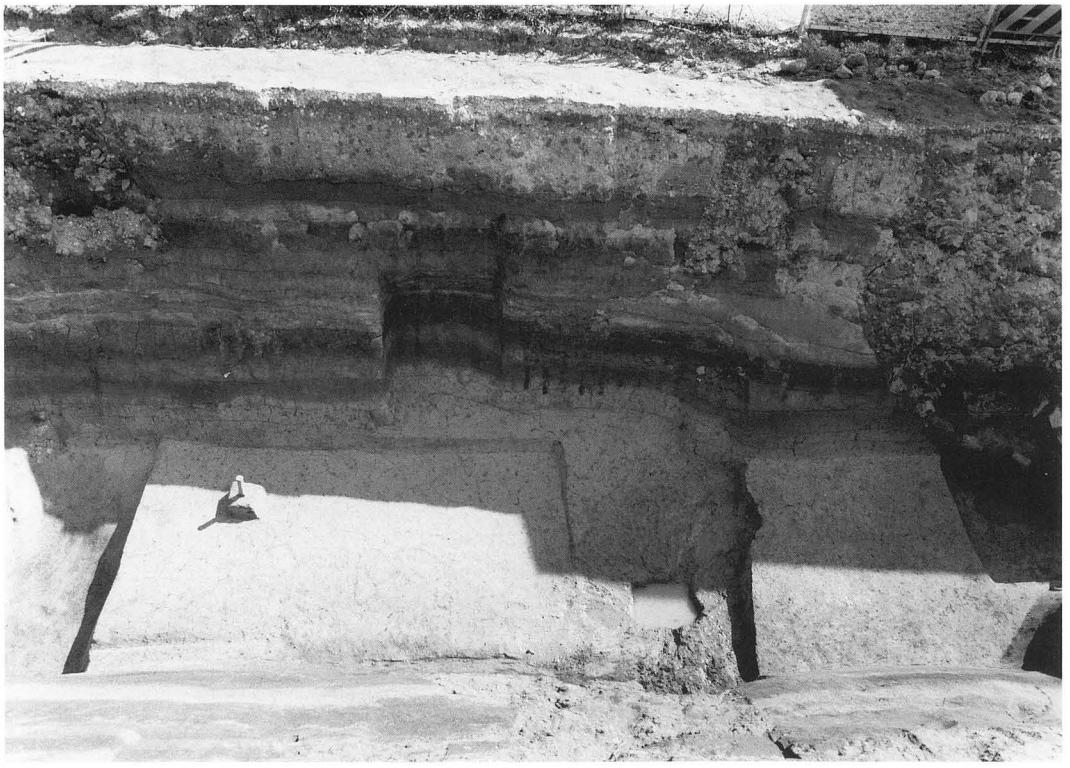
西トレンチＳＫ－14～16検出状況（南から）



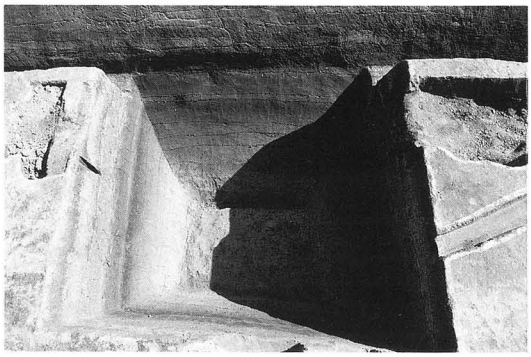
西トレンチＳＫ－19検出状況（西から）

西トレンチ下層確認グリッド
（手前から１～４グリッド）（北から）

西トレンチ下層確認グリッド
（手前から５～８グリッド）（北から）

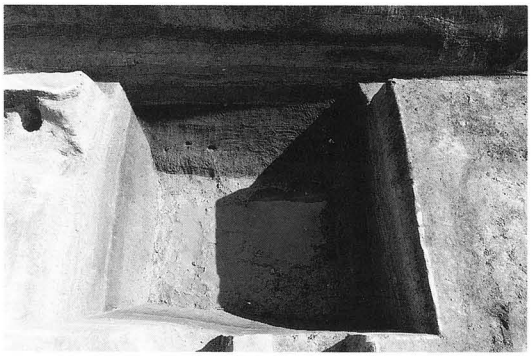


東トレンチ下層確認グリッド（左－９グリッド・右－10グリッド）（西から）



1グリッド

5グリッド

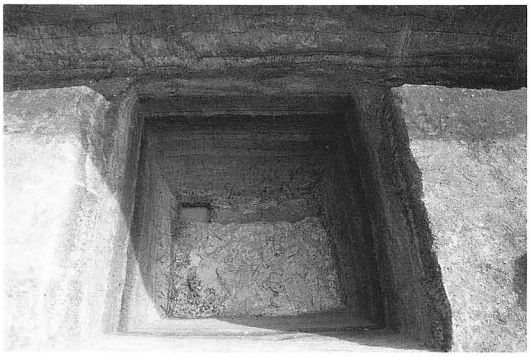


2グリッド

6グリッド

3グリッド

7グリッド



4グリッド

8グリッド

下層確認グリッド（1～8グリッド）